

りませんか。

勝野 六年生の柴山先生ですが、一学期から毎日漢字をどの本でもよいので何回でも書いてくることをやりました。

司会 学芸会や運動会、そして休み時間や農業実習などの学校行事についての思い出がありましたらお話しください。

狐塚 学芸会のことですが、母がいなかった関係上、ボロボロのかすりの着物を着て出ましたが、壇上で歌をうたっているも着物のことばかり気になって、あまり歌えなかったというはすかしい思い出があります。

大竹 私たちの遠足の時には、かすりの着物とはかまで日の丸弁当を持って出かけましたが、その弁当も白い風呂敷に包み背中にせおって行ったものでした。

林 大竹さんが言われたことと同じですが、先生が「並べ」と言われみんなが集まった時、前の子の弁当をおしつぶすことをよくやった楽しい思い出があります。

土屋 運動会では、紺の着物にはかま姿で、木刀を持って白虎隊で色紙吹雪を、散りたる花のかんばしき」の歌に合わせて一斉にまく場面があったがとても美しく、ご父兄の方の拍手も上がりました。

伊藤 昭和八年入学したが、はき物はあみ靴で、六年の遠足で始めてリュックサックを買ってもらったこと。また、学校では年一回展覧会があり、その展覧会に作品



浅野恵美子

を並べてもらってうれしかったこともありました。

浅野 大正十五年四月の入学ですが、大正天皇がおかくれになった十二月二十五日の一・二日あとに、夜の十一時の雪の散らつく中を、校長先生の命令で全員学校へ集まったことがありましたが、たいへん寒かったこと、式が終わって廊下に置いたひきまわしや首まきがなくなり泣いたことを覚えていきます。

浅野(女) 学芸会で最初三人で踊ることになっていましたが、結局一人で踊ることになりました。みんなから「一人で踊れるものか」と言われたので何くそと思いがんばったものでしたが、今でもその時の踊りを覚えておられます。また、運動会では、よく走ったのでみんなからオートバイと言われたものです。

司会 大正十二年に震災がありました。このようにできごとに対しての思い出がありましたらお話しください。

林 関東大震災のときは、午前十一時五十八分頃で、学校も午前授業だったので家に帰っていて、木曾川へ水浴びに行くため県道へ出たら、ぐらぐらしかけたので桑の木につかまったものでした。

大竹 関東大震災のことがでしたが、家の庭で遊んでいたら、東の方でゴーンという地鳴がしました。しばらく

くして新聞には写真やニュースが毎日のようにいっぱい出ていました。

大栗 あの当時学校からも五銭か一銭でしたが義捐金を出したと覚えていきます。

大竹 それに「朝鮮が攻めてくる」といった流言がとぶようになり、それがために朝鮮人が大勢犠牲になったと聞いています。

林 私たちの高等二年のとき、支那事変が起こり、郷土の鷹森部隊がウースン敵前上陸とか、南京攻略をしたりその他を占領するたびに野村先生が教室の大きな地図に書き込んでいかれました。

大栗 高等科一年の時の担当が、岩田先生で、途中に戦争に行かれ帰って来られたが、将校の軍服姿で教室に入られたので、私たちは一番立派な先生だったと喜んでしまったものでした。

司会 米そうどうで、ひもじい思いをされたことはなかったですか。

大竹 聞いた話ですが、名古屋市で電車の焼き打ちを実際に見てきてとにかくおそろしかったとのことでした。また、この鶴沼は米の生産地であって、ひもじい思いはなかったですね。

それに、お伊勢様のご遷宮があった時、ご神木が下って南町の川岸に着かれましたが、その儀式が行なわれ青年であった私たちは、やかたを持って行き、にぎやかに

太鼓をたたいたものでした。

司会 当時は、自動車、自転車など、乗っておられましたが。

狐塚 自動車のことだが東町の「けとらさ」という人がフォードのT型に乗っておられたが、この人が鶴沼第一校下では第一号でしょう。

司会 自転車はたくさんありましたか。

みんな ありました。

司会 車がなかったから交通事故の心配はなかったでしょうね。

みんな はい、なかったですね。

狐塚 大きい車といえば

馬車くらいでした。

司会 馬車はすいぶん通ったのですか。

大竹 荷物の運搬などはほとんど馬車でした。また、嫁入りの時でもあまり人力車が使われていなかったようです。

司会 嫁入りの時は何で行かれましたか。

みんな 大体自動車でした。嫁入りというと、よそからたのんでいました。

狐塚 人力車の最後といえば、おそらく各務から菱川



二宮金次郎の像

医者の出張だろう。金輪でカラカラ音をたてていました
が終わりの頃は、さすがゴム輪にかえられました。

司会 大正時代と今の時代との物の考え方のちがいで
お気付きの点をどうぞ。



狐塚 修身がなくなり道徳心が欠けていますが小学生
でも頭は進んできています。

坂井 君が代を高校生など歌いたくな
いと言いが……。今後の教育に望むもの
は何かをこ発言ください。

坂井 教育勅語を復活してほしいです
ね。あれに従っておれば間違いだと思います。

大竹 戦前の教育では修身をみっちり教え込まれまし
た。それに社会環境もよく非行化するものがいなかった。
戦後は見るもの、聞くもの、読むものが非行化につなが
るものの中の教育であり、学校教育が悪いのではなく、
家庭教育に問題があると思います。

大栗 戦前の教育を受けた者は、殆んど義務教育だけ
でした。今のようには大学まで行かなければならないよう
な学力偏重の社会はいけません。当時は勉強しなくても成
功した人がいるからという考えでした。例えば豊臣秀吉、
二宮金次郎などで、ひとりで勉強したものでした。今は
生活のため、月給のための勉強で、人格形成の教育がで
きていないですね。

司会 結論として人間をしっかりと育てることですね。

狐塚 昔は徴兵検査に合格するまでは、心身共に大切
したものでした。
日本人としては教育勅語の考え方をもう一度身につけ
たい。

横山(女) 私の娘の宿題に教育勅語がでしたが、昔
覚えていたのを教えてやったら組で五人だけだったと喜
んでいました。そして「よく覚えているね」と言っ
て感心していましたが、今の高等学校でも宿題に出すこ
ろがありびっくりしました。

司会 最近歴史学習の中で研究されておりますね。

横山 教育勅語が日本の教育精神でした。現代は自己
批判がなく自己中心的な考え方が多いので、教育にも一
本筋を入れて人道的、道徳的な考え方をくみ入れてほし
いものです。



伊藤 先生と児童、親と子のことばづ
かいなど、まるで友だち同志のような使
い方であり、態度でもあります。一つ間
違えると悪い方へ向くことになるのでは
ないでしょうか。

大栗 私は憲法が悪いと思います。生きる権利、食う
権利などと言いつつ、働いて人に返してこそ、権利
が生まれたりするもので、要するに権利の前に義務があ
るものだと学校の教育に取り入れてほしいのです。

狐塚 私は子どもの言う通り、親が子を生んだ以上、

育てる義務があるのだし、子どもは育ててもらおう権利が
あると思います。

司会 学校教育、家庭教育、社会教育の三つの面が出
たり、憲法改正論まで出ましたけれど、今後の子ども
教育のために生かせるものは生かしていきたいと考えて
います。

おわり

長岡先生のスパルタ教育

可児はま子

四年生の教室は古い二階建の下で、天井が低く真ん中
に柱が一本あるとても陰気な教室でした。

担任は長岡先生、第一日からスパルタ教育が始まりま
した。始業の鐘が鳴ると先生はすぐ教室に来られ、教壇
に上るや否やすぐ、「ねがいました」と読み上げられる。
私達は立ったままソロバンを持って、パチパチやる。ま
たある時は、黒板に数字を上から下まで、三問題位書か
れ、前向きになって「暗算をやりなさい」と言いながら
さっと消してしまい「暗算の出来た人手を上げなさい」
それを毎時間行なわれた。二・三分間だけです。それが
すばやいこと、後は普通授業になる。だから授業には少

しも差し障りはありません。「休み時間は一生懸命遊び
なさい、勉強する時は、一分間もむだにするな」ときび
しく叱られ、何をするにも正確に手早くやるように、万
事このように一年間みっちり教育されました。

スパルタ教育の結果か、それとも気の強い星の下に生
れたものか、私達の級はとても気が強く、また人一倍辛
抱強い者ばかりでした。五年になった時長岡先生が持ち
続けたと言われたが、校長先生がどうしてもお許しに
なりませんので先生は退職されました。

私達は先生のお教えを守り、時間は無駄のないように
気を付けました。そのせいか五・六年の時は、先生から
何かとほめられました。

卒業して五十年、過去を思い出しては友人と会う度に、
スパルタ教育をなつかしく話し合い、亡き先生の御めい
福を祈っております。

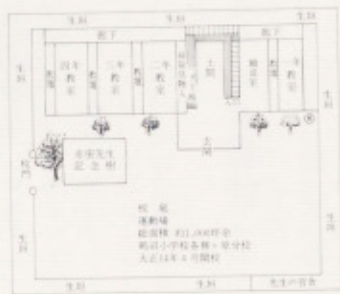
鵜沼小学校

各務原分校の思い出

石黒三郎

敷地と校舎については、敷地は国鉄各務原駅より中仙

道を横切り南へ、当時飛行第二連隊に至る道路沿い、現鶴沼第二小学校所在地に位置し、約一千余坪位の用地であった。校舎は一棟東西に長く、四教室と職員室の五室でなり、中央が出入口玄関で下駄箱物置があり、三ツ池分校に比べると大きな立派な建物でした。また運動場も広く井の中の蛙が大海に出たような気持ちになりました。教室も各学年に一室ずつ、先生も四名となり、嬉しいよ
うな、こわいよ、複雑で緊張の日々でした。四年生の生徒は、三ツ池約十八名、大伊木約十六名、各務原約五名位で、三年、二年、一年も、ほぼ同じくらい、全校生徒百二十三名位でした。三ツ池分校のときと勝手が違い、いつも先生が教室につききり、自分らの自由がきかないように思いました。大伊木区の生徒らに比べられないかなどと心配する子もあり、恥かしいよ、な、ていさいの悪いよ、な気がしましたが、勉強にしても喧嘩にしても負けてたまるかとの競争心



当時の分校の図解

も味わった一大試練時でもありました。知らない大勢の人の中に飛び込んで、小さな小猫のような存在で、なんとなく本校の生徒がこわかったものです。でもなにくそ負けるものかと、かえって励ましにもなりました。たまには、本校のボス生徒にいじめられ、運動場の片すみで泣いたこともありました。何よりも困ったことは、学校が遠くなったことです。家より学校まで一里八丁といわれました。自転車もなく上級生につれられて、徒歩で通学時間一時間余、遅刻するといけないので走り出すときなど、下級生は泣き泣き夢中で走りました。朝寝坊のほくなど、毎日半道ぐらいいは走ったものです。それでもたまに遅刻して立たされた時などはほんとにつらかったです。勉強道具など忘れたときは取りに帰れず、立たされるのが覚悟でした。でも帰り道は楽しかったです。日の暮れるのも忘れて、小川をわたり、丘を越え、林を通りぬけ、野原でたわむれ、畑道を通って、毎日途中で腹がすいて、農作物を失けいして叱られたり、小川で魚とりをして「ずぶぬれ」となり叱られたり、野原で野球などして帰りが遅くなり家で心配されたり、さまざまの毎日でした。

当時の運搬車といえば、馬車がたまたま農作物の集荷に通るくらい、空車に出逢ったら最後叱られるのを承知でみんながむらがり飛び乗りました。くたくたにつかれて家に帰りつく頃は、太陽は西山にせずみ、夕食もそこ

もわき立ちました。服装も全員着物姿で変わりなかったですが、たまたま各務原の駅長さんの転勤で、町から転校して来た息子さんが洋服姿で来るのが、めずらしくも、また注目の的となりました。こうした子が一人二人と増えるにしたいが、言葉も田舎弁から標準語をまねる様になりました。はきものはほとんど草履でしたが、学校が遠くなり二日に一足位すりへって、草履作りに父母を悩ませました。父や母は一日中野良仕事をしてから、僕等が寝る頃草履を作ってくれたものでした。大伊木区は、大山にも近く、町へ野菜など売りに行ったせい、其の頃より大伊木の生徒がぼつぼつゴム靴をはいてくるようになりました。冬雪の日でも、草履のまま学校へ通うので、足袋がぬれないようにす足の草履ばきで通学して、ゴム靴が「けなるい」と思ったこと。早く買ってほしいとねだったことがあります。大伊木の生徒は本校から転校したのだから一寸いばっていました、なにかと見習う点も多くありました。体操も、唱歌も、一学年ずつ教えてもらえて学年別がはっきり意識されました。今まではほとんどなかった理科の教材、地図、体操の道具も揃えられ、珍らしいやら楽しいやらで、一層学校らしさを増すと共に、忙しいような毎日の勉強ぶりでした。

そんなあわただしい中に四年生も終り、いよいよ本校に進学することになりました。三ツ池分校当時より誰しもそこに、また明日への挑戦を夢見て床につくのです。そんな日の繰り返しで、勉強の度、復習が出来ず、残念だったか、むしろ幸いだったのか、六年卒業時は、男子全員中、二・三名のみ中学進学、女子は約半数高等科に進み、義務教育六年で早くも社会に出て行く姿が、子供心にも淋しくあわれでなりません。

時の流れ

板津 勉



板津 勉

月日の流れるのは実に早いもの、学校を卒業して五十年になろうとしている。五十年間に、学校制度、建物、設備等の変り方は実に驚くべきものがある。

我々の学校時代は、尋常高等小学校であった尋常科六年、高等科二年で、尋常科四年までで五年生からは本校に通った。その後、分校が現在の第二小学校に移転された。

教科書は国定教科書で、全国一定のものを使用していた。学校は国民学校と改められ、その後現在の六・三・三制度がしかれ、小学校六年中学校三年と義務教育期

間が延長されてきた。

尋常六年を卒業して就職する者は、男子で二〇%位、女子は七〇%でほとんどの者が住み込みで小僧年期奉公として働きに出たものです。高等科は二年であり授業料を役場に納めて通った。中学校に進学する者は五%位で子課と言って放課後学校に残って先生の指導を受け勉強したものです。

服装は全部着物であり、乱暴者は帰りに袖をちぎられている事も度々であった。男の先生は着物と羽織袴の方もあったが、女の先生は全部着物に袴であった。高等科になった頃は全部が服に変わって来た。

校舎の廊下外側の窓ガラスはなく風が吹く時の雨や雪は廊下に降り込んでいた。当時の校舎は一棟もない。

当時から残っている現在体育館の西にあるケヤキ、松、榎、イチヨウの木である。ケヤキは、大風の為に幹が折れ途中から切って芽を出し、榎の木の幹がゴブゴブになっている箇所は石が打ち込まれている跡である。陣取りゴッコには必ずあの榎の木を使っていた。

あのケヤキは万を越す生徒と共に風雪に堪え、共に遊び先生と共に我々を見守りつづけ学校から送り出してくれたのである。

私たちの子どもの頃は少年団があった。現在の子ども会である。冬休みになると早起会があり、暗い中に起きラッパの音も勇ましく集ってお宮さんにお参りをしたり、

二組に別れて兵隊ゴッコをやったこと。また夏休みには午後一時から三時まで青年会の人々の指導監督で青年会場に集り、学年毎になって夏休み日記その他復習を行う等、勉強をする時間を青年の人が作ってくれました。

四・五十年前の子供や青年の人のやった事は、現在の子供とは大変な違いである。何事にも堪え忍ぶその精神力が目立って違うように思われる。

ケヤキよ。健在で学校の歴史と共に何時までも生茂り、子供を見守り続けてくれる事を念願しペンを止めます。



母校の思い出

伊藤 徳 男



伊藤 徳 男
年。鶴沼第一小学校は南校北校に始まり、鶴沼尋常小学校、鶴沼尋常高等小学校、国民学校、鶴沼第一小学校と私達の教えの庭、あこがれのなつかしいまなびの学

校も位置こそ変わらぬが当時の面影は全くありません。しかし、現在も校庭に残っている大けやき・大銀杏・かしの木・松の木等、私達が四十有余年前に遊んだ思い出の庭木です。松の木は明治三十七・八年の日露戦争の記念の木と聞いております。かしの木は部落別に分れて一年生から高等二年まで一丸となって陣取りをしたなつかしい庭木です。

また、あの大けや木は現在には運動場の真中にありますが、もとは現在の西北角にありました。

この大けや木も五島先生の記念の木です。今はなき五島先生が辞任される時、ちょうど校舎新築のために現在地に植え替えたのです。その時、五島先生は各務の前より奉職されましたが、学校を辞める挨拶の時「私はあのけや木に申し上げます」と一段と声を大にして「お

前は足を切られ、手を切られ、根を切り枝を切りほんとうにみじめな姿で植え替えられましたが、やがて時期が来たら芽を、根を出すことを忘れるな」と涙声で申されました。その言葉どおり、けやきは翌春芽を出し、根を出してますます大きくなりました。亡き五島先生の記念の木であります。

五島先生は、ちよっぴりひげをはやし、元気のよい先生でした。このけやきこそ、多くの鶴沼第一小学校の卒業生を見守り、また何千人かの子供たちの遊びを見守って来たことでしょう。

この大けやきこそ鶴沼小学校にまなんだ男女は、想い出深い木でしょう。また何十人の校長先生に尽したことでしよう。

戦争記念の松の木



暑い日さしの日蔭に歴史の数々を知ることでしょう。明治・大正・昭和と三代に渡る鶴沼小学校も三ツ池の分校から第二小学校に独立し、現在まさに第三、第四の学校が計画されること、時代の流れは鶴沼の農村も次第に観光の町、

また東海地区のベッドタウンとして新しい町づくりに発展しつつあります。

第一小学校の卒業生がこの鶴沼の町づくりに協力して参りましたが、今後も立派な教育の土台、まちがいのない住みよい平和な鶴沼建設のために新しく転入された方々ともとけ合って、共に手をたずさえて学校中心の鶴沼の町づくりに努力をおしまないようにしたいものです。

この歴史のある鶴沼第一小学校の名にはじまない学校にいたしましょう。

小学生の頃

大森 艶子



大森 艶子

大正生れの私共が学童時代は、今の鶴沼第一小学校は本校、第二小学校は分校として存在していました。各務原より西に住む者は、分校へ、四年生まで通学して、五年生から、本校へ通ったものでした。

五年生になった四月、よろこびと不安に胸をときめかせて、本校の門をくぐった日の事を、今でもなつかしく思っています。

そして通学するための電車の定期券は、二十軒より鶴沼宿まで七円五十銭（一年分）、各務原より鶴沼宿まで五円だったと記憶しています。

その頃は朝の授業始めと、昼の授業始めには、先生方が毎日交替で、職員室の前に立たれ、大きな柄のついた「リン」を振って、合図され、その他の時間毎には、二階の裁縫室の窓際に吊るされていた鐘を叩いて、合図をされたものです。

公民館も、体育館もなかった頃なので、四大節の式の時には教室をいくつも続けて、臨時の式場を作り、女子は長いたもとの着物に、紅色の袴をつけて、参列しました。

校長先生が礼服に白い手袋をはめて、紫色のふくさにつつんだ御勅語をうやうやしく、いなだいて読まれ、一同頭を下げ、静かにきいていた。厳肅な有様は、今の時代では想像もつかない事でしょう。

戦時色、ようやく濃くなりつつあった、昭和の初期の事ゆえ、運動会も校庭の大きな樺の木を中心に万国旗をかざり、昼食後は分列行進をしたものです。

今の国体等でやる、入場行進のようなものです。各組毎に二列横隊に並び、校長先生の前を「頭右」で通り、それぞれの位置につくのです。高学年の、男子の吹く「ラッパ」にあわせて行進しました。

運動会の最後をかざるのは、五年生以上の男子が、白

いはちまきをしめ、袴をつけ木刀を持って、「白虎隊」を踊り、終りにふところから出す紙吹雪の舞う様子は、毎年の事ながら、新たな感動を呼びおこしたものです。

学習の面では、特に修身に重点をおかれた時代で、教育勅語を、わかりやすく書いた「児童心得」は毎日よまされたものでした。

年は移り世の中は変わって、学校の建物にも内容においても、めまぐるしく変化して、五十を数える身にも唯々目を見はる事ばかりでございます。

思い出

山田 忠美

北舎、中舎、南舎とヨの字の様に校舎が建っていた。隣りに鶴沼村役場と文具屋大島屋があり、村の中心で部落とは程遠い桑高と水田の真中にあり、夏は緑、秋は黄金波打つ稲穂、東は大安寺川の堤防に桜の並木、桜の満開、それは美しい調和の美を創っていた。授業の始めと終りを告げる鐘がガンガンと校舎を縫うように響いていた。

今のような冷たいコンクリート校舎でなく、プールもないので泳ぐことはほとんど木曾川であった。

大運動会



式場の終るまで立ちん棒である。君が代斉唱の内に校長先生は天皇皇后両陛下御真影奉戴、教育勅語を厳肅に奉読、今も思い起す印象の残る教育勅語である。

運動の姿は今からは想像もつかないような恰好であった。男子も女子も着物を着ていた。着物で体操するのだからやりにくくて仕方がない。それでも男の子は下着の白メリヤス、ももひきを膝のところを紐でしばり身体に食いつくようなシャツを着て行なった。女の子は着物のままなので長い袂もあった。赤いたすきを十文字にかけて行なった。秋の運動会ともなれば大変な賑わいであった。父兄総出で北舎と中舎の狭い運動場、観覧席は教室を開放し、トラックの周りは黒山のような集りで、終日大喚声が揚っていた。運動の種類も棒到し、騎馬戦など勇ましいものが多く、白虎隊の演技が父兄の人気の的だ

った。今で言えばマスメームである。白いシャツ、袴、鉢巻のいでたちがカッコよく、切腹の場で全員がグラウンドで寝ると割れるような拍手がわいた。競技で勝つと山のように積まれた賞品がもたらえた。

遠足も乗物はなく歩いたものだ。一・二年頃は、近い日の出不動か芋ヶ瀬池、三・四年生頃は前宮村のお不動様か大山の懸鹿野山、五・六年生頃は尾張富士か入鹿池高等科には岐阜の金華山、養老の滝。修学旅行は六年に伊勢神宮、高等科卒業のとき京都、奈良、本宮にどれもこれも愉快な団体行動教育であった。

大伊木からの登校はそれは淋しい松林を縫って、四キロの道を藁草履で雨の日、風の日、雪の日も通った。藁草履は二日もたなかつた。

弁当を持って来る者は遠い者だけで、近くの西町、羽場、小伊木、古市場の者は家へ食べにいった。弁当は多くさつまいもである。さつまいもの時はよくひやかされた。

大山橋架橋工事竣工渡り初め式には、親、子、孫の三夫婦で渡り始めをされたのは昭和の始めであった。陸軍秋季大演習が古屋であり、天皇陛下が大山を乗馬で行幸され、全校奉迎したのは意義深い思い出であった。

三ツ池分校の思い出

石 黒 三 郎

三ツ池中央部中仙道より南へ三百米の現在名鉄電車二十軒の南、当時前渡に至る道路の東道沿いに位置し、約七五〇坪位の敷地で校舎一棟、建坪百坪位南向き校舎で、職員室と教室とに間じきりされていた。

教室は一年生から四年生まで一室で二列に約八机、二人用が並べられ、四列に配置されていた。

敷地の南側に校門があり一米巾の溝と盛土堀に楕が植えられていた。運動場中央に大紅葉の樹があり、根本から数本に枝がわかれていて高さ十米、枝葉の直径十米位、根元で子供が五人でかかえるくらいあった。

生徒数は学年毎にまちまちであったが、一年から四年までで三十名から五十名位であった。

先生は一名で四学年を担当していた。一学年を教えているときは、他の学年は自習とか宿題をするようになっていたが、同じ教室のため上級生の学ぶこと下級生の学ぶことが入りみだれて複雑であった。

たとえば四年生でどうしても出来ない生徒がいると、「三年生か二年生に聞いてこい」と叱られることもあり、また、逆に下級生が答えるようなこともあった。

体操は同じ時間に組んであり、一年から四年まで一しょに運動場に出てやった。走りかいなど上級生より早いものがいたりして喜ぶもの、自慢するもの、また悲しむもの、泣き出すもの、大変だった。

喧嘩も学年を問わずしきりにやったが、四年生のボスにはかなわなかつた。いじわる等でいじめられたりするのは先生に叱られ教壇の横に立たされた。

唱歌も同じ時間で一台のオルガンに合わせて色々の歌をうたった。一年生の歌のときは、上級生はさすがにものたりなさを感じた。

遠足も全員一しょでおがせ池、前渡不動山等で、弁当におにぎり油揚ずしを竹皮につつまふろしきにまるめ肩にかけ喜びいさんで出かけた。藁草履ばき、みじかめの着物姿で、一年生を先頭に、せまい畑道を花をつみ虫をおつて歩いた。途中足が痛い、家へ帰りたいと泣き出すものもいた。

夕方近くになると、夕やけ小やけを皆でうたって、帰った。

休み時間の遊びについては男女ことなっていたが、男子はこままわし、パンコ、輪廻し、女子はチリとり、縄とび、オシヨ玉、まりつき等で、通りやんせ、カクレンボ、鬼とりごっこ、うしろの正面だあれ、ケンケン、は男女共に遊んだ。運動場のみみじの葉の落ちる季節となると、落葉を集めて相撲を取ったこともあり、また、大

勢で二組に分れ陣取りなどして遊んだ。

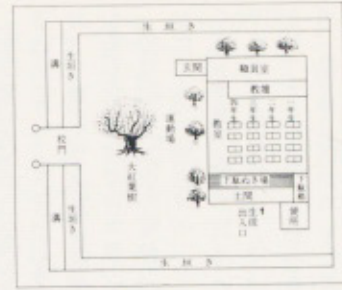
服装は全部紺がすり稿の着物で、冬はでんちこを着た。どんな寒い冬でも足袋と首巻きくらいでした。下着は男子はジュバンにももひき、女子はジュバンにし巻きであった。

四大節の式には、全員がはかまをはいて、りりしい姿で、みんな借りてきた猫のように行儀よく参加した。家庭にあつては、なにかと家事を手伝った。その頃のおもな手伝いは畑の草ひき、車の後押し、先づな引き、炊事、風呂の水くみ、ランプのほや掃除等であった。すきを見だしては遊びに行き叱られた。

遊びは村中かけ廻り、昆虫取り、魚取り、ボール投げ等いろいろした。村で定められた「遊びの日」は、お祭りかお盆、正月、年に一度の農休みくらいだった。

「遊びの日」といって、遠くまで遊びに出かけた。水あびは近くに川がなく前渡の木曾川まで行って、前渡の子供と喧嘩してこわごわ逃げ帰ったことがある。仕事を言い付けられ早く終えて遊ぶのが楽しみで、草むしりなど兄弟で畑のうねの数を分け合うのに喧嘩したり、「目のこし」して叱られたり、ランプのほや掃除をして、わらかして叱られたことも度々であった。雪だるま造り、雪合戦、竹馬のり、軒下のつらら取り、雪すべり等、数々の遊びに過ぎた。おとうさん達の雪除け、道あけ等も嬉しかった。

分校の図解



家庭での学習は叱られるばかりでつらかった。ある時は勉強がわからず逃げ出して、ひどく叱られ、机にしがばられ泣き泣き寝入ってしまったこともあった。でも兄弟が大勢いたので何んでも教えてもらい、要領よく勉強が出来る、楽だった。

生活状態は田舎で非常にひくく、農家には大八車と、農具の一部位で、自転車も二軒に一台位しか無く、大切な乗りものでなかなか乗せてもらえず、どこへ行くにもほとんど徒歩であった。映画などもなく、お祭りの村の習い芝居ぐらいだった。

日常の食事でも麦米半ばく飯に味噌汁、漬物だった。お祭りか 正月ぐらいが、米の飯に、魚はいわしかさより、ちくは、かまぼこ、とうふ等が食膳をにぎわし、最高に嬉しかった。ふだんの「おやつ」は梅干しか、生味噌、さつま芋で過した。近所の家ほとんど同じだから結構楽しかった。

青年団、消防団があつて、年末の火の用心等夜廻りし

て下さるので「えらいなあ」と感心した。おとうさんや子供の髪はおかあさんが薊り、おかあさんは隣のおばさんと髪を結び合つて、ほんとになごやかな風景だった。電気は昭和十二年頃に引かれ、隣から隣へと電線が張られ、どうして、あかりがつくものか、初めの家からだんだん順にとるものかな」と子供心に胸をふくらませていた。送電されるとどこもかも一度に点灯して大歓声があがった。今まで暗やみであった家々、夜小便に行くのに、鼻をつままれてもわからぬくらやみも、またいやいやさせられたランプのほや掃除も一度に解消して、一時に文化の村になった感じに打たれ、子供心に自慢の瞬間だった。

電車は見たことも乗ったこともなく、海も知らなかつたが、飛行機は生れて物心のつく頃から知っていた。

大正十四年となり三ツ池地区もだんだん生徒の数がふえ、分校を廃校とし、各務原に三区合同分校開設、三ツ池区、各務原区、大伊木区と一諸に勉強することとなり三ツ池分校にさようならした。



三ツ池分教場と赤座先生

三ツ池 桜 井 覚 衛

先生は元気な気の長いやさしい度胸のある方でした。先生は一人で一年生より四年生まで教えられました。先生が一人ですから遊戯や体操などは、一年より四年まで一諸でした。私達は五年生より鶴沼本校へ通つて教育を受けました。

校庭のあの大きなもみじの木、夏は木の蔭で遊び、セミのシャーシャーと鳴く声を楽しく遊び、秋のもみじの色づいた頃はほんとうにきれいで、其の美しさは今なお目に見えるように思い出します。

楽しかった事は芋瀬の池端のお開帳の時、あの大きな鯉を見る時でした。前渡のお不動様のお開帳の日、山より木曾川を眺め、帆掛船の上って行くのが大変に珍らしく、帰りに山つづじを沢山折って持つて来るのも楽しみの一つでした。

遠足といつても芋瀬池かお不動様でした。衣類は皆、着物で帽子はなく、藁草履、お弁当は梅干入りのおにぎりで白風呂敷に包み肩にタスキ掛けて出掛けました。

通学の時、学用品はお母さんの手作りの鞆に入れて、四年生頃になりますと、風呂敷に包んで通う子供も多く

ありました。青年には先生は夜学を教え、時には俳句などもやりみんな楽しんで勉強したことが、ついこの間のようになつかしくよみがえってきます。

小学校時代

伊藤 久行

鶴沼小学校創立百周年ということで、投稿を求められたけれど、私などは現在の第一小学校在籍二ヶ年三ヶ月という変則な在学であり、中年配になって復活した同窓会に出席してみても、女性群の方から「あら、こんな同級生があつたのかしらん」といわれてみると、自分ながら落付かなくなってしまう。別に転校した訳でもないけれど、制度上でそうになってしまうのである。



よめふり坂

もっと以前から、三ツ池部落だけの分教場が、いまの二十軒駅の所にあつただけれど、その分教場が分校と発展して現在の第二小の場所に新設されることになった（大正十五年）四月新学期にはま

だ新築工事が完成しないので、不便でも本校まで通えようことと三ヶ月間の在学が生れた所以である。

各務野の中の一軒家から、道づれもなく通学する新入生であるから、往復の道草にどれ程時間を費やしたものが、いま考えても心もとない話である。現在ほど見通しが良くないので、流れの川で一服。嫁振坂で一服。内野を過ぎてやれやれである。ただし交通事故などあり得ない当時のこととて、帰り道などは、日暮れまでに家に着けば、よいとばかり、行きつ戻りつしたことだろうと思う。

ランドセルを背負うことは鶴沼学校では私をはじめでなかったようです。一年位は嫌がるのに無理に背負わされたけれど、道草には両手が使えて便利ではあった。

さて夏休み中に分校新校舎も完成したので、西部の四年生以下はそちらに通えようことになり、三ヶ月の級友ともお別れであった。分校であるから、運動会と四大師節の折だけは本校に参上して合同するのである。合同すると、差別される訳ではないけれど、少数民族の悲哀というものか何となく肩身の狭い思いをさせられる。もつとも、私の場合、母方の祖父が村長をつとめていて、式の度に挨拶に上るものだから、いよいよいじめられたら爺さんに応援して貰おうと子ども心に期していたようだ。分校は四年までしか収容しないので、五年に進むと本校（現第一小）に通うことになる。ここで少数民族は多

数民族に吸収され、二ヶ年の在籍がはじまる。もう年令がすすんでいるから通学には心配ないけれど、道草は依然として念入りだったろうと思う。

叱られた思い出もいろいろ浮んでくるけれど、一番あざやかな記憶は、飛行機の墜落した時である。墜落ではなく不時着というべきだろうが、折しも朝礼が始まる直前に黒煙をひきながら、はるか桑畑の中に落ち込んだ。朝礼の欠席と現場の興味との相剋に悩んだとしても、少年の好奇心は断然強かったのである。たしか教室で立たされ続けた。

小学卒とともに中学に進学し、高等科二ヶ年のおつき合いがないため、前記のように他人扱いされかね、ちなみに、中学へ進んでも、小学校の同級生は一人もなくまた少数民族の悲哀を味わう境遇であった。

私の頂戴した卒業証書は、鶴沼尋常高等科小学校尋常科卒業ということになっている。

進取の気持で

木野 忠 男

私が小学校に入学したのは、今から五十年前、大正十一年四月でした。

三ツ池分教場

中 村 け ん

当時は、かすりの着物に前掛けをして、ぞうりをはいて毎日通学しました。校舎は現在たっている南舎の教室のみで、他は全部かわっています。



分教場のあと

校庭のけやきの木は、五十年以上も前から風雪に堪え、すくすくと生き続けており、それを見ると遠い昔が懐しくなってきました。

小学校の思い出はなつかしい。私の一年生まで学んだ三ツ池分教場は、今の名鉄各務原線、二十軒停留所のすぐ南にありました。校舎は一棟、一教室で、私の組は男女合せて十五人でした。一つの机に二人ずつ腰かけて八つの机が一行に並んでいました。四年生までの生徒が四列に並んで同じ教室で赤座先生に教えていただきました。

五年生になると分校から同級生が入ってきて、教室は大変にぎやかになりました。六年では、中等学校に進学する者、高等科に進む者、工場や小僧奉公に行く者など、さまざまで何となく人生の分岐点のような感じで淋しい気持を抱いた記憶があります。

児童数はいつも六十余人で、他の学年の子が叱られてもほめられてもよくわかりました。時には他の学年を教えていらっしゃる先生の話を、自分の勉強を忘れて聞いていた事もありました。



今と違って、着物に帯、寒い時には綿入れの羽織やデニチを着て、藁草履の下駄ばきでした。校庭には大きなもみじの木が一本あり、その下で縄とび、綱引き、体操などやりました。遠足には、おにぎりを持って前渡の不動様や、前渡の



飛行機

本曾川渡場近くにいきました。三年、四年になると女の子は裁縫があるので、土曜日の昼から、私のいとこのとよさんに運針などを習いました。

赤座先生は、いつも熱心に教

壇をあちこちして四つの組を教えて下さいました。

各務原へ飛行機がはじめて来たのは、私の二年生の時でした。「飛行機が来る、スマスが来る」と、大人も子供も遠くから見に来て、今か今かと待っているうちに、遠くの空から飛行機が小さく見えて来ました。「そらきだ。あれあれ」といううちに頭の上に来て、空でぐるぐるまわったので、私は頭の上に落ちて来ないかとこわくなり、「ヒヤアヒヤア」言って野原をにげまわった事を覚えています。

五年生、六年生は本校へ行きました。「本校までは一里八丁(約五キロ)ある」ときかされ中仙道を毎日歩いて通いました。寒い冬の日には、本や鉛筆を包んだ風呂敷包を腰にまきつけて通ったものでした。本校も分校も、周囲は桑畑、芋畑、麦畑で、遠くには松林が見えました。これは五十余年も昔のこと、今は汽車、電車、バスが走り、関・江南線とかの高い道を車が走るのを見て、夢のようにめまぐるしく変わった鶴沼の姿に驚き、また喜びを感じます。

開校百年の声をあちらこちらで聞く度に、故郷の小学校をなつかしくしのび、発展をよろこぶと共に、十年後、二十年後の鶴沼がどんなに変わるかと心から期待し、その発展ぶりを見守りたいという気持です。



開発の進む北部の展望

卒業生座談会 大正・昭和時代

月日 昭和四十八年九月二十六日

場所 川崎地区 川崎公民館

司会 河村英臣

記録 武藤健一

出席者

中野義弥	大正十年卒
中野梅雄	大正十二年卒
大岩静雄	大正十三年卒
大岩源吾	大正十五年卒
石黒三郎	昭和元年卒
中村優郎	昭和二年卒
大岩勇夫	昭和六年卒
石黒武雄	昭和八年卒
石黒富男	昭和十五年卒
由良逸男	昭和十五年卒
国定登芳	昭和二十年卒
丹羽徳光	昭和二十二年卒

司会 三ツ池分校に当時一年から四年まで在学していた、だいたい大正時代に卒業の方と、昭和一ケタ、そして終戦直後に卒業された方の座談会をこれから始めます。まず始めに大正時代のお方から当時学校へ通われたときの苦労話、また、学校の様子をお話してください。

中野 私達は当時、鶴沼村立鶴沼尋常高等小学校三ツ池分教場に通っていました。一年生から四年生まで一クラスでしたが、五年生からは蘇原小学校の方へ通うようになりました。分教場の運動場のまん中には大きなもみじの木がありました。校舎は一棟でしたが校舎の西南に火の見やぐらが立っていました。雨に風にさらされてさぶさぶな風情でした。

石黒(三) 運動場のまん中のもみじの木の葉を集めて、その上ですもうをとったことを覚えています。当時分教場にあった教具とか施設を申しますと、日本地図一枚、鉄棒が運動場に一ヶ所だけでした。あとは何もなかったのです。分教場の児童は全部で五十名位でしたかね。

大岩(静) 当時の鶴沼第一小学校は距離的にとっても遠くて通えませんでした。各務原線の三柿野駅ができたのが大正十五年、三柿野から鶴沼への開通は昭和二年でしたから私達は電車もなく鶴沼一小までとても歩けなかったわけです。それで近い蘇原の学校へ、おじやまにあがったんです。

石黒(三) 鶴沼小の本校までは一里八丁ありましたから

子供の足で歩いて一時間二十分ぐらいかかりました。

中野 名鉄の二十軒の駅の南側あたりは竹林があり、冬になるとその竹に雪がかぶり、その下をくぐって通りました。遠い道のりであったことと履き物に困ったことを覚えていきます。

司会 履き物についての苦勞といますと。

石黒(三) 冬にいちばん困りましたね。当時は足袋にわらぞうりでしたが、雪が降ると足袋がぬれてしまうので、足袋をふところに入れて学校へ着くと足を拭いて足袋をはきました。ぞうりも遠い道のりを歩くので二日もはくともう破れてしまいました。それで親がぶつぶつ言いながら夜なべ仕事でぞうりを作ってくれました。でも高学年になると作り方を覚え自分で作りましたね。

中野 私も同じ経験がありますね。私達が蘇原へ通った五年生の頃あめ靴(ベタ靴ともいった)が入ってきました。それまでは下駄、わらぞうりでした。遠足などでもわらぞうりを一足余分に下げて行きました。母が前晩にわらを打って作ってくれました。帽子は黒いものでひさしがついていました。校章もあつたけど帽子をかぶる者は少なかったですね。

司会 では当時の服装についてお話を伺いましょう。まず大正時代のお方どうですか。

中野 木綿のかすりの着物に皮裏のひも帯をしめましたね。

運動会の時のパンツですが、横に黒い線が入っていて木綿できていました。

司会 昭和のお方はどうですか。

由良 私たちも殆ど着物でしたね。でも、一年の冬に私は黒い洋服を始めて着せてもらいました。私の四年生になると和洋半々くらいでしたね。

丹羽 靴はゴムで作られたアメ靴か黒いゴム靴でした。**石黒(富)** 小学校始めの頃は恵まれていましたが大東亜戦争のため五年生頃から終戦に近づき物が不足しました。**国定** 低い下駄もはきましたね。

司会 当時の通学カバンや教科書、学用品はどのようなでしたか。

中野(義) 私は母親に木綿で袋を作ってもらって持って行きました。

中野(梅) 一年生の頃はやはり私も袋を作ってもらいましたが、やがて風呂敷につつんで腰にからけて行きました。

石黒(三) 私も初めは風呂敷でした。三年生になって肩から下げるかばんが殆んどでしたね。

丹羽 終戦直後でお粗末なものでした。もちろん教科書も無いのですから風呂敷でもなんでもよかったです。一年生の頃はまだよかったですね。今のようない皮製のランドセルでなく人工レザーのかばんでした。一年たつとボロボロとめくれるようなカバンでした。

石黒(三) 全然洋服の子は無かったですね。私が各務原の分校にかわった時に国鉄の駅長さんの息子さんが町から転動されて来た関係から始めて洋服を着て来ました。私の四年生の時でした。それからだんだんと各務原に人が移り住むようになって洋服が入り始めました。先程のゴム靴の話に戻りますが、私達の部落では貧乏お大尽に關係なくぞうりでしたが、各務原の分校へ行った時に大伊木部落の子と一緒にになりました。大伊木は犬山に近かった関係で野菜などを犬山へ売りに行って帰りにゴム靴を買ってくる親が多くゴム靴で学校へ通う子がいましたね。洋服についてつけ加えますが、ふだんは紺のかすり



座談会風景

かしまの着物でしたね。式の時ははかまをつけました。下着は男の子はシャツと寒い時はももひき、女の子はおこし(腰まき)をつけました。運動会ぐらいでないパンツがはけなかったですよ。**中野** 今のようなズボン下のようにゴムが入っていないとひもがついて合せるようになっていたのをももひきでした。

大岩(源) 大正時代はノートがなくて石板に石筆で字を書いたり算術(今の算数)の勉強をしました。一年生の国語読本(今の国語)は始めが「ハナ・ハト・マメ・マス・ミノ・カサ」でしたね。石板はみんな一人一人が持っていました。教科書は国語・修身・習字の hands。算術がありました。

石黒(富) 今おししやった「ハト・マメ・マス……」の読本の教科書が私達で終りでした。一年生の子から「サイト、サイト、サクラガサイト」で色刷りの教科書になったんです。

中野(梅) 私たちの一年生の始めは「ハト・タコ・コマ」でした。

石黒(三) 話が戻りますが私たちの一年生のころは石板で、石筆を五、六本買ってもらい書いては消し、書いては消してました。三年生ごろから鉛筆を使うようになりました。雑記帳(ノート)も買ってもらったことを覚えています。当時ノートは一銭ぐらいだったと思います。

大岩(勇) 米騒動が起きた時、米一升が五十円にアップしたので騒動が起きたのですからノートも一銭ぐらいだったでしょうね。

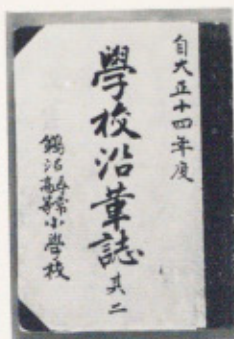
大岩(静) マンガの本が当時、縁日などでお寺へ行くとき売っていましたが二銭ぐらいでしたからね。アメ玉を買うのに五厘持って行くと三・四個きましたよ。

石黒(三) 教科書は前渡のお不動さんに一軒、小学校開

係の本屋さんがあつてそこへ買いに行きました。

石黒(富) 私たちの頃と違って十年くらい同じ教科書で内容が変わりませんでした。それで兄や姉のお古を使つたもんです。かばんもお古を使いましたよ。

丹羽 終戦後はひどかつたですよ。前にも話が出ましたが、教科書がなく新聞紙のように印刷されたものをもりました。小刀がないので下敷で切つて自分でとじて教科書がわりにしたものです。一ヶ月に一度くらいその



学校沿革誌

新聞紙のような印刷物が送つてくるのでそれをもらつて勉強しました。五年生の一学期までは良かったですが、それからは本というものは無かつたです。でも先生は本に似たような物は持つてみえたようです。とにかく勉強も勉強ですが、さつまいも作りをよくやらされました。スコップでさつまいもを掘ることは上手になりましたよ。

司会 食糧事情はどうでしたか。

大岩(静) 米騒動が大正七年におきました。米穀商の人

して青年学校の生徒さんが演習といつて戦闘訓練を最後にやりましたね。

石黒(富) 白虎隊で思い出しますが「散りたる花のかんばしさ」の場面で大拍手がおきて感動したことや「流るる血しお」のところで全員がバタッとねてしまふところの集団美も拍手があつたこと、勇壮でしたね。

大岩(源) 大刀(刀)は三尺ぐらいの長さで白い布の鉢巻を巻きました。

丹羽 終戦直後の運動会ですが騎馬戦とか棒倒しがありました。やはりリレーも今のようにはありません。

大岩(静) 昔も今も同じだと思ひますがやはり運動会はひとつの子どもの祭典でとても楽しかつた記憶があります。

石黒(三) 修学旅行ですが伊勢へ行きましたね。殆んど私たちの年代の人は伊勢でしたね。前の晩は嬉しくてねむれませんでしたね。又電車に乗るとか、海を見たというところが無いので、皆が期待しましたね。旅館へ着いても引き潮が何時になるとか旅館の人に聞いてこつそり夜部屋を抜け出して見に行きましたね。何故海の水が無くなるだろうと皆が不思議がつたもんです。貝を拾つたり海岸の生物を見たりして理科の勉強もしました。旅館は二見が浦でした。日の出も拝みました。こづかいは五銭程持つていったでしょうが。

石黒(富) 私らも小学校六年では伊勢、高等科二年の修

は板の間に米をまいて上からじょうろで水をかけ目方を重くして売つたということですが実話だと聞いています。

中野(梅) 当時は南京米というのがありました。大きい南京袋に入つていてバサバサの粘り気のない米ですが、これを三割、内地米を七割入れて食べました。

石黒(三) 私たちは平素は麦と米を半分づつ混ぜて食べました。半麦飯といひます。お正月、おぼん、お祭りや野休みなどは米のめしでした。おかずも煮とうふ、ちくは、かまぼこなどもそういう時しか食べさせてもらえませんでした。遊んでいる時のおやつも梅干とか、生みそとかさつまいもの切り干しなどでした。皆が同じような生活でしたからなんともなかつたですね。

中野(梅) 当時の麦はひしぎ麦でなく、家でゴロゴロ白で引いた小割りの麦でした。

司会 当時の学校行事の中で運動会とか遠足、また修学旅行について思い出を聞かせて下さい。

大岩(源) 大正時代の頃は二人三脚とか、綱引き、玉入れとかマラソンなど余り今と変わりませんが、遊戯(今のダンス)は今と変わつてましたね。

石黒(三) 六年生の時に剣舞をやりました。つまり鶴沼の学校へ統合された年の運動会でした。白虎隊という遊戯です。はかまをはいて木の刀を持つてやりました。

由良 あれは確か本校では三・四年が四条畷、五・六年、高一・二年の子たちが白虎隊だつたと思ひます。そ

学旅行で京都奈良でした。こづかいは五十銭ぐらいだつたと思ひます。やはり印象に残るのは始めての修学旅行ということ伊勢の方でしたね。

丹羽 私たちは紅葉館という旅館でとまりました。なかその頃は他の学校の子とけんかをよくやりましたね。対校意識が強かつたですね。かんしゃく玉を買つてきて同じ旅館に泊っている他の学校の生徒とけんかをしました。ことを覚えています。

石黒(富) 修学旅行の土産という伊勢では金花糖、孫の手等を買つて親孝行しようとしたですね。

大岩(源) 服装はやはり着物ではき物はあさぶらのぞうりでした。修学旅行だからあさぶらのぞうりがはけたのです。よそ行きのはきものでしたね。コースは高山線か



座談会風景

ら岐阜へ出て東海道線に乗りかえ名古屋へ行って関西線で伊勢へ行きました。今の子供たちはバスでらくらく行けますが大正の頃は三つも乗り換えて行きました。

丹羽 昭和二十二年頃は修学旅行はなかつたですね。

国定 私もなかつたで

すね。

石黒(武) 私は伊勢へ行きました。

司会 遠足はどうでしたか。

中野(梅) 大正の頃は一年から四年生までが毎年前渡のお不動さんでした。五年生からは私たちは金華山へ行きまして。往復歩いてです。一年生は始めていいですが四年生は毎年同じだからよく勝手がわかっていましたね。

丹羽 私たち五・六年は中山七里でした。焼石で降りて金山まで歩いて歩きました。これが秋の旅でした。

中野(梅) 今の学校は遠足が年に二回ありますが、大正の頃は年一回でした。春は遠足、秋は運動会でした。

石黒(富) 私たちも遠足は一回でした。

丹羽 陸軍記念日、海軍記念日に裏の山へ歩いて行ったことがありますか……

大岩源 弁当は日の丸弁当か油揚げ寿司、巻き寿司でした。おやつは無かったですね。水筒も持って行かなかったです。向こうで水を飲んだり途中で飲んだりしました。

由良 私たちはキャラメルとか柿を持って行った記憶があります。

中野(梅) その時のキャラメルは今の森永キャラメルの三十四が五銭でした。二銭だと半分箱に十個入ったキャラメルが買えました。

丹羽 終戦後は兵隊さんが持っていた水筒や兵隊さんがはいていた靴(編上靴)を履いて来た子もいましたね。

司会 大正のお方にお聞きしますが、分校から本校へ行かねばならないということで不安とか苦労話はありませんか。

石黒(三) たいへんありましたね。各務分校へ行くと、大伊木、各務原部落の人と一緒にりましたが、部落の対抗意識がとて強かった時代ですから、各務原分校へ行ったら向こうの者にいじめられやしないかと非常に心配しましたね。その反面何くそ負けるかという気持もおきました。又今までの三ツ池分校では一年から四年まで一人の先生でしたが、各務原分校の方では一学年一人の先生になりましたし、教具や運動器具がほとんど出来ませんでしたので違うなあと思いました。今まで三ツ池の分校ではさばりたい時はさばれましたが、それが出来なくて固苦しかったですね。勉強も今までひまでしたが、忙しくなりましたね(爆笑)また本校へ行った時は学校の大きいこと、児童の数が多くて驚きましたね。宝積寺の部落の連中に力の強い者が多かったですね、何か肩身のせまいことを覚えていますね。でも私らも横着坊主でしたのでだんだん仲良くなりましたね。

石黒(富) 私たちの頃は分校の児童の数も可成り多くなっていましたのでそれ程心配はなかったですね。宝積寺、南町の子たちが横着かったですね、分校の方でも大伊木

の子たちが横着かってつり合いがとれたので、おそがかったという記憶はありませんね。

石黒(三) 私は三ツ池分校から鶴沼の本校へ変わったのですが、道のりが一里八丁あるのですから一時間二十分くらいかかります。それで朝早く起きねばなりません。上級生の子が朝迎えに来てくれたり呼び合って行きました。あわてて、朝食をお茶漬で食べました。上級生は呼びに来ますけど待っててくれないので、いっしょうけんめい走って皆と一緒に走ったことを覚えています。いっしょうけんめい走ってついていっても一里八丁の途中へんでやっとな追いつく始末でした。たまたま馬車が通ると皆がたかのように飛び乗りました。叱られてもしがみつきました。又さつまいもを積んだオート三輪が通ると走って行って荷台につかまりました。行きは遊んでいるひまはないのですが、帰りにはよく横着をしました。大伊木の川で遊んだり、人蔘や、大根、さつまいもを引っこぬいて食べたり、嫁振坂を上るといっぶくしました。今度はいも畑でかくれんぼしました。やがて今の第二小学校の東の方の松林になると野球、日が暮れる頃になるとやっとな家へ着きました。それで帰りは行ききの倍ぐらい時間がかかりました。家へ早く帰ると畑仕事の手伝いをさせられるので、学校帰りにみんな遊んでしまおうですね。勉強するひまもなく夕食を食べたら寝てしまいました。

石黒(富) 中仙道を通る車も一屯か、普通で、たまに一

屯半が通ると診らしかったもんです。

司会 当時の皆さんの腕白ぶりを聞かせて下さい。

大岩(勇) 名鉄の各務原の近くで、学校帰りに竹を線路におきました。したら、電車が止まって、運転手も降りて追っかけて来ました。国道までいっしょうけんめい走って逃げました。また小さい道へ入るとまだ追っかけてくるんです。

石黒(武) 私達の頃は部落の対抗意識がとて強い頃でした。それで私たちは、秋になると山伝いに駅の裏を通って帰りました。ところが松茸が、沢山生えているので靴にいっぱいになるくらい取りました。

石黒(三) 三ツ池の子は南の方の犬山街道を通学する人と中仙道を通う子といたずらの方法が違ってましたね。

由良 六年の頃でしたか、学校帰りに、西瓜を取ったり、人蔘、きゅうり、なす、トマト等を取って食べましたね。わざわざ家からしゅうゆとか塩を持ってきて食べたものです。私達の頃は十日か半月ぐらい夏休み前に半日授業がありました。昼中暑くてたまらないので畑へ入って悪さをしましたね。

石黒(三) 中二屋の子は、皆こういうことを味わっていますね。伝統ですね。西瓜とりもみんなやりましたよ。中には田んぼのふちにある、こえつばにはまって腰から下をどぼどばによこした人もありましたね。つるがはっているからわからんのですね。

大岩静 学校の帰りに三ツ池で泳いだら、それが先生にわかってひどく叱られはじをかけたことがありました。又その頃は負けずきらいの子が多かったですね。これは子供だけでなく親そのものにそういう気持が強かったですね。私より後輩の宮川さん(故人)が分校で一番の首席でいたんですが親さんが「分校で一番ぐらいなんだ、本校で一番とったら天の星をとってきてやる」と言われたそうです。ところが、彼は本校でも首席をとりました。何か当時は意地とか、根性がありましたね。

丹羽 本校へ行く前の二月、三月には毎日特訓をやらされたね。毎日残って勉強をやらされました。

司会 では先生について思い出をお話ください。

中野(梅) 一年から四年まで私たちは赤座鶴次郎先生でした。たとえば授業は四年生の人は自習、三年生は算術二年生は修身の本読み、一年生は外へ出て小石ひろいというように一人の先生で四学年を受けもつのですから、勉強もバラバラでした。一年生の子には小石を十個拾わせるとか、ツンバラを二十本、とってきなさいとか野外教育をされました。

大岩(静) 赤座鶴次郎先生の印象、思い出は一生忘れられませんね。一年から四年までの生徒を教えられたんですが、一学年一人の先生で教えるより一人一人の子の成績が、よかったといわれるくらい熱心な教育者でした。赤座先生は大正十五年十二月十七日に亡くなりましたが、

先生の記念碑が立っていますね。

中村 私も教えてもらいましたが、実に恩徳のあるお方でした。

中野(梅) 先生が四年生を教えてみえる時三年以下は自習でしたが、ほかごとをしていると竹のむちでボンと頭をたたいて何もいわず又四年生のところへ行って教えなされたですね。

中村 教育面においてきびしい所がありましたね、温かい人でしたね。

石黒(三) 三ツ池の分教場にいた頃、私は屈指のいたづら坊主でした。学校の入り口の渡り板を年に一回父が、



座談会風景

竹ばりをするため、直しに行ったが、先生が「おとうさんに話したる」といわれて、家へ帰ったらどえらい叱られたことがあります。本校へ行ってから野村先生が、きびしかったですね。

石黒(富) 私は図画の時間に野村先生からほめられました。空から色をぬれという教えを守ったからだと思います。本校時代の石黒先生は体操の時間になると本

告別式の参加者が二百名ぐらいたった。三ツ池の支部長の加藤さんが送辞を読まれたが、弔辞の中に「赤座鶴次郎先生は……」の言葉が出たら皆が、涙して加藤さんも弔辞が、読めなかつたほどでした。三十五年間教育ひとすじに生きられました。

中野(梅) 私も赤座先生一人に四年間教えてもらいました。親、子、孫の三代にわたって教えてもらっている人もいます。私は本日赤座先生の野口のお宅へ行って奥さんにお会いしてきました。先生は今生きてみると百三才です。奥さんは九十一才で寝たきりですが、気はしっかりして見えました。赤座先生の人柄をあらわすこんな話があります。お正月前の餅つきの時です。奥さんが、せいろのさなが、いざついていたのですが、気づかず奥さんが、せいろをおろす時餅米が庭にこぼれてしまいました。その時奥さんが「おとうちゃん、すみません」と言われたんですね。ところが、先生が「おれが、悪いんだ、せいろをきちんと重ねなかつたから」といわれたのです。こういう言葉は現在聞けない言葉ですね。これが、赤座先生の人柄の一面でしたね。先生は家庭では奥さん、女の子四人の父親で五アールの田畑がありました。学校では先生の職を全うし、家では田畑仕事もなされました。知情意の教育をなされた立派な先生でした。この方は先生として勲八等瑞宝章をもらわれました。こういった方は今だかつてないですね。今も鶴沼第二小学校の校庭に

ばかり読んでもらったこと。またかけ算の九九が、言えな者から帰してもらったことの思い出もあります。

丹羽 私たちの頃はクラスが三つあって一部は男子、二部は男女、三部は女子だけの組でした。一部は後藤先生でしたが、私は二部だったので体操の時だけ後藤先生でした。とてもきびしい先生でした。雨の降っていた日の体操の時間にピンポンが、やれる予定でした。ところが、ひどく叱られて雨が降るのに石の上に座らされたことがありました。結局、一時間中みんな座らされてしまったわけですね。

石黒(富) 後藤先生は習字をいっしょうけんめいやらせて特訓されたね。だから習字はほかの組よりうまい子がいました。

司会 では最後に学校に対して望まれることをお話し下さい。

大岩(静) 戦争に負けてあらゆる面に豊かになりましたが、教育には疑問があります。上に通ずる、つまり親に祖先に、教師に、通ずる点を教えて欲しいと思います。と同時に谷間の水の如く清く美しく清らかにということも教えていただきたいということです。

中野 昔の学校は宿題は少なかつたが、それだけに先生の苦勞も多かつたと思います。

石黒(三) 現代の教育は進歩しているが、先生と児童とPTAの関係についてのつながりが、スムーズに行きす

きているのではないでしょう。もう少し師弟の間柄について先生も親も子どもも考えなおす必要があると思えますね。

石黒(富) 私は皆さんと反対ですが、今の子どもは干涉されすぎているのではないのでしょうか。のびのびとした豊かな人間教育を育てることが大事ですね。

由良 根性のある子にしたいですね。がまん強い子にね。親にも責任はありますがね。

国定 今の子どもは物の尊さを知らないですね。社会全体がそうですけど物が豊富すぎてかえって害がありますね。

丹羽 やっぱり国定さんのように恵まれすぎて可愛想ですね。遊びにしても野原がないでしょう。

石黒(武) きびしく子どもをしつけて欲しいと思います。ある程度スバルタ教育的な精神教育も大事じゃないでしょうか。

司会 本日はどうも長時間ありがとうございました。

過去と現在

石黒 紀 人

鶴沼第二小学校在学時代の校舎は木造二階建てで教室

職員室等を含めて約十二室位だったと記憶しております。校舎二階の一番西すみには教室二つよりやや大きい講堂があり、ここでは学校における色々の行事が行われました。

当時と今の校下の様子を比べると、当時学校周辺には民家、工場、商店等はなく畑の真中に建っておりまして。現在ではとても考えられないことです。学校から一キロメートルぐらいはなれた所には、学校の農場があり、麦刈り、さつま芋堀り等その時期になると農場に出かけてどろまみれになって畑の中で汗を流したものです。

在学時代の服装はそれぞれまちまちで物資の貧しい折でもあり、現在のようにカラフルで高価なものとはとてもぞめず、色もじみでしたが、皆それがあたりまえでした。履物といえは、わらぞうり、ごむぞうり、あめぐむぐつ、げた、ずつくぐつ等で、当時ではずつくぐつはあまりなかったように思います。遊びは、カッチン玉、ばんこ、ごま回し、竹トンボ、ドッチボール、縄とび、カンケリ、馬乗り、おにごっこ、陣取り、ベースボール、魚とり等だったようです。

遠足は、近くの山、川、池、公園等歩いていったものですが、その道中はたいへん楽しかった。修学旅行はまた格別で、そのころでは旅行などはなかなか行けないのに、一泊で旅行が出来るということはとてもうれしかった。長時間の汽車の中でも大変楽しかった。行く

先は伊勢神宮、二見ヶ浦で旅館についてからもわいわいさわぎ寝る時などは枕の投げ合いなどをして先生に何度もしかられました。

先生に叱られた思い出は、ある時、廊下を歩いていて教室の中から先生の声がして、二階の講堂でどたばたと遊んでいるのがやかましいからすぐに静かにするようにといわれ、講堂にいき静かにするように言ったのですが僕の言うことなど皆聞こうとせず遊んでいます。そのうちに自分もその中に入り一緒になって遊んでいたからさあ大変、さきほどの先生が講堂にかけ上って来て、ものすこいけんまくでとなり、やっとな静かになったのですが、さわいでいた自分も含めて約十五・六名全員がその場に三十分程正座させられ足が痛くて痛くてたまらなかつたこと。また運動会でやる遊



運動会で応援する父兄

技の練習の時のことですが男子はどうも遊技が苦手で、いやいややっていたらやはりものすこく叱られ、運動場の真ん中で正座、足にくいこむ小石が大変痛くてたまらなかつたことをおぼえております。

行事も年に一度の運動会、学芸会、第一小学校で行なわれる文化祭などで、運動会は自慢す

るのではありませんが、僕は小学校時代足に自信があったのでその日が待遠しく大変楽しみにしていました。

文化祭は第一小学校で行われ、習字、図画、工作、その他数多くの作品が展示されていました。遠いのですが電車で見に行くのも大変楽しいものでした。また校庭にはたくさんのお店の出店が並びそれは子供にとっては楽しいことでした。

現在の子供たちの先生に対する態度は当時僕たちが先生と接した態度とは大変な違いがあるようです。それは先生とはこわい人、尊敬できる人といった感じでしたが現在は友だちといった感じで先生との距離は接近しているのですが、先生を尊敬するといったことはすくないのではないのでしょうか。先生と児童というけじめをはっきりつけ、それだけではなくやはり児童からもっと先生として尊敬されるようにもってゆくべきではないでしょうか。だからといって先生と児童との距離がはなれすぎてもいけないと思います。

しつけの面においては、学校では家庭、家庭では学校といった具合にたがいにまかせ合うといったような気がしますが、学校でのしつけ、家庭でのしつけといった具合に分担して、その範囲の中で責任をもってやったらと思います。分担に際しては学校と家庭との連絡を密にしようと思つてしんげんに話し合いたいと思います。

木曾の流れ

大竹 兼久



木曾川

清流木曾川、今もこの呼び名に変わりはありません。小学生の頃、春まだうす寒い四月頃、私たちは競って初泳ぎをたのしんだものです。大山橋すぐ下の通称「巻岩」その頃は、まだ現在の水月、掬水等の旅館もなく、竹やぶ、雑草地でした。ここを溜り場に、寒さにふるえ、口びるを紫色にして……まさにカッパ天国そのものでした。

勿論、当時は木曾川に於ける水泳も学校では禁止されていなかったよき時代で、不思議に水の事故もありませんでした。

風物詩のうつり変わりも筏流しや帆掛舟の、のんびりした風景が思い出されます。順風満帆この言葉がピッタリのトマ舟の航行。ギーギーときしむ。カイ。の響き、そして昭和十二、三年まで続いた筏流し等々、この筏流しは、我家の家業で祖父母の代まで続いた木材回漕問屋です。

高山線の開通によりそれまでの木材の水陸輸送（いわ

五才頃まで家は農業と瓦製造業をしておりました。一年生に入学したのはたしか、大正十年と思います。

当時校長は榎橋重五郎先生、実に恐い先生でした。担任は村上忠左衛門先生、いつも詰衿の服を着ておられた。男子生徒は紺かすりの着物は上等で、普通は家織りの綿の着物、履物は藁草履か下駄でたまに、麻裏の草履、雪の降る日は高下駄に引きまわしを着て、どんなに寒くても通学しました。

遠足は日の丸弁当かいなり寿司、白い大きな風呂敷で、肩から背中にかけて一年生は各務野ときまっています。一年の修業式に操行可良業務勤勉に付き二等賞の賞状と修身の教科書をいただいた。嬉しくてとんで帰ったらおじがきていて、「二等賞ぐらいなんだ、一等賞をもらってこい」といわれた時、子供心にくやしかった。今でも忘れません。少し勉強もしたのか二年生には学業優等が一つふえて一等賞をいただきました。二年担任は江口静枝先生。紫色か小豆色の袴を付けて見えた。そろそろ学校にもなれみないずらをして先生を泣かせた。三年生になったら加藤信夫先生。黒い詰衿の服を着て教室ではいつも竹の根節を持って授業中にいたずらをする。ピシヤツと机をたたかれよく叱られる恐い先生でした。忘れもしません。授業が終り先生に礼をして帰る時、前の者がふざけて尻で私の頭を押した。こずき合っている所を先生に見付けられ、級長の徽章を三日間取り上げ

ゆる筏）が陸上輸送（貨車輸送）に切りかわるまで扱いました。私もこの筏に乗り清水港（城山下の入江の通称）より笠松港（笠松鉄橋の下）まで下った思い出があります。伊木山附近の急流の恐かったこと。帰りは積込んだ子供用自転車で堤防づたいに前渡經由で帰ったこと。遠い少年時代の思い出が今でも臉の裏に刻みこまれています。

時は経て三十数年、現在の清流……木曾川、河川の公害、周辺の山々の開発による近代化。モーターボートの騒音。川の流れは変らねど世の流れの変遷をしみじみと感じる今日この頃です。

最高の幸せ者

大沢 波夫



大沢波夫

小学校時代の思い出、あれからもう五十年、来年は還暦も迎える年となりませんでした。

日頃は仕事に追われ、余りいとまのない私ですが、じつと臉をとじて、遠い昔の思い出を一つ一つ綴り合せてみましょう。

男五人、女五人の子宝の家に、長男として生れた私、



級長の徽章

られた。家へ帰って内緒でいたら、翌朝父にわかってまた、大目玉をもらった。帽子の徽章よりもやや小さく級長は紫、副級長は赤の房がついて、いつも胸につけていたのでわからぬはずがありません。四年生になると担任は三木先生、小柄で頭髪も短く、夏などは白いかすりの着物に袴を付けておられた姿が浮んで来ます。秋の運動会は十一月の始め頃だったと思います。朝はシャツとパンツでは寒いので、ふるえていた事もあります。今NHKテレビでご存知の国盗り物語で有名になった金華山の剣舞をした事があります。その時の詩は、

(一) よせくる敵のときの声 狐城ささえんすべも無し
今日が最後の一戦さ 大手の門を早や開け

(二) 惜しきは誉れ後の世に 弓矢取る身の名を残せ
命は軽く義は重し 死ねやますらを君が為め

(三) 草むすかばねとしふりて 北風寒き金華山
昔の夢のあととへば うなじにかかる松のつゆ

この詩は羽場の薫田一三君と私が運動場の真中で、台の上にあがり合唱でうたい、全員が舞い練習をした。紺かすりの一ちようらの着物に袴を付け、白鉢巻に白だすき、刀は手ごろな竹を腰にさし、一せいに舞う様子は当時最大の見せ場でした。ところが当日は、歌手を先生が

やられた。声がかすれてすこしまずかった。後で先生は私に「ごめん、ごめん」と言われたので子供心に先生が気の毒でした。

今思い出すと色々な事がありました。五年生の担任は加藤直衛門先生、これまた怖い先生でみんなよく叱られた。何年になっても悪い組だとの先生にも言われた。今から思えばそんな悪い組でなかったように思えます。五年生では特別思い出もありません。やがて六年生になり小学校最後の年です。担任は五年生のとき、師範学校を卒業され赴任された若いスポーツマンのはりきり先生、体操・国語・算術・珠算・図画なんでもこいの野村義一先生。よくしほられよく学び、そしてよく遊んだ。こんなこともあった。一定にカードを全員に渡し、言語の悪い者は一枚ずつ取り上げる。また珠算で早くよく出来たものにはカードを渡されるなどいろいろな事をやられた。中でも学芸会が私には思い出です。

それは歌舞伎でも有名な、安宅の関を演じた事です。それを思い出して見ましよう。「源義経は兄、頼朝の疑いを受け、弁慶を先達にして山伏姿に身をやつし、主従合せて十二人奥州指して落ちて行く」と大伊木の山田正司君の朗読に始まり、関守り役富樫左衛門・羽場浅野清君、現在犬山中学長を両脇に家来を従え一段高き段上にていかめしく山伏をとり調べる所へ弁慶一行差しかかる。弁慶勝永美之助君、彼は五年生の時、郡上郡の山奥から東町

当関所に於いて山伏をきびしく取り調べよと頼朝公よりきついお達し、役目により富樫左衛門取り調べ致さん」弁慶「我等山伏あやしき者にあらず、この度、奈良東大寺建立の為、諸国勧進に廻る山伏にございます」富樫左衛門「まこと山伏なれば勧進帳の有るべきはず……」朗読山田君、弁慶背中に取りつづらより一巻の巻物取り出し、うやうやしく拝礼し、目よりも高く差し上げてまことしやかに声高にと読み上げたり。それなる豪力義経ではないか、とうたがわれ弁慶つかつかと義経の所へ歩みより、このにくき豪力めこれしきの荷物さも重たげに歩くから義経などとうたがわれる。かくしてくれんと持ちたる金剛杖を高く振りかざし、許させたまえ我君、と心に念じハッシとばかり打ちすえるまねをすればよかつたのに義経のかむり笠の上よりほんとうにたいたいでしまった。びっくりした私、声も出さじつとがまんしていた。見物の上級生も下級生も大笑い。富樫左衛門「最早うたがい暗れたり。お通りあれ」と、山伏一同舞台裏へ去って行く所で終り。後で勝永君にたすねたら実感が出ないから打ったと言う独断で演出をしてしまった。いそがしい父にねだって作ってもらった、わらじあみの、新調の笠は破れたけど楽しい昔の思い出となりました。一生忘れることはないでしょう。

学びの窓の聲に送られ、迎げば尊し我師の恩。六年生も無事卒業して高等科に進学した。その頃は校長宮脇五

のおばの家に養子にきた。後に広江を名のり愛知県師範学校を浅野君と一緒に卒業して、先生を中途でやめて京都大学農学部植物学教室に学び現在理学博士、広江教授として同大学に在職中である。体も大きく弁慶には当り



よく学び・よく遊べ

役でした。そこで私が義経。山伏の最後に豪力に姿を変え今しも関所へ差しかかる。「いかに弁慶旅人等の噂によれば安宅には特に関所を設け、山伏をきびしく取調べるのと何如か致したらよからうぞ」山伏一同「いやいや何程の事があるう。ただ打破ってお通りあれ」弁慶「打破る事はいとやすけれど大事の前の小事なればなるべくおだやかな手段を取りたきもので有る。さればこの弁慶におまかせあれ」と関所の前を通らんとする。富樫左衛門「やあやあそれなる山伏、しばらく待たれ、この度

蔵先生。担任は栗木謙二先生。高等科になって始めて男女共学になりました。それは女子が六年卒業と共に奉公や働きに出る者が多かったため、女子は二十名位もいたでしょう。毎月十銭の授業料を役場の収入役へ納めるようになりました。農繁期となれば休んで家業を手伝わなければなりません。試験になると解らないので祖母にたのんで学校へ行く。帰ってくるのとたんに父に一ぱつもらった事もある。そんな時はいつも祖母が仲に入り私の味方をしてくれた。中学へ行きたいなと思った。でも私の家庭ではそれは許されぬ。同級生で進学したのは男四人女二人の六人だけ。今の子どもは幸せです。ほとんどの子が高校へ行ける。学校を休めば母さんにしかられる。私たちの時代は休まなければ父さんにしかられる。今の子はほんとうに幸せです。十分勉強し立派な人になって下さい。大正時代の私たちにはこれが普通でした。今の私は、父母に対し不足とは思いません。十人の子どもを立派に育てて下さったことは大変でした。どんな寒くてもあしたには霜をふみ、また夕べには星を戴くまで酒も飲まず、タバコもやらず、ただ子どもの為に働き続けた父さん、これを助けた母さん。今から思うと神々しい位です。そして父も母も八十才の長寿を全うして他界された。おかげで私も男子二児を得て、立派に成人してくれ、それぞれ男の孫が出来ました。私等夫婦もじいちゃんばあちゃんになりました。私は今最高の幸せ者です。

今日はお盆の十五日。この綴方を書きながら、私をこの世代に出して下さったご先祖様、また一年生から八年間、担任の先生始め農業の金武先生、手工の高橋先生、唱歌の坂井先生、図画の大平先生、とそれぞれの先生に教えを受けた。すでに他界せられた先生、また不幸にして戦争や病気で若くして散った幼き頃の友に心より冥福を心より祈ると共に、今健康でおられる先生や同窓の友よ、益々達者で長生きをしましょう。

今日ある幸せをかみしめつつ……。

学校農園の思い出

桜井 一枝

美しく澄みきった秋空ではあるが、夏のように暑い土曜日の午後のことでした。

その当時、高学年の我々が、お慕いしていた、前宮の長瀬四部先生と蘇原の赤座村雄先生のご指導で、農業の実習に汗を流しておりました。先づ桑園の手入れをし、次に芋畑に入り、色艶の良い金時芋をころころと掘り出しました。最後に空畑の整地をして、麦播きの頃には、太陽も大分西空に傾き、腹ペコになりました。しかし誰

一人として先生に空腹を訴えるようなことはしませんでした。作業は着々と進み、麦播きを終って、農具の手入れ後片付をして、手足を洗った時、赤座先生が「みんなで芋を食べよう」と我々を呼ばれました。我々は気がつきませんでした。作業中に女子生徒が金時芋を洗って、大きな茶釜でふかしたのでした。先生が召し上げられるのを待って生徒も一斉に食べ始めました。女子生徒は食べずに、「皆さんどうぞ」といいながら引き下って行きませんでした。

着物のすそを上げて、夜なべで作ってもらったわらぞうりを大切にと思いながら、嫁振り坂を登り、内野前の大山街道の砂利道を急ぐ頃は、日もとっぷりと暮れていました。汗水流した金時の芋腹で、淋しい松林が西側に続く中を、いつものように話もせず、左右の足を前へ前へと運んだのも、今から丁度五十年前のことです。



農場跡

第二校下

大正・昭和卒業生座談会



座談会風景

出席者

司会 竹内耿介
校長 西垣勇三

伊藤 力
横山 守
永井数昭
飯沼信雄
山口 龍
早川与一
伊藤 昇
林なつえ
野田たまえ
三枝澄子
宇野敏雄
伊藤 正
伊藤 純
(順序不同)

司会 今晚は、お昼間お疲れのところ、夜分にご出席いただきましてありがとうございます。大正年代・昭和年代の方々、別々に座談会を開く予定でしたが、時間も少し遅くなりましたので、いっしょにお願いしたいと思います。今この学校も運動会のシーズンですが、みなさん方の運動会の様子といったところからお話ししていただけないでしょうか。

伊藤(正) 私たちのスタートの姿勢は今のよう座ってではなく、立ったまま右手だったか左手だったか忘れたが、こう前を出してやりました。そして「ようい、ドン」でなく、たしか「おおやまげっせい、ドン」だったと覚えていますが。

宇野 そうでしたね。

伊藤(正) 小学校時代はその「おおやまげっせい、ドン」というのが何のことかわからないまま過ぎましたが、戦後いろいろ私なりに考えたところ、どうも日露戦争あたりから出てきたことばで、大山元師をなまけてさういっただんだと思っていたら、実はさうではなく、先ほど宇野さんなどと話していたところでは、ドイツ語が語源のようです。「ようい、ドン」というのはだぶんあとの頃になってからのようです。

三枝 私どもやはり同じで右手を出して「ようい、ドン」をやっていましたね。

早川 それに履物は運動たびで走りましたね。

司会 そうそう、運動たびはずい分長い年代続きましたね。女の子はどうでしたか。

三枝 はだしのかたもありましたし、運動たびのかたもありました。

司会 服装はどんなでしたか。

伊藤(正) 男子はシャツにパンツ、女のかたは……

三枝 運動シャツにスカートでした。ブルマなんてありませんでした。

野田 私は小さい頃、小児ぜんそくで運動会の時はみんなよりもすぐ遅れて走ったりして、運動会がやってくるたびにそのことが心の負担でした。

司会 今の先生のように「体の悪い子は休んでいなさい」ということはあまりなかったですね。

野田 そうです。でも小学校三年までは、体操は休ませてもらいました。とにかく体操はいやでいやでしようがありませんでした。

飯沼 私の記憶では、大体あの頃の運動会は綱引きで始まり、終りは白虎隊でおさめたものでした。白虎隊は着物にはかま、白はちまきといういでたちで演じたものです。

司会 私どもは、あの刀を苦心して自分で作ったものでしたが……

一同 そうです。なかなかかつこうの良いのが作れなくてね。(笑い)

月頃には全校のソロバン大会が一日がかりで行われた。とにかく徹底していましたな。

三枝 習字なんか、真澄田神社や村国神社などへ貼り出していただけたりして競い合いました。また珠算などは朝必ずしました。お習字も軸を書く子は組で一人だけというようにきまつていて、それが展覧会と言うものにつながっていましたから、皆それぞれ一生懸命頑張ったものでした。

司会 読み書き、そろばんでしほられる反面そういう校内外の展覧会のようなものによって、励ましや楽しみを与えられたわけですね。

三枝 当時は少年団とか分団にわかれていまして、男子それぞれの分団があり、私どもは各務原の現在のお宮さんに社務所がありましたから、そこで学芸会のおけいこをしたりし、夏休みなどは先生がそこへお出になつてよく勉強などを教えてもらいました。とても楽しかったです。

司会 昭和の方々はいかがですか。

永井 私たちは昭和と言っても戦争の真つただ中で、運動会といっても、軍国調が盛んなときでしたから、楽しい思い出などというものはありませんでした。

司会 演技はどんなものがありましたか。

永井 そうですね、棒倒しとか、騎馬戦などありました。リレーなどはもちろんいまのようにやりました。遊

伊藤(正) 種目の間には「四条殿」などというのをやったな。それにいまでいう「紅白まり入れ」を当時は「源平まり入れ」といってやりましたね。それから走る競技では、いまの低学年の子がやるように五十メートルか、百メートルかを真つすぐ走るだけでした。それからいまま思ひ出しましたが「アール立て」といって、握りの両側に鉄の玉のついたもの(鉄車鈴のことらしい)を持ち、走って行ってそれを土の上に立てて返ってくるという競技を一・二年あたりでは必ずやりました。そして今のようにならぬことに競争や遊びをするというようなことは思ひもよらぬことで、必ず男女別々で行いました。

司会 入賞したときは、賞品なんかありましたか。

伊藤(正) ありましたね。ノートかえんぴつが三等までぐらいに出ました。

三枝 賞状もありましたよ。

宇野 話しは変わりますが、僕等の頃は学芸会が一番盛んだったように覚えていますが。夜まで先生の家へ行って教えてもらったり、先生の方が子供を集めたりしてやったものです。



座談会風景

伊藤(正) それに、あの頃は読み、書き、そろばんという明治時代の風潮が尾を引いていたためか、書き方をものすこくしほられたし、一時間目の前には必ず暗算やそろばんをやりました。昼も食事がすむとまた暗算をやったり出来たものから外へ出て遊ばせてもらいました。一、二

ヶ月ぐらい軍隊へ行つてこられた方が、高等科の子を教えていました。

三枝 女の子はそういうものをやられましたが、私たち女子でも包帯を巻いたり、担架をつつたりするようなことを体操の時間にやりました。

山口 体操の服装は、運動たびかほだしてランニングシャツとパンツでした。ふだん通学の時はわらぞうりや靴というものはありませんでした。よう忘れませんが、冬に雪がコツコツと降つていても足袋をはき、わらぞうりをはいて、この各務原から鶴沼(今の第一小)まで毎

戯的なものはなかったし、女子でも踊りのようなものはやりませんでした。

司会 「薙刀」など女の子の方はおやりになりましたか。

女性 なかったですね

早川 あれは高等一年か二年の人がやりました

が昭和の頃にはなかったですね。男は教練のようなものがありました。木銃のようなものを持って、師範学校を出た先生で三

日歩いて通ったものでした。あの当時は電車に乗るなどということには許されませんでしたから……。

伊藤(力) 靴はあるにはあったんだが、配給制度だったので、そんな大正時代のような服装に次第にもどらざるを得なかったわけです。

司会 ではこの辺で、当時の修学旅行とか四大節とか遠足のようなものについてお聞かせ下さい。まず大正時代のお方から。

飯沼 あの頃の六年生はお伊勢さんと決まっていますね。高等二年の卒業のときは、大体、京都・奈良となっていて、みんないっしょに行きました。旅館も三条の伏見館と決まっていましたね。

伊藤(正) 私は当時、大伊木に住んでいましたが、遠足は春に行われ、集合場所が大伊木の大山橋のたもとで、集合地まで行くのに一里余りあり、行先は尾張富士でした。だから集合地までの往復で二里余りは歩いたわけで、身体が弱い人はついていけなかったし、それだけでもう遠足はすんでしまったようなもので、そこから尾張富士までは用水に沿って近道を行けば、大した道のりはありませんでした。五・六年生の頃は軍事的な色彩が濃くなり、年二回の秋の遠足だということで喜びましたが、その時は必ずにぎりめしか日の丸べんとうに限られていました。そして日の出不動や追間不動辺りの山の中をぐるぐる歩くだけの遠足でした。授業がないので楽しくもあつ

たしキャラメルもなにも持てない楽しくない遠足でもあったわけですね。

司会 女の方はいかがでしたか。

野田 私、京都・奈良へ行つたとき、清水寺のあの坂がえらくてえらくて、先生やら友だちに背中を押してもらって、やっと上った覚えがあります。当時、私は相当太っていたもんですから余計えらかったんです。

司会 四大節のような儀式はどうでしたか。

伊藤(純) 天長節などの四大節は分校の子も必ず本校へ(鶴沼一小)出かけました。服装もふだんとちがって、親がはかまを着せてくれ、かすりを着て、分校の子は上級生について本校まで歩いて行きました。武場では一列に並んで長いこと待たうえに、校長先生や、ヤギひげを生やした磯野村長さんなどの長い話を聞かされたものでした。子どもにわかるように話されたものだろうが、なかなか子どもにはわからない話ばかりで、終るとやれやれということ、「ワアッ」といってはよく叱られたのでした。全部終わるとうどん粉で作った、丸いせんべいのようなパンのようなものをくれました。

司会 紅白まんじゅうではなかったんですね。

一同 まんじゅうなどという高級なものはありませんでした。

司会 昭和の方は、何もない時代でしたがいかがでしたか。

永井 私たちの記憶では、二年生までぐらいは、たしか紅白のまんじゅうをもらっていたようでした。そして、いまのお話と同じように、分校の子は式ときは本校まで上級生と行きました。

宇野 あの頃の先生は勤務年数がものすごく長くて、恐らく昭和時代のこの方たちも石黒先生、僕たちも石黒先生、というふうでした。女の吉田先生も長かった。だから兄さんも弟も姉さんも妹もというわけだから、何でもよく知っておられました。

女性 ああ、あのよくだたく先生でしたね。

横山 私はよう叱られたな。宝積寺は学校からの距離が一里余りあったから、朝大安寺までぐらい行って鐘がカンカンとなると「もう止めた」といって弁当を食べてしまった。(大笑い)一週間に三日ぐらいしか学校へ行かなんだ時もあった。

野田 宝積寺の人はこんな方(分校)まで通ったんですね。

横山 いや宝積寺の者は本校でした。

司会 そんなに学校をさぼって、先生に叱られませんでしたか。

横山 別にそんなに叱られませんでした。ただ成績が悪くなるだけですわ。それに家庭訪問などというものはとんだなかったですな。

三枝 叱られるといえは、私たちは水の入ったバケツ

を両手で前へ上げたり、おろしたりするというような罰がありましたね。

永井 私らの五・六年の頃は軍国調のはなやかな時代でしたから、特に連帯責任ということがよく罰を受けました。運動場へパンツ一枚でクラス全員が座るというようなことが三べんほどありました。

横山 あれはな、二十軒の坊が悪いんやぞ。(大笑い)
山口 私は三組で男女組でした。一組が後藤先生で体育などいっしょにはだか冬やつたときなど、きびしかったです。

永井 私たちは座らせられると、すぐ家へ情報が入り困ったものでした。「お前さんとこの子は、今日叱られて座らせられたな」といってね。

飯沼 話を変えますが、私の高等二年の頃、各務原分団歌を作ろうということで、作った覚えがあります。みなさん作ったんじゃないですか。分団ごとに男子も女子も月一回ぐらいつつ全部集まって各務原分団歌の練習をやって、私今でも少しぐらいは覚えていますが「はくいてい城下の……(歌)」というような歌で、次の者たちにだんだん申し送ったんやけど、それがだんだんどうかなくなってしまつて……丁度、分団の受け持ちが後藤先生でね「分団歌を作ってくれ」ということで作った覚えです。
司会 分団というのは、今でいうとどのようなもので

数人 少年団ですね。

飯沼 夏休みなど分団で集まりました。早起き会などありましてね。後藤先生はいつもいちばん早く来ておられました。

三枝 後藤先生は体育のときなどきびしい面もありましたが、冬の雪合戦のときなどスリッパで高いところ、低いところなどを走らされ、楽しい一時もありました。

司会 印象に残っている先生というのは、きびしい反面に子どもといっしょになってやって下さったやさしさを持った先生ということですか。

飯沼 そうですね。私も、後藤先生の受け持ちでなかったけれど、分団の係りということいろいろ印象に残っています。

三枝 そう、卒先してやられたですからね。子どもだけじゃなくて自分が先になってね。

飯沼 私たちが五・六年のときに、もとの競馬場を全校で耕して畑にしましたが、そのときでも後藤先生なんか先に立ってやられたですね。

司会 話題を変えてすみませんが、大正時代のお方、その当時の学級の数はおぼえておいででしょうか。

飯沼 私らの頃はいちばん多くて三部まであったな。どうや横山さん。

横山 そうやったな。一部、二部が男女別で三部が男女組でした。

一クラスの児童数が六十七・八人いました。つめこみでした。

三枝 私たちの頃の号令は「右へならへ」でなくて、「前へならへ」でした。そして、一・二年生のときは級長、副級長が一年間継続でしたが、三年生以上になると、はじめて、各学期ごとに選挙で級長、副級長が決められました。



座談会風景

伊藤(正) 級長、副級長は選挙の場合と、任命の場合があったなあ、どういふふうに使分けとったのか知らんが。

司会 宇野さんたちの頃はどうかでした。

宇野 やはり任命でしたね。

伊藤(正) 選挙といっても、投票用紙をいまのようにみんなの前で開票するようなことはなく、

先生が持っていかれたから、選挙といっても任命みたいなものでした。

司会 伊藤さんの頃はどうかでした。

伊藤(昇) 私らの時はやっぱり成績のよい方を先生が指名されたですね。永井さんらは成績が良かったので指名された方です。

横山 私らの頃はほとんどが戦争中でしたから、大正

伊藤(正) そう、全学年とも三部までで、全校十八学級でした。

三枝 私たちの頃はどうかというわけか女子が多くなって二クラスに分かれました。一クラス五十三人ぐらいだったと思います。

伊藤(純) 昭和十年頃までそうでした。男子は変らずでした。

司会 昭和年代のおかたはどうでしたか。

伊藤(正) 私どもも生まれは大正というだけで、卒業時は昭和十年頃でしたから余り変わっていないでしょう。

野田 その頃新校舎が建ちましてね、男子が入るとくちやくちやくにしてしまうということで、私たちが一番最初に入り毎日毎日ぞうきんがけをしました。

司会 伊藤ひろしさんの頃はどうかでした。

伊藤(力) 私たちの頃はやはり六年生までは三組あって、一組が五十三人ぐらいいました。男子が一組と男女組が一組、それに女子組が一つでした。

宇野 そんなに人口は増えなかったということですね。伊藤(昇) 私は小学校四年生までいたときは、分校にひと組でした。鶴沼の本校へ行った五・六年生のときは三組ありました。一部が男子で、二部が男子、三部が女子でした。

永井 私たちの頃は、たしかにクラスの数はふえなかったけど、なにせ戦争中で校舎がふやせなかったため、

も昭和年代も大部分は先生からの任命でしたね。

司会 先ほど「前へならへ」のことが出ましたが、並び方はいまのように背の小さい者が前というようでしたか。

林 どちらもありましたね。その時その時で。

伊藤(正) 運動会や四大節のような一列にたてに並ぶよいうなときは大きい子が前でした。また朝礼が毎朝あったがそういうときは小さい子が前の方で、ざあっと広がってラジオ体操などやりました。朝礼が終わって教室まで歩き、教室の前で級長が並べ、一斉に下駄を脱いで上ったときのことを思い出しても、やはり小さい子が前だったようです。

伊藤(力) 話しが変わりますが、あの頃分校から本校へ行くときたいい分校の方が成績が良かったですね。

伊藤(正) そうでしたね。あの頃成績のよい者は一等、二等、三等といって賞をもらいましたが、ものすごく分校の者がもらいました。

横山 そうやな、分校から来た者が、あの頃ベストばかり十回も取った者がいた。本校の者はアホウばかりみたいな気がしたもんです。(笑い)しかし考えてみると、分校の方は商人が多くて勉強できたが、ぼくらの方は百姓が多くて、仕事で使いかからかす家庭ばかりやから、無理もなかったと思うな。いつも私たちの方は仕事をしようということが主だったからアホウになってしま

った。(大笑い)

司会 そういう家庭というか地域的な条件でしょうね
まさか教育の方法や方針がちがうということもなかった
でしょうから。

宇野 そう、そんなことはなかったでしょうね。いま
横山さんがいわれたことが主な原因だと思うし、親もま
た競争していました。親の競争が大分影響しとったんじや
ないですか。

伊藤(正) いま成績の話で、分校、本校のことがでたの
で思い出しましたが、きのう朝日区で南町から来られた
大竹さんという方がじょう談まじりで「五年生になって
向こう(分校)から来た者をすいぶんじめたもんだつ
た。上級生もいじめたし下級生もいじめた」といってみ
えたら、もう一人の他の方が「ぼくも本校へいってすい
ぶんじめられ、肩身のせまい思いをした」といってみ
えましたが、私自身も思い出してみても、そんなこと
はなかったような気がするんですがどうですかみなさん
そりや子どものことだから時には口げんかくらいはした
と思うのですが、にくみ合って制裁を加えるようなこと
はなかったように思うのですが……。大竹さんは、ぼく
らより一つ下だけですがそんなことおっしゃって見えま
した。

横山 そんなことないよ。ぼくらよりいじめたもん。
(大笑い) いまでも覚えとるけど、○○君とか××君、

多数 (大笑い) そんなことないわ。

伊藤(正) いま、区域のことが出たので思い出したが、あ
のころ四年生で男女クラス(一つだけだ)であった者
も、本校へ行くと組分けがあり、分校と同じように男、
女別々と男女組になりました。それで五年生になると、
男女別々にしてもらえらるって、みんな喜んでもんで
した。「男女七才にして席を同じゅうせず」といった思
想があったためか、男子なんかは特に何とかして男子組
へ入りたいと願ったんです。ところが、発表のとき私は
男女組になっていたので、泣いて先生にたのみに行つた
し、他の多くの男子もたのみでいました。いつもこのこ
とが大きな話題だったようです。しかし、どうしても変
えてくれませんでした。その当時は文句だらだらで過ぎ
てしまいましたが、後年になってよく考えてみると、何
でもないことであり、変えられないはずなんです。

これは、いまのようにアイウエオ順で公平に組分けするの
ではなく、一年生のときからずっと生年月日順に名簿が
かかれています。だからだいたい四月から九月か十
月ころまでに生まれた子が男子組で、遅生まれの子だけ
が男女組なんです。ぼくは十二月生まれだもんだから男女
組というわけです。だから、いくらたのんでもいかんわ
けですわ。遅生まれの者は知恵も遅れているだろうとい
うことでそうしたんでしょうな。その男女組の中でも名
簿が、また生年月日順になっていたことが、すい分大き

△△君(名を伏す)というのがおつてな。(大笑い)あ
の頃(冒険だん吉)というマンガがあつて、あれをしよ
つちゅう見せてくれてごきげんをとりよつた。ようだん
吉の本を買ってきて見せてくれたもんやつた。(笑い)

宇野 そりやけんかしや宝積寺が一番強かつたもんな
(大笑い)

早川 しかし、五年生になったはじめのうちだけそう
いうことがあつたかもしれんが、それも横着坊だけでし
たわ。

宇野 そう、五年生のはじめの頃はそうだけど、六年
生ではもう打ちとけ合っていたもんな。

司会 山口さんの頃は、そういうご記憶ないですか。

山口 そうですね。私らのころはやはり五年生のとき
に本校へ行きましたが、どうしても分校の方が生徒数が
少ないですから、圧倒されそうな気になるでしょうな。
みんな「困結しなあかん」といい合つたことを覚え
ています。しかしいまのお話にあつたようないじめられ
るといふようなことはなかったですね。

野田 そうでしたわ。

横山 あれで三ツ池も分校だったんかね。

多教 そう、三ツ池も分校でした。大伊木と三ツ池が
分校でした。

横山 三ツ池はそれも固まっとなんだが、各務原が
どうもいかなんだな。

くわつてからわかりました。どうしても男女組へ入りた
いという話は、先輩も後輩も、登下校のときなどよくし
ました。

司会 大分、話はずみ大正年代、昭和年代の区別が
つきにくいほどになってしまいました。この辺で当時
の遊び、あるいは水泳というようなお話をしていただけ
ませんか。まず大正年代のかたからお願いまし
ます。

宇野 私らはよく飛行場の土手のところへ遊びに行つ
たし、それから山の前の池へよく泳ぎに行きました。そ
れから大伊木の河原ね、あそこも泳ぎ場所でした。そし
て競馬場、この競馬場は本場によい遊び場でした。

司会 競馬場というのは、どこにあつたのですか。

宇野 おがせ池のすぐ近くにありました。

横山 私らの一、二年は飛行場見学が主でした。

司会 ええ、宝積寺から飛行場辺りまで遊びに来られ
たのですか。

横山 いや遠足のときの話ですわ。(笑い)飛行機を
見にね。

宇野 そう、あそこの土手でじつと一日中、飛行機の
上を見るのを見ていた覚えがあります。

伊藤(正) 遊びといえば、昔のわらべ歌に出てくるよう
な、冬であればこま廻し、たこ上げ、夏になれば川へ行
つて泳ぐというようなことが多かつたです。その中間の

春や、秋は、山や野原のような所へ出かけたことを思い出します。私は大伊木で横山さんたちと同じように距離が遠いものだから、学校の行き帰りはよく遊びました。松林の松にかばんをかけて遊びまわり、家へは暗くなつた頃しか帰らないといったような毎日でした。とにかくかばんをどこへ置いたか忘れてしまいくらい遊び、自然とよく親しんだものでした。

司会 そうですか。当時は行き帰りの遊びの中からいろいろ学ぶことが多かったでしょうね。

横山 そうばかりじゃない。家へ帰ると使われるもんで遊んでつたんやろう。

一同 (大笑い)

伊藤(正) 私はそういう家ではなかったが、友だちの中には家で仕事をやらされる者もいて、「学校で仕事していた事にして、つき合え」といわれてはよく遊びました。子ども心に勤労はしなければいけないが思いながらも反面、毎日毎日ではとてもやりきれないというような気持ちでしような。

早川 私の場合は、いくら遅く帰ってもだめでした。家の者は蚕の方へ手がとられ、「お前、夕飯の仕度せい」ということで、やっぱりよく働かされました。そして、家の中は蚕だらけなため、土間で寝ました。むしろをしいて寝、朝は朝で、弁当のご飯は自分でたいて持っていたものです。

伊藤(正) そうですね。あの頃お蚕を(春こ)百貫とる

家が二軒あったのを憶えています。百貫とろうと思うとどえらいことです。だから学校もその頃は蚕休みといって、たしか一週間か十日位休みでした。お蚕を飼ってない家の人は学校へ行って自習をしました。

野田 私のところは商売でしたから、やっぱり学校へ行って先生と勉強したり、よく遊びました。

司会 飯沼さんのお宅は当時、なにをやってみえんのですか。

飯沼 私んところは、いも問屋で、遊びは先の座談会で明治年代の方がいっておられたように、「ばんこしよ」というのをよくやりました。竹馬もやりましたな。

伊藤(昇) 「駆逐」という遊びもようやったな。帽子のひさしを横にしたり、後ろにしたりして、相手とばったり出合つとじやんけんして捕りよになつたとかならんとかで、手をつないだりして……。

横山 そうや、かすりの着物をぼろぼろにして、陣取り遊びをやつては家でよう叱られたな。(笑い)

飯沼 また、あの頃は魚もたくさんいました。私は土屋さんと、とうふ屋さんのみの子さんという子と、もう一人四郎ちゃんという子と、もっぱら山の前の細い川で、田植の頃せき止めてはかえる取りをしました。うなぎがもううじやうじやおりましたわ。バケツにそれを入れて帰つてくるとちやうど前の土屋さんがこがうなぎ屋で、

温いご飯をもらつていっては、焼いてもらつたうなぎをのせてもらい食べたもんでした。

ご字野 そうや、ようおつたな。一メートル半か二メートルぐらいの中の川やつたけどな。

飯沼 そうやってせき止めるもんだから、よくお百姓さんから文句をいわれ、そのたびにおやじがあやまりに行きました。

司会 四ツ手という網はありましたか。

飯沼 そんなものは使つたことなかった。とにかく、くさみとバケツで充分とれたんだから。

一同 ほう、おるもおつたもんやな。他の魚もおつたんやろ。

宇野 フナなどおつたですよ。結局、山の前の池から下りてくる川だから、たくさんおつたんでしようね。

司会 林さんたちの遊びは何でしたか。

林 そうですね。お手玉をしたり縄跳びのようなものをしましたね。縄とびといつても、いまのようなひもでなく、自転車のチューブを切つてつないだもので、そうですいまでいうゴムとびですね。

三枝 雨降りなどはあや取りもしました。お手玉などは「青葉繁れる桜井の……」というような歌をうたいながらしました。

林 あの頃はお手玉といわずに「おひとつ」といいましたね。

伊藤(正) それから川泳ぎの制限は「木曾川の本流で泳いではいけない。それ以外の所で泳げ」というてい度でした。

早川 夏休みになると少年団の自習会があつて、それが終わると泳ぎに行きましたが、ひとしきり泳ぐと魚とり、また泳ぐということのくり返してました。知らぬ間に本流へ出てしまうということもありましたが、おぼれたという話は聞いたことないです。

伊藤(正) 少年団は、夏休みになると男女集まってお昼頃に自習会を開いたんです。みんな一つづつりんご箱を持ちより、それを機代わりにしてやりましたが、ほとんどは、がやがやしやべつてしまひ、「夏の友」を写し合程度のものでした。

三枝 学校でもお蚕休みというときなど、登校してくる子は五、六人で、ほとんどがお蚕を飼っていました。私は学校へ行った方でしたが、先生から言われたことをやつたぐらいで、漢字の書き取りをノートに線を引いてやりなさいといわれ、一週間ぐらいかかって何字かを練習したり筆で習字をしたり、その子その子に合った課題を先生からいつけられてやりました。

司会 ではこの辺で昭和年代のかたの遊びをお聞きしたいと思います。

伊藤(昇) 私たちはそうですね。お正月だと、「たこ上げ」が主で、奴さんか兵隊さんの絵のものが多かったです。

ふだんの遊びとしてはカッチン玉とか、夏であれば、おがせの池で泳いだり、秋になるとドングリひろいに行き、コマを作ったりしてあそびました。

山口 当時は今のようにせせこましくなく、ゆったりしていましたし、空地や競馬場、馬小屋などもあったので、遊び場所には事欠きませんでした。

永井 私らの夏休みは、大体いままでのかたちと同じようですが、私らは家で十円もらつては、電車に乗って大山まで遊びに行きました。片道五円でしたからね。そして向こうへ行くと橋の下で泳いだもんでした。

司会 その頃は、本流で泳ぐことは禁止じゃなかったんですか。

永井 いや、あの頃はとにかくたくさん泳げればよくて、泳げないと恥ずかしい思いをしますからね。先生も見に来るようなこともなかったし、本流もなにもなかったですわ。それでも事故はなかったし、木曾川を横断する子もいたです。

宇野 同級生でも、水におぼれて死んだなどというのは聞いたことないですね。

一同 そうです。聞いたことありませんね。

司会 木曾川の川巾はいまと変わらなかつたんですか。

宇野 ダムができてからは広くなったが、できる前は同じでした。

山口 夏休み私たちは、泳げない者は強制的に泳がさ

れました。国民皆泳の時代でしたからね。

伊藤(正) そして今のように水泳パンツはなかったからほとんどがふだんのパンツのまま泳いで、乾くのを待つてから帰りました。それに当時は白いパンツではなく、男は黒いパンツでした。

横山 私らはもう川がすぐ目の前ですから年がら年じゅう泳ぎたいはお手のものでした。冬でも泳ぎましたからね。

司会 宝積寺は山が近くにありますが、山などへは行かれませんでしたか。

横山 私らはほとんど船頭に連れられて歩きましたから山へは行きませんでしたね。

司会 では自分、時間もたちましたので、何でもよろしいので、今まで出なかつたようなことを簡単に話願えませんか。

宇野 けやきについてですが、当時も大きかったです。運動会ときは万国旗をけやきから綱をたくさん引っぱってつるしました。

三枝 そうでした。円陣をつくるときでも、けやきを中心にして作りました。

野田・林 そう、けやきが運動場のまん中にありましたからね。なにをやるにも、けやきを中心にしてしました。

横山 運動場の下の向こうの方に、校舎があつたが、

あれ何でしたかな。

三枝 工作室でした。あそこで農産物の品評会などありましたね。白菜とかかぶらなど十二月頃ですね。

司会 そのお話の年はいつ頃のことですか。

伊藤(正) そうですね、昭和五十年頃でしたな。そして、子どもの手工の作品などをバザーで売るようなこともありました。商工祭を兼ねて習字や図画などを売ったんです。作品即売会ですな。

早川 作品には名前が書いてあるから、近所の人が、「お前の作品買って来たぞ」などといってくれたりしてね。ろくでもない物もありました。

横山 あれは学校の費用をつくるためにやったのかな。

伊藤(正) いや、そうじゃない。ちゃんと本人に金が返ってきたから。費用をつくっていたのは商工祭のとき、婦人会で、あの頃は処女会といっていたが、その人たちがいもでかりん糖のようなものを作り、それをセロフアンの袋に入れて売って、会の資金にしていた。

司会 永井さんや山口さんの頃は戦争たけなわの時代でしたから、いまのようなことはなかったでしょうね。

永井 そうです。私らの時は、競馬場を耕してさつまいもをつくりました。つくったといっても苗をうえるだけですが、土地が悪いせい、あまりできはよくなくなつたです。それまでは土地が放つてあり、私らの時にたしか四年生以上ぐらいが全校来て開墾しました。(昭和十

八二十年頃)

横山 十二年頃でしたか、和裁室といつて、はかまをはいて裁縫をしていた頃があつた。

三枝 あれは前からあつてね。高等科を出た方が補習課程をとられて、やつてみえたんです。その頃、私たち四大節には、白たびをはく人とはかない人があり、はく人も汚れると家でしかられるので学校まではたもとに入れ、学校へ行つてからはいたことを覚えています。また、黒の紋付を着てくる人は組で一人ぐらいで、たいていは親のおさがりをもらつてみえたようでした。

伊藤(正) 私ばかりしゃべりましてすみませんが、飛行連隊が近くにあつたということ、最後にそのことを述べさせてもらいます。私が二年生の頃だつたと思いますが、当時はまだサルムソンというような飛行機が飛んでいて、時速がわずか五〇〜六〇キロメートルぐらいで、子どもながら実に遅いなあと思いました。西風などが吹くと、飛んでいるのか止まっているのかわからんような飛行機でした。その飛行機からよく落下傘のようなものを落とすんです。演習のためだと思うんですが、それがきれいな色で、風があると小伊木の辺りまで飛んで行くんです。

それが子どもは欲しくてたまらないので、学校帰りなど拾いに走つたものです。ところが、石黒先生はきびしきかつたのでそんなことはなかつたと思ひますので、たしか村上先生のとときだと思ひますが、先生が黒板の方を向い

て字をかいていっているうちに、横着坊二人が窓から出てそれを拾いに行ってしまったんです。先生も途中からそれに気がついてみんなに聞き「仕様のないやつらだ」といつてみえたのを憶えています。その時の二人は一、二時間ぐらいしてから帰って来たんですが、そのあと職員室で立たされて、こっぴどくしかられたようです。まあ、そのくらい授業ものんびりしていました。

それから、飛行機の飛ぶ回数も非常に少なくて、「ああ、今日は飛行機が飛ぶ、珍しいぞ」というくらいでした。それが昭和四年頃で複葉の飛行機でした。昭和十四年の支那事変のときも、複葉九二偵察機という、胴体だけアルミカジュラルミンで、あとが木製の飛行機で、その飛行機が飛行第二連隊として出動していました。

野田 私たちの頃、本校へ歩いて通っていましたが、その帰り道など、よく馬車のうしろへ乗って帰ったものでした。私、本が好きだったので馬車に腰かけ、のんびり本を読んで帰らせてもらったことを憶えています。

司会 馬車のただ乗り兼、二宮金次郎というようなことですね。(笑い)ではお話はつきないと思いますが時間もないへん遅くなりましたので、この辺で座談会を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

在職十九年の歩み

野村 義一

教師生活振り出しの地として、本校に赴任したのが大正十四年九月、小林村長、宮脇校長の時です。その当時の校舎は西側が南北に通ずる廊下であり、樗と檜の木間に中舎があって、丁度E字形に建っていました。現在の北舎の東平家建が新校舎で、中舎南舎は何れも旧式校舎、というのには廊下の北側は壁も窓も無く、全くの吹きさらしで、風の強い日は、授業中の教室へ雪が舞い込んで来たもので、勿論ストーブはおろか火鉢も無かったと思います。校庭も北・南・下の三校庭がありました。一番広い北校庭が樗と北舎の間ですから運動会は狭い処で行ったものです。文化らしいものは、職員室、宿直室の電灯ぐらいで、補習学校生徒は、薄暗い石油ランプの教室で勉強したのですが、疲れた体で夕食後徒歩登校、徴兵検査の年まで頑張ってくれました。大正十五年から校舎の大改装が始まり、最後に中舎を二分して西側と下校庭の東端に移築して現状となり、校庭も上は一つとなり樗が真中になり、一層鶴沼小学校のシンボルの存在となりました。学校の西側は渺々たる桑園で、春蚕上簇期



昭和7年の職員アルバム

は「お蚕休み」と言って、一週間授業を休み、児童はその手伝いに精を出したのです。先生も悠長で午前中は教授細目づくり、午後は全職員庭球に打ち興じておられました。今の多忙な先生と比べると夢物語りでしょう。その頃の学校行事は、四大節の儀式、卒業式、遠足(春一回)、運動会、学芸会位でしたが、昭和十年頃から、個性教育と技能教育が叫ばれ、全校写生大会を大山橋畔で、旧正月の二日に読書会を、三月始めに珠算競技会をと加わり、行事も多彩になって児童も忙しくなってきましたが、栗木先生が指揮下さったの四大節の挙式の厳粛さや、行事に対する児童の奮起、努力は、現代教育と感覚は勿論異なりますが、行事毎に、児童の緊張と努力を促して、決して無意義でなかったと確信しています。こうして次の学制改革に至るまでが、十九年間在職中で一番おちついた極めて平穏な教育が続けられたと思います。

昭和十六年四月、国民学校令実施で、皇国民の錬成を目指し、国民精神の涵養と体力増進の教育が重視され、小学校にも柔剣道薙刀が課せられ、

修業證書
浅野明夫
尋常小学校第四學年課程
修了セシコトヲ證ス
大正六年三月二十六日
岐阜県岐阜市藤原町尋常小学校

卒業記念アルバム



修業證書

食糧増産としての農業科が重んぜられ、逐次教育も戦力増強へと傾きつつある時、再び教頭として勤務したのが、戦争も末期の昭和十九、二十年の二ヶ年です。

何れの学校がそうであったように、校庭は通路を残して畑と化し、おがせ駅近くの元競馬場を開墾して、一大農場を経営し、作物は甘藷で、秋には数千貫を取獲し、下校庭全部を芋穴として貯蔵、冬期の学校給食に当てたり、兎の毛皮、桑皮、団栗等の供出に協力し、機動学習と名付けて、おがせ農場、小伊木松林、大山橋畔を移動教室として、錬成教育を発表したのも、この十九年でした。しかしこの年も、二学期末からは敵機の飛来で、校庭の隅に職員用防空壕、各学校近くの道路端に各分団用防空壕を、父兄の手で設置し、空襲警報発令と共に迅速く待避させていたが、附近の畑に軍用機が分散すると、空襲も頻繁となって危険に曝され、授業の継続も不可能となったので、警戒警報発令と共に、厚い綿入れの防空頭巾を被せ、分団受持の教師が駆け足で、遠く三ツ池、宝積寺迄も送り届ける日が多くなりました。戦時中で、男女共若い先生が多かったとはいえ、今思うと、ほんとうによく走って下さったと感謝します。

昭和二十年も四・五月は何か授業も続けられたが、六月以降は校舎の殆どを軍隊が占拠し、その上艦上爆撃機の低空掃射で、児童の登校は全く不可能となり、止むを得ず各町内の社寺・公会堂等を借り受け、分散授業と

は名ばかりで自習の監督程度、それも空襲となれば直ちに解散帰宅させ、先生は校舎防衛の為直ぐ掃校するのでした。今は亡き勝野貞一校長は、職員を指揮して校舎の被災防止、教頭の私は、陛下の御写真を背負って、西町二宮神社の横穴に待避するのが日課となりました。貴重な備品図書類は栗木先生や西町の梅田さんの土蔵に預けたものです。今も尚残る南舎第一教室の柱の機銃の弾痕を見る度に、当時の悲慘さを想起し戦慄を覚えます。

昭和二十年八月十五日、終戦と同時に軍隊は解散して、校舎も逐時返還されたが荒れ放題。極度の緊張から一躍しての虚脱状態の中へ、武器兵器等没収の厳命で、青年



教え子と共に

学校用模擬銃を始め、式道具一切を供出したリ焼却したり、その上、直ぐにも米軍が飛行場に進駐するとの流言もとび、明日の目途も立たず恐々たる日の連続でした。

九月新学期と共に修身・歴史・地理の禁止で、学校は勿論各家庭にあるものまで、これら三教科の教科書・指導書、参考書等一切を回収して提出、他教科も忠孝・軍事に多少なりとも関連のある個所は、指

示に従って墨をぬって抹消したり次々と発せられる教育改革の進駐軍命令に途惑った半年間でした。特に心を打ったのは、式毎に拝した御写真(当時は御真影と呼ぶ)の奉還と国旗の掲揚を一切厳禁された事で、今日の繁栄など夢想もし得なかつた当時では、何か教育の中心を失ったような寂寞を感じたのがいつわらない告白です。この年の卒業生が、小学校卒業証書を持ち出されたら、その紙質、大ききの貧弱さに、当時の苦難困窮を想起されるでしょう。

翌二十一年四月転任しましたが、同年四月二十九日天皇誕生日(当時は天長節と呼ぶ)これが学校における四大節の式の最後であり、今は亡き勝野貞一校長が教育勅語奉読の最後者となりました。

昭和三十六年四月、教師生活振り出しの鶴沼へ校長として三度目の着任。翌々年三月退職の短い在職中にプール開きを見るに至りました。木曾の清流に沿い乍らも、その水泳すら禁止されていた児童の歓喜、今も眼に浮びます。当時学校用プールの建設は郡内では本校を創始とします。

翌三十七年は、更に町体育館兼講堂の建設にと、これ又強力な促進運動を展開の結果、年内実現を見る運びとなり、八月三十日起工、夜を日に継ぐ突貫工事で、同年十二月二十四日竣工式が挙行され、翌年三月には全校児童参列、盛大な卒業式を挙げる事が出来ました。三十

七年は、町役場の焼失で、保育所と議会に四教室を貸与して急場を凌いだ苦難の年であったと思われるが、二年連続の二大事業は校下父兄の教育に対する熱意の賜です。殊に、体育館建設に当っては建設委員長三善氏を始め各委員、土屋育友会長並びに林、横山両副会長を中心に各地区委員、これら各位の御尽力は筆舌にも尽せぬ程で、遠く神洲、揖斐、岩倉と各地有名校の体育館を、自家用車を提供されての研究視察、内部備品も、校下全戸は勿論、遠く県外の方々にも依頼され、体育施設を除く殆どの備品は、この特志によって完備されました。大阪在住大倉甚吉氏寄贈の銅製大花瓶を、遠く富山県高岡市まで、深夜列車で大竹助義氏と購入に旅した思い出、今なおおぼろげです。

戦前戦後を通算して在職十九年、私の第二の故郷として思い出は数々と尽きません。この思い出の学校が、茲に意義ある百周年を迎えられるに当り、年々この学び舎に入り且去る児童の幸福と、学校のより一層の発展を祈り在職中蒙りました校下各位の御鞭撻と御交誼を、衷心感謝して筆を止めます。



作業風景



夏休みの一コマ

昭和前期



昭和二年度陸軍特別大演習記念犬山橋御通過の御光景



思い出の修学旅行



思い出の校舎



体操までが軍国調に

昭和十九年、米機B二十九の本土空襲は、毎日に激しくなり、

昭和前期の歩み

石田 幸彦

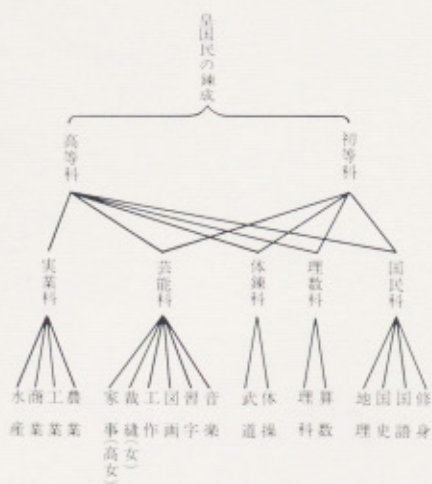
昭和六年の満州事変勃発以降、教育界にも戦争の影響は次第に波及するようになってきた。昭和十二年の日華事変以降は、更にこの影響は強くなり、戦時下教育という考え方で支配されるようになった。

十六年の太平洋戦争を契機として、教育全般が、非常時に備えるものとなり、戦時教育令が公布されて、年次を追って正常な学校の教育は殆んど停止に近い状態であった。

小学校は、皇国民育成の目標から昭和十六年国民学校と改められた。

そして国民学校の目的は、国民学校令第一条の「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的練成ヲ為スヲ以テ目的トス」という四〇字に要約され、教育の内容も、(国民科、理科、算数科、体育科、芸術科、実業科と編成替えされた)。

国民学校の教科の構成

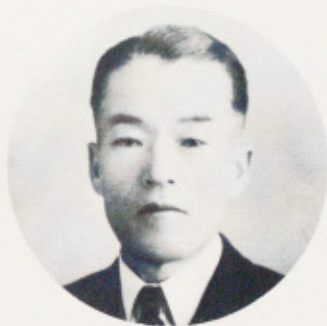


疎開してきた児童の生活は、一般に貧しかった。食費は、一月二十円程度で、児童は常に食糧や薪炭の調達に使役され、先生は、生活物資の収集に東奔西走した。昭和二十年七月十三日、遂に各務原分校三教室は、米機B二十九の空襲により焼失、同年七月三十日、本校南

昭和時代の学校長



第23代 野村宗男校長



第25代 勝野貞一校長



第24代 桑原精一校長

併せて戦局の不利となった六月、政府は「特二国民学校初等科児童ノ疎開ヲ強度ニ促進スル」ことを決定した。対象となったのは、初等科三年以上六年までの児童で、本校へも、名古屋をはじめ各都市から縁故先を頼り、かなりの児童が疎開してきた。

目的——課程——教科——科目

舎も機銃掃射を受けた。
幸いにして、児童は不在の為、死傷者を出す大事に、
至らなかつた。

かくて、八月十五日の終戦の日を迎え、激しい戦時体制の教育は、終りを告げた。

昭和二〇・二四・二 尋常科二手工科加設認可。教員住宅

新築(分校)

昭和四・一一・九 増築校舎落成増築申請、運動場拡張

昭和五・三・三〇 増築校舎落成

昭和一〇・一〇・二三 二階建八教室請負入札

昭和一一・五・二六 増築校舎落成式挙行

昭和一一・四・二 学校改正ニ依り尋常高等小学校ヲ鶴

沼国民学校ト改ム

昭和一一・六・三〇 北部中舎ト東舎廊下及便所通路板壁

及傘棚新設

同 奉安殿及尊徳先生銅像周辺庭園整理

同 北部校舎前庭園北側築堤茶室掃種

昭和一一・七・一〇・一五 東舎南教室ヲ鶴沼村信用組合ニ貸與

昭和一一・八・五・二九 国旗掲揚塔、奉安殿鉄棚供出

昭和一一・八・八・二四 二宮先生像供出、其ノ他金物類供出

以上供出代金、三一八円也

昭和二〇・七・二三 各務原分校西三教室午前一時頃敵機

投下ノ焼夷弾ニ依リ焼失ス
各室備品並杉浦警氏寄贈ノピアノ焼失

昭和二〇・七・三〇 敵小型機各務原空襲午前九時三十分
南舎ニ機銃掃射ヲ受ク
昭和二〇・七・三〇 本部各務村山前元航空敵技術工員錬
成道場ニ臨時分教場開校



防空演習の炊き出し

昭和前期卒業生座談会

出席者

小川たづ子 沢野すみ子 坂井まつえ
大栗 武夫 河村 京二 勝野 武司

山田 静一 武藤 素 勝野 貞子

後藤 幸夫 加藤 一男 伊藤富美子

土屋 勤 (順序不同)

司会

石田 幸彦 記録 片桐 玉江

司会 まず始めに在学時代の学校の特色

についてお話ししてください。



勝野

勝野武司の子とさんと比べて私たちの

ころの教育はスパルタ教育でした。今の

の教育は個々を尊重するあまり何か甘く、

なまぬるい教育のようですね。私たちは過去にそういう

教育を受けているので、物事に挫けない強さとか耐久力

というものができているように思います。

坂井 掃除ひとつにしても先生に叱られて、なんべん

もやり直しをしたものです。

武藤 こわい先生もいましたね、後藤先生なんか。;

大栗 水泳も今とは違いますね。私たちはいつも木曾

川に行きました。上級生も下級生をよく面倒をみました

ね。そのわりに事故者もなかつたです。今の子どもたち

に比べてもっと野性的だったですね。先生も別にとやかく

言わなかつたですよ。

司会 こういったきびしい教育を受けられたことがみな

さんの人間として生きていられる上においてバックボ

ンになっているわけですね。

土屋 当時の先生はきびしかったことは事実ですね。

そして筋が通っていましたね。忠に孝に。親に孝にとい

った形でしぼられたんです。形式主義にのったきびしさ

ですね。

加藤 辛かったこと、苦しかったことが記憶に残りま

す。そのことが、今の自分の中に生きています。

河村 たまたま私の担任の先生は代用教員の人で陸士

出の人でした。座禅を組ませられて精神教育、つまりス

パルタ教育をうけたのですが、たとえば廊下を走っては

いけないと決められていて、だれかが走ったんですね。

私は級長をしていました関係で責任をと

られ、ひどく叱られました。

後藤 家庭生活の本質からいっても共

同生活という考え方は、生き方があつたわ

けですね。戦争につながる教育体制の中

でのきびしさがあつたということは、試練とか、苦しさに

耐える力、その精神力を養成されたのだと思います。

加藤 三年生の時でした。夏の暑い日に校舎の回りの

草取りをしていました。水が飲みたくても「午前中は飲

んでいかん」ときつく言われていました。でも、たまたまなくのどが乾くので、こそつと水を飲みました。そして先生が「兵隊さんほもつと苦しくても辛棒してらんだから……」とつよく叱られたことがあります。

武藤 遠足のとき、いやあの当時は行軍と言いましたが、水を水筒につめて持たせてもらえなかった。だが、かえりに辛棒出来なくて、川の水を水筒に入れて飲みました。



大栗

あのころは学校もいろいろ休みがありました。四年以上になると田植え、養蚕休みがそれぞれ三、四日ありました。尺取り虫をつばに入れて学校へ持ってきて先生に出したことがあります。つまりこのころは農家の仕事と学校が結びついていました。

河村 昭和十七年でした。桑の皮むきをしました。学校でとる量を決めて、それを強制的にやらされました。どنگりも山へ取りに行きました。ずいぶん叱られてやらされたものです。



高橋

暑い夏の最中、学校から、木曾川の川原へ砂利をとりに行ったことがありますが、とても辛かった覚えです。

司会 勉強の面でもきびしかったが、働くという面でもきびしく強いられたと

いうことですね。

沢野 毎日のお弁当も麦ごはんしかいけなかったです。

土屋 麦めし、日の丸弁当、なつかしいですね。梅干を毎日ごほんの上に入れるので、弁当箱のふたのまん中に穴があいてしまいましたね。

小川 今は栄養面を色々考えられた給食ですが、私たちのころは、冬になると当番制で、母親が味噌汁をつくりにきたものです。大根、人参、里いも、など野菜をたくさん入れた暖かい味噌汁の味は今も忘れられないですね。



高橋

小川 戦時中は勉強もあつたけど、高学年は少なかったですね。先程の話のようにどنگり拾い、桑の皮むき、大安寺堤の開墾等をずいぶんやらされました。

司会 では、当時のみなさんの遊びの様子やその面白さをひとつ。

大栗 「陣取」をよくやりました。朝、母にボタンをつけてもらうのですが、もう帰りにはみんなちぎれて、服はベタベタに汚れ、引きすり回されるので服は破れ家へ帰るといつも母に叱られる始末です。それが毎日続くのですからね。

土屋

でも、それだけに素朴な遊びと言えるでしょうね。運動靴は配給で、なかなか履かせてくれませんでした。それで、家の裏口から、そつと入って運動靴をはいた覚えがあります。普通はわら草履ですが、後ろがすり切れてしまつて遊んでいたこともあります。服装は、冬は綿入れのデンチコ、もも引きでした。



高橋

後藤 当時の遊びは手近な物を活用して遊んだということでは違いますね。そして、竹とんぼとか、竹馬とか遊びの方法にしても道具にしても工夫しました。

土屋 遊びの思い出として国鉄の沿線の枯れ草に火をつけたことがあったんですが、だんだん拡がって、なんともならず泣くくらいのもちで逃げ帰ったことがありました。もちろん火は消してもらいましたが、後で学校ではびびりどく叱られました。とにかく当時は素朴な遊びで行動的なものだったですね。

小川 女の子はお手玉遊びをよくやりました。お手玉は自分でつくったものです。それから自転車の古チューブを切つてつないでなわ跳びもよくしましたね。

司会 今、子どもたちは集団下校をしていますが、その当時の学校帰りはどんな様子でしたか。

大栗 分団で集まって帰りましたね。ときどき「歩調とれ!!」をやったもんです。

河村 そのころは山崎分団がなく、東町と南町だけで

す。東町の分団の子は「おまえはこつちや」というけど、南町の方は「こつちや」というのです。私はどつちへ入つていいかわからず困ったことがありました。あつちへ行つたり、こつちへ行つたりして……。〈爆笑〉

勝野 昭和の始めごろの宝積寺の子は力の強い者が多かったですね。ほかの部落の小さい子をなぐつたりして帰つたものです。

山田 帰る途中、田んぼの中で大げんかをしたことがありました。

土屋 やはり部落毎に気もちが固まっていたようですね。運動会も部落の対抗意識も強かったですね。あれは二六〇〇年だったと思うんですが、伊勢神宮へ行ったとき、一人の子が入浴したら、よその学校の子がなぐつたりしたのです。そこで学校と学校との大げんかになったことがありました。当時は連帯意識が強かったですね。



谷

勝野 六年生のときでした。私は隣の子とお金勘定をしていました。それが先生に見つかり、一時間中バケツに水をいっぱい入れて持たされ、手は不動明王のようにして立たされました。

司会 連帯責任ということばが出ましたが、叱られた思い出についてお話しください。

河村 連帯責任の話ですが、先生が授業の始めに「き

ようはテニスをやらせたる」と言ってみえたのに、ある子がガラスを割ったことから、テニスは中止になり、組全員が立たされたことがあります。一人の者が悪かったら全体で責任をとるという考え方が強かったですね。

土屋 高等科一年の時でした。運動会のタンプリンの練習がありました。腰かけの上で逆立ちをするのですがみんながこわくてガタガタしていました。運動会間きわでもあり先生も頭にきたのでしよう、組中の者を立たせて行ってしまわれました。あたりが暗くなっても先生はみえないので泣きだす者もいました。すると他の組の先生がみえて許してもらえたのですが、みんな涙をポロポロ流しながら真つ暗な道を帰りました。おかげで運動会のタンプリンは大拍手でしたよ。



沢野

沢野 隣の子がしゃべっていたのです。私は笑ったような覚えはないのですが、先生に「すごい往復ビンタンをくらいました。泣くにも泣けない気持ちでしたね。」
坂井 叱られたことは無かったです。が、叱るかわりに試験をやられたのもいやでしたね。気の長い先生でした。
司会 当時の先生の思い出としてどんなことが頭に浮かびますか。



坂井

坂井 私が五年生の時、伊藤ふみ子先生でした。とてもやさしい先生でしたがこの先生が三月でおやめになることになりました。これを知った私たちクラス全員が教室でワアワア泣いたことを覚えています。もしたら坂井先生が来て慰めてくださいました。

加藤 先生はきびしかったけど、叱るにしても何か理由があったことは確かですね。私が四年生の時でした。昼、家へ食事をしに行く時に職員室のそばの通路の所にかめがあり、その中にかえるがいました。私はそれをつかまえていたらしかったのですが、それを先生に見つかって、「家へ帰るじゃない」と叱られました。あと十五分ぐらいでお昼からが始まるころになって家へ帰らしてもらったことがあります。

小川 きびしかった先生、やさしかった先生どちらの先生も過去の思い出としてはなつかしい先生ばかりですね。いくらきつく叱られた先生のことでも、卒業すれば恨みが、なつかしい思い出とかわるのではないのでしょうか。

大栗 当時はきつい先生が上級生を受けもつことになつていましたね。なんの時だったか忘れましたが、ボソボソ話をしていたら、先生が「教室へ入って一列にならべ」と言われました。みんながならぶと先生がひとりの

子をたたきました。ところが人数が多すぎるのでひとりひとり叩いては面倒なのでしょう。「友だちどうしでたたけ」と言われました。みんなが軽くだいたいたのですが、それがいけないのです。私を呼んで「こういうふうなたたけ」と言ってくれればよかった。痛かったですね。

司会 水泳とか、音楽会とか、学芸会など学校の行事についてのお話はございませんか。

小川 当時の学芸会といえますと、先生が一生懸命でした。クラスの中から先生に選ばれ、踊りにしても、劇にしてもみな先生に指導して戴きました。当日は、おおぜいの父兄がみえていました。

沢野 今のようには水泳はプールがありませんでした。みんな木曾川へ行きましたね。

加藤 木曾川へ泳ぎに行っても大きい子が「小さい者はあっちへ行け」と言われて泳がしてくれなかったですね。七つ岩の瀬の方が大きい子、こちら側が小さい子の泳ぎ場所でした。

河村 六年生の時でした。私たちは家から、禪二本で、川へ行ったんですが、今の桃太郎神社まで歩いたことがあります。



座談会風景



河村

今行っても怖い所ですが号令で「飛び込め!!」というわけです。みんな泳ぎました。そのころは放任されていましたが、事故は、無かったですね。

土屋 私は羽場ですが、池でよく泳ぎました。その池が赤土ですので水が濁ってしまうのです。浅い池でみんながバチャバチャやるものだから水は赤色、パンツも赤色になってしまします。家へ帰ると親が「どちがおるぞ」と叱ります。パンツを汚すと親に叱られるので男も女もみんなノーパンツで泳ぎました。無邪気なものでしたね。しかしこの池では浅いし、泳げる自信がついたので、たまたま木曾川へ行きました。橋の下の岩から飛び込んだのですが足からドボンとやっただけつまでも沈んで行くんです。水面へ浮き上がるまでの苦しかったこと、もう死ぬかと思いましたね。

加藤 当時は、何事も集団でやったもので、一人／＼では、できないような、良い経験ができました。

河村 泳ぎでもなんでもですが、目上の人、上級生の人をいつも意識していましたね。上級生の人も下級生の者をちゃんと川などへ連れて行ってくれました。

坂井 当時の運動会ですが「けやき」の木を中心にしてやりました。男の子の剣舞はすばらしかったですよ。

大栗 遊戯というと、三・四年で、「四条畷」高等科では剣舞でした。運動会の前になると山へ行って木を切

り、木刀作りをいっしょうけんめいやったもんです。
坂井 女子の遊戯では私たち五年以上で「軍艦マーチ」をやった楽しさを覚えています。はかまを穿いてたすきをかけてやりました。



山田

勝野(武)十一月の寒いときに川の中で騎馬戦をやらされた時は辛かったですね。
何かよその学校の先生が見にこられると、いのでむりやりやらされたんです。むかしだからいいですが、今なら問題があるですよ。

司会 では最後に学校への希望、要望についておっしゃってください。

後藤 鶴沼第一小学校だけにある尊いものをいつまでももち続けてほしいと思います。学校の建物は時代によってかわりますが、精神的なものも含めて、いつまでも維持してほしいと思います。また、樹木に対する思いもなつかしく、いろいろの印象や足あとを刻んでいます。どうか、これを切らないようにして、いつまでも残して下さるよう、お願いします。

武藤 「天皇陛下バンザイの教育一は、終戦から、その価値感がすっかり変わり、ひとりひとりを重んずる民主教育になりました。戦前の教育を再び、繰りかえさなようにしてほしい。
山田 もう少し今の教育においてきびしさがほしいと

思います。体罰も時には与えてもらってよいのではないのでしょうか。
加藤 同じ意見です、強制力をもってもらうこともいいだと思いますが……。

伊藤 加藤 私と同じ気持ちです。

大栗 もう少し物の尊さがわかるような教育をお願いしたいと思います。もちろん学校だけでなく家庭を含めた社会一般の問題ですが……。ほんとうに心から「ありがと」とあいさつのできる子にすることもだいじですね。食事の前に手を合わせて「ありがと」と心から言える子が今何人いるでしょうか。

土屋 教育勅語の復活を要望します。日本国民的な感覚を筋を通した形できびしく教育してほしいと思います。

勝野(武)今の子どもは年上の人も同年の人も同じ気持ちで接していますね。道徳にもつながる問題ですが、私の小さいころは「先生にいうぞ」というと、すぐ泣き止んだものです。今の子どもは先生を友だちぐらいに思っています。目上の人を敬うような子どもにしてほしいと思います。そして、きびしいときはきびしく、やさしいときはやさしく教育してほしいと思います。
伊藤 さしく教育してほしいと思います。
武藤 教育勅語の話ですが「上からやらされる」という形でなく、やはりみんなが考え合い協力し合ってやるようにしたいですね。



伊藤

武藤



勝野(貞)

後藤 いろいろ聞いていますと学校にすべての責任があるように聞こえますが、学校だけでは言えません。やはり家庭の躾もしんげんに考えなければいけないと思います。

司会 いろいろ貴重なご体験の話やらご意見などありがとうございました。



鶴沼時代の思い出

野村 宗 男



野村

高山の西尋常高等小学校から、鶴沼の尋常高等小学校に転任したのは、昭和六年三月末日で、昭和十五年三月末日まで、満九ヶ年在職した。

高山の西校は、新築したばかりであったから、鶴沼の校舎の古びているが目立った。校舎の東側に隣接して校長住宅があり、そこに入居した。畳を入れ替えていただき、温情をもって迎えられた。着任後は、まず、土地の状況を調べ、つぎのことを知

った。養蚕が盛んで、たとえば大伊木部落だけで、海津一郡よりも多い収穫量をあげていた。夫婦と男の子ひとり、一五〇〇キロあげている農家もあった。サツマイモの産地であることは、だれでも知っているが、良質のニンジン、ショウガ、また、里イモの特産地であり、養豚においても、早くから県下一等の産地になっていた。この土地がらか、小学校ならびに男女青年及び婦人会に對して、実業教育に力を注がねばならぬと決意した。部落部落に産業組合があり、毎年、総会のつど招かれたので、必ず出席した。こうして農家の人たちとも親しくなり、農業について話しあい、研究もできる立場を与えられた。校長住宅で蚕を飼い、その繭が村の品評会で二等賞を得たこともある。

そのうちに、県の内外から、あいついで視察団が訪れるようになった。愛知県青年学校指導教官ばかり八十三人が見学に来たこともあり、満州国から四十三人の視察団を迎えたこともある。

時局は、次第に緊張して行くわけであるが、わたくしは、教育者として、善良な国民と間(ま)に合う郷土の跡りを養成する責任を痛感した。

わたくしは、当初は、村内の各種団体を回っていたが次第に郡内の指導も引受けるようになった。郡の青年団長、女子青年団長、小学校校長、実弾射撃会統監等々を兼ねた。

家内(みよ)も次第に忙しくなつて行つた。最初に手がけたのは、ボマード作りだった。

作り方は、笠松の工業学校の講習に行つて教わつたものである。原料は、犬山の薬店で仕入れ、校長住宅や理科教室で調査した。ボマード、コールドクリームおよびヴァニシング・クリームを作り、これに「岐阜県教員組合」のレットテルをはつて、県内に売り出した。組合ができて間もないころのことで、この利益が組合の活動資金の一部になった。この事業は、二年くらい続いた。鶴沼では、家内が世話して四、五年続いた。

家内が婦人会に関係していたころ、カリントウを作つたこともある。川上貞奴さんが寺を建てられたが、その開院式のときは、砂糖二袋(九〇キロ)を使つて大量に作つて売つた。

家内は、菓子作り、絞り染め、ボマード作りなどを手がけ、農村部を指導して回つた。

わたくしの教員生活は、鶴沼校で終る。雇い教員時代から数えて、およそ四十年になる。この間、いくつかの学校を回つたが、いわゆるスパルタ教育に終始した。寒中も、襟巻きをしたり、手袋をはめることを許さなかつた。そういうことに、父兄も協力してくれた。

校長になつてから、とくに校則を作つたことはない。ただ「何これくらい」「終始一貫」という言葉は、良く口にした。

どこの学校でも、道ばたで父兄に会うと、「子どもは、どうか」と聞かれる。そんな場合、特別に成績が良いか悪い者でないか覚えていないものだ。わたくしは、高山時代から、小さい帳面に細字で、全校児童の操行、算術国語の成績および何人かの何番かを書いておいて、ポケットに入れることを忘れないようにした。この帳面を、「極楽帳」と呼んでいたが、児童らは「地獄帳」だと云つていたらしい。

わたくしは、この六月で満九一歳に達する。鶴沼校を引退してから三十三年経つ。当時の小学校は、現在は、各務原市立鶴沼第一小学校となり、校舎も鉄筋建てになつて、その偉容を誇っていると聞く。しかし、場所は変わらない。あの校庭にテントを張つて盛大な送別会をして下さつた。その時の感激が昨日のことにように今も忘れられない。



恩師のたより

堀 重 教

貴校ますますご発展のこと心からお慶び申し上げます。承れば学校創立百年を迎えられますとのこと、ご名譽の

ことと賀し上げます。

顧みれば明治の新政府が文明開化の意気に燃えて第一に着手したのが学制の発布でありまして、それに呼応して学校創立を企画されました。当時の先駆者に対し、その先見の明に敬意を表するものであります。

さぞかし何かと解らないことが多く、手続きにしても位置にしても、経費にしても困難なことがあつたと思いますが、それを克服して開校にこぎつけられましたその熱意は郷土の開発と、人材の育成にあつたことと拝察いたします。

以来百年、時勢の変遷に伴う学制の改革が行われ、その間幾多の障害もあつたことと思いますが、それを乗り越えられた当局者のご苦勞に対しても感謝いたすものであります。

在校された方々もその数はおびただしく、先駆者の期待に答えて多くの人材が輩出し、郷土は勿論広く社会に貢献されていることは慶びに堪えません。

私が在職しましたのは僅か四年間で敗戦後の民主教育も漸く軌道に乗つた頃でありましたので、何等と立てて申し上げる事蹟もなく唯々先輩諸先生方が築き上げられた伝統に従つて来ただけで今追憶して恥ずか



ライン大橋附近

しく存じています。

当時の学校には校庭の中央に大樫が枝を八方にひろげ四季彩りを変えて堂々と偉容を誇っていました。学童は勿論野鳥にも楽園であり学校の象徴でした。また南には木曾の汚れを知らぬ清流が眼下に流れ、犬山城の天守閣が指呼の間に眺められる環境は学園として申し分なく、そこに学ぶ学童に無言のうちにも情操を培つたことと思ひ、鶴沼の人々の人情のよさも、これに負うところ大であると思ひます。

土地の人々は教育に熱心で、学校のことには協力をしてくださりました。まず部落毎に行つた父兄懇談会には多数の方々が集まられ、膝を交えて語り合つた思い出は今だに忘れられません。

なお在職中には育友会長さん初め多くの方々のお世話になり楽しく勤務させて頂きました。

殊に教育長の栗木先生には大先輩として何かとご指導をいただき、お宅へもその人柄を慕つて、時折お伺いし、茶室で抹茶のご馳走になつたことは、今もなつかしく有り難く存じています。

私も鶴沼第一小学校を退いて、既に十三年になりますので、その当時の思い出も次第に薄らいで来ましたが、何かの折には、なつかしさが蘇つて来て訪ねることもありますが、時代の進展に伴つて開発が目覚しく勝手のちがうことが多くあります。

終りに百年の伝統に輝く鶴沼第一小学校のますますの
発展されますことと諸先生方のより一層のご精進により
社会に貢献される学童をお育て下さいませよう祈念いた
します。



歳月の流れの中で

佐々木 賢 紹



佐々木

雨で汚れた校庭で 彼はボールを 追
つていた。そつとさし出す。ハンカチに
白い ほほえみくれました。きつと い
つかは想い出す。好きでたまらぬ。同級
生。手をふりながら行きました。手をふりながら行きま
した。

久しぶりに鶴一小を訪れて、上の運動場のまん中に、
どつしりと枝を広げるけやきの木を見ると、ついこの歌
を口ずさみなくなってくる。この学校を卒業した先輩、
我が子を含めた後輩も、鶴一小を思い出す時、きつと、
けやきの姿が、頭の中を去来するのではなからうか。
年々歳々新入生をむかえ、「螢の光」と共に六年生を
送り出すことになりはしないのに、けやきを取りまく環

にして、生きられた場合がどれ位であろうか。彼は、そ
の先生からの感化を四十年を経た今でも生きていく上
の指針とし、喜びに感じている。

彼は、いつも膝でくの字にまがった短かめのズボン、
その下から股ひきをちらつかせ、アメ靴をはき、上衣の
袖口は、ピカピカ光らせ、帽子のつばは今にもとれそ
うないでたちで、よく暴れまわった。二年生の教室西側に
二階へ上る階段があり、彼が六年生になった時、その階
段の降り方が悪いと云っては、又掃除の為、汲んで来た
水が階段の途中であかつた時、階段の下にあつた小部屋
に、呼びこまれ目から火が出る程、先生になくられよう
とは夢にも思つてもみなかつた。

現在の風潮にたがわず、我が子の教育は、母親まかせ
で担任の先生のお名前さえ知らぬ失礼さであるが、男親
から申し上げれば、きびしさ。はぜひ必要なことと考
える。

おさな心にも先生が感情的に叱つておられるか、筋
をとおして叱つてくださったさっているのかよくわかつたよ
うな気がする。現に、きびしさ。に徹底された恩師の悪口
は聞いたことがない。なぐられたことが今ではなつかし
くさえ思われる。しかし過ぎ去ったことがすべて美化さ
れる故と片付けたくはないが。

五年になると分校より本校へ生徒が通うようになつて
いたため、今まで二組あつたのが、一部、二部、三部と

境の、なんと移り変つたことか、そう、百年目の誕生日
が今、ここにやってくるという現実を考えてみる時、驚
くべき変容と、人の心の成長を、しみじみと考えさせら
れる。

小学校の一年生に入学したのが昭和十一年の四月、泣
き虫で、内気で、鼻たれ小僧の男が、ランドセルを背お
つて、友と元氣よくと云いたい所だが、おずおずと、下
の運動場の南側に建つていた木造二階建の校舎。階下三
教室あつた一番東の教室に入つて行つた。机と腰掛が沢
山あるなど強烈に感じたことをおぼえている。机はふた
り続きで、ふたがついていた。そのふたをあけて中に、
兄さん、姉さん、近所の上級生より、ゆずりうけた教科
書、ノート、硯、石板等を入れた。まわりをみても知ら
ない顔ばかり、彼は完全に気おくれしてしまつた。今な
らこんな子どもはいないだろうと苦笑いがでてる。し
かしそこは子ども、なれてくるとふたの押し合ひでけん
かになる。普通の授業の時はいいが、習字の時には大変
困つた。ガタンと、押されると硯がかたむいて、墨が机
の中へこぼれ教科書をよごす。泣きたくなつたあの気持
ちが今ではいじらしくなつた。

一年生の担任の先生は女の先生であつた。若く、美し
く、優しかったので、彼は安堵の胸をなでおろした。百
年の歳月の流れの間に、先生と、生徒との出合ひは数限
りなくあつたろう。しかし、その出合ひを人生のプラス
組かえが行なわれた、一部は男子、二部は女子、三部は
男女組である為、彼は一部に組入れられたら、どんなに
か良いかと思つていた。なぜなら一年から四年まで男女
共学で、その中にこわい女生徒がいて、よくいじめられ
たので、この辺で開放されたい気持ちと、当時軍国主義
華かな時代へと進んでいたので、男子だけの組できびし
く教育を受けたいと思つたからであらう。男の
子であつたら、きびきびした生活に格好よさと憧れをも
つものだが、彼は幸か不幸か三部に組入れられた。今に
思えば男女組でよかつた。と彼は思つている。

運動場の西側にあつた建物は、彼には無縁の所であつ
た。そこには職員室、校長室、資料室、小使室、宿直室
作法室があつたが、特に職員室には商工会の作品展示会
の時、入つたのと、あとは叱られて立たされた時以外、
入る事はなかつたと思われるので、その建物についての
記憶はさだかでない。

きびしさ。しんぼう強さ。といえは式の練習の記憶が
よみがえる。上の段の南側の平屋校舎は、いつでも四教
室ぶち抜けた、礼の仕方、話の聞き方、式歌のけいこ、
揃うまで徹底的にやつたものだ。鼻汁は出るし、咳は出
るし、低学年には相当こたえた、でも高学年にまじつて
訓練するうちにしんぼう強さや、きびしさに耐える心が
育つていったと思う。時代の流れとはいひながら、今は
あまりにも伸び伸びしすぎのような気がしてならない。

暴力は否定するが、今の子どもたちにもきびしさは与え
るべきことのように思う。

世の親たちが、昔はこうだったので我が子たちにはそ
んなつらい思いをさせたくないとか、おとうさん、おか
あさんたちはこんなだったことを思えば今のお前たちは
……など、つい口に出るものだが、いずれの気持ちも
押しつけてはいけないと思う。但し、現在に至るまで、
今日を築いてくださった人々への感謝の会をもつことの
大切さをわからせたい、そのことをそれぞれの家庭で、
親が子へ、子から孫へと伝えていく、それが歴史という
ものではなからうか。

原稿を依頼された機会に幼い日の記憶をたどることが
できた。そして、我々の育った時代のおもかげをとめ
るものに、かろうじて、けやきと式典を行なった平屋が
あるだけなのだ。再認識させられた。あのけやきの幹の
感触、小さなもみじのようなくつかの手がふれた、そ
の手は、二十年、三十年後に、のみを握った、注射器を
鎌を、ハンドルを、チョークを、お米をとぐ手へと育つ
ていった。そのことをけやきは知っていてくれるように
思えてならない。もう一度大きく息を吸ってけやきをふ
り仰ぎたい。

百年の流れの中で環境は変わっても多くの先生方が一粒
一粒まかれた心の種が、あちら、こちらで立派に大地に
根をおろして成長し続けている。尚、今後、二百年、三

も毎日に苦しさを加え、親たちがあれやこれやと苦勞し
ていてくださった様子は、今でも頭に浮んできます。

私たちも、ドングリ拾い、桑の皮むき、荒地の開墾
など、額に汗して奉仕作業に励んだものです。

今から思い返せば、苦しかった中にもなにか過ぎ去つ
た昔が懐しくさえ思われ、今の時代と違った味のある親
子一体の生活だったように思います。

しかし、私たちの小学校時代は、学校から帰ると山や
川へと遊びまわり、メダカやフナ取りなどしたものです。
こうしたことは、今の子どもたちに比べれば余程、夢
があったように思います。

今では、この鶴沼も村から町、そして市へと発展をと
げ、山もどんどんけずり取られ、宅地造成が進められて
います。

そして、私たちが子どもの頃、遊んだ山や川も昔の面
影を失ないつつあり、思い出も消されていこうとしてい
ます。

進められる宅地造成



百年へと続くであろう歴史の流れの、ほんの一部分を、
鶴一小で学び、しかも、不十分でもPTA会長の重任を
果させて頂く機会をもったことを改めて感謝する次第で
ある。鶴沼第一小学校の増々のご発展を心から祈りたい。



精神的遺産を大切に

中 島しま子

今年、この鶴沼第一小学校が誕生してから百年を迎
えると聞いて、私も鶴沼に生まれ、鶴沼に住んでいる一
人として、ほんとうに嬉しく、小学校時代が懐しく思い
出されます。

今から三十数年前、小学校に通っていた頃の思い出は
今のような賢沢な生活とは違い、物資の不足が真っ先に
思い出されます。

洋服などは良いものがなく、つぎはぎだらけで辛棒し
たものです。母が夜になると暗い電灯の下で、せつせと
針仕事をしてくれたものです。それが今、二人の子ども
の母親となって、しみじみ有難さが理解できるようにな
りました。

小学校の上級生頃には、戦争も激しくなり、食糧事情

鶴沼第一小学校も、木造校舎からやがて全部鉄筋に建
て変えられつつあります。

しかし、百年にわたる伝統と歴史が誇る精神的遺産だ
けは、永々として消えることなく、受け継がれていくこ
とを信じています。



どんぐり拾い

桜 井 忠 行

大東亜戦争たけなわの昭和十八年から十九年、当時の
鶴沼国民学校高等科に存学していた私達は、勉強と共に
国をあげての戦いに銃後の守りの一員として精一杯汗に
まみれて、お互いに助け合い、けんかもしたりしてそれ
なりの努力をしたことが三十年の星霜をえた今でも脳裏
に浮かびます。

その一つにドングリやかしの実（かしばぼと呼んでい
た）拾い、これはアルコールの原料となるので秋の朝早
く起きて拾い集めたものだ。

日曜日には遠く坂祝、加茂野方面まで自転車で出かけ
たもので、学校では生徒個人毎に量を記録し、量の多い
者には賞状が授与された。集められたドングリは、私達
高学年が依につめ荷作りをして校庭に高く積み上げ、依

にまたいでみんな記念写真を写したが、壮快な気分というより、高く積み上げられた依のため、おっかなびっくりでもあった。(その後この写真を故坂井伝先生よりいただいたが、鶴沼町役場の火災と共に焼失したのは残念であった。依のドングリは、武藤の酒屋へみんなで荷車に積んで運んだ。今は、このドングリやかしの実にもお目にかかれない。それだけ大きい緑を有する木がなくなったのであろうか。

賞状

初等科第一学年
六井(合渡)博史
右者本年度木ノ實俱出
割當量ヲ超ユル優秀ノ
成績ヲ得タリ仍ツテ茲
ニ之ヲ賞ス

賞状

初等科第一学年
齊加(茂)史
右者本年度桑皮俱出
割當量ヲ超ユル優秀ノ
成績ヲ得タリ仍ツ
テ茲ニ之ヲ賞ス

その二に桑の木の皮を集めること、これは養蚕に桑の葉がとられた後の枝の皮をむき、夏の太陽によりよく乾燥して学校へ持ってゆく自分の家の桑の木だけでは足りず、近所の家のお願いで皮をむかせてもらった。これも量により賞状が授与された。毛虫に刺され、桑の実を食べながら、学校で荷作りをして荷車で鶴沼駅まで運んだ。この皮からは強い繊維がとれるとのことであった。後に海軍に入った私もこの繊維で織られた作業服の支

つたという。今から六十年ほど前のことだ。運動場のまんなかに、あんな大きな木を植えた人は、どんな人だろう、と思うことがある。きつと反対の意見も出たことだろう。けれども、大きな木があることが、どんなに素晴らしいことか、その下で遊びながら、この村の子どもたちが育っていくことが、どんなにいい心をつくることになるか、その人はていねいに辛棒ぶよくみんなに説いてまわって、ついにあのような大きな木を運動場に置くことに成功した。そんな気がする。そして百年、父も、子も、孫も、さらに今の小学生も、この木の下で遊びながら育つことになったのだ。

ぼくがあの学校に入ったのは、一九四五年(昭和二十年)で、学校の名も「国民学校」といった。運動場の東の方に奉安殿という小さいけれども立派な建物があって、その中に天皇陛下の写真と教育勅語がしまっていた。みんな国のために命をささげることが正しいと教育された。ぼくはなんにもわからなかったから、校長先生が勅語を朗読するあいだ、身じろぎもせず頭を垂



青々とよく茂った大けやき

れて、「ああ、早く御名御霊といわなかな!!」と思っていた。「御名御霊」というのは天皇の名前と印鑑のことだが、ぼくらは、そんなこと知らない。「終り」という意味だと思っていた。校長先生が「御名御霊」というと、ようやくぼくたちは顔をあげることができたのだから。学校の帰りによく蛇を棒でたたいて殺した。のたうっていた蛇が動かなくなると、「やあ、御名御霊やなあ!!」というふうにも使った。

戦争の末期から戦後にかけて、ひどい食糧不足の時代が続いた。けやきの下も、畑にしてサツマイモを作った。運動会も出来なかった。弁当にイモやおかゆを持っていった。新聞みたいな粗末な教科書で勉強した。古い教科書は戦争のことが書いてあるところはスミで黒く塗って使った。ぼくらは、みんなやせて、男の子も女の子も頭にシラミがわいた。朝礼の時、前の子の衿首をはっているシラミを見ながら、先生の話をかいていた。

各務原の飛行場は、なんとかアメリカの爆撃を受けてそのたびに、ぼくたちは逃げまわったけれど、幸い、小学校のけやきは少しも傷つくこともなく、残った。ぼくは、小学校といえば、鶴沼第一小学校のけやきを思い浮かべる。それから木造校舎にうつっていたゆがんだ風景を思い浮かべる。ぼくの子どもたちも、あのけやきの下で毎日遊びながら大きくなっていくのだと思うと、はるかに続く人間の生のくり返しをふり返る思いがする。

給を受けたが、こわこわしたものであった。

学校の通学には電車は利用できず(利用できても金がかかったと思う)五キロの道をわらぞうりで防空頭きん、(座ぶとんで作ったもの)とかばん(布製)をかけて通ったもので、学校の帰りに腹がすけば、人参や、さつま芋のくず、時には大根を細から失敬して小刀でけずり食べたもので、今だに当時の味が忘れられず自宅のものを同じように生食してみても思い出の味には遠くおよばない。こうして書いて見ると勉強をあまりしなかったかのようにとれるが、どうして(先生方の軍国精神も、おう盛な当時よく叱られて勉強もお互いに一生懸命頑張ったと思う。思い出はつきない小学校時代でありました。



けやきのこと

梅田卓夫

鶴沼第一小学校には大きなけやきがある。ぼくが小学生の時には、運動場のまんなかにあった。南から見ても、東から見ても、どちらから見ても、同じ姿をして、ゆったりと枝をやすめていた。今は体育館ができて少し枝がはらわれたようだ。あのけやきは、ぼくの父が小学校へ入った時にも、あの太い幹、枝ぶり、ともに今の通りだ

小学校というところは、特別に変わったことがない方がよい。県の指定校になって名をあげるとか、新聞にのるような珍しいことをやろうとすると、どこかに無理が生じてくる。戦争中のように極端な緊張を子どもたちに強いたりしてもいけない。百年変らずに、けやきがゆつたりと枝をひろげ、木かげをつくってきたように、鶴沼第一小学校も、子どもたちの歓声をおおらかに守ってくれるところであってほしい。

けやきの下で遊んでいる時には、そんなことに気づかないけれども、小学校を離れて年月が経つと校舎は変わり、周囲の様子も変わり、昔のものがなんにもなくなっていくような気がする中で、校庭に立てば少しも変らないうけやきが静かなたたずまいを見せているということは、なぜか、この世の中にも頼ることのできるものがある、と教えてくれているようで、心に安らぎを感じる。

そんなことを考えながら陽差しをいっぱいを受けたけやきをばんやり眺めていて、ふと気がつくと、ああ、二十数年前のぼくと同じように一人の男の子が根元にしゃがんで、何か必死になって土をほじくっている。あの子には三十年先のけやきの姿は見えないだろうが、きっと大人になったある日、鶴沼第一小学校といえ、けやきを思いうかべることがあるだろう。この町の人は、多くそうして育ってきた。こんなに素晴らしいことがほかにあるだろうか。

戦時中、戦後派

永田 義孝

支那事変から大東亜戦争（第二次世界大戦）そして、終戦と言う軍事色の強い時代、小学校も尋常高等小学校から国民学校と変わった昭和十六年四月、一年生に入学私は四年生の時に鶴沼国民学校に転校してきました。

校庭の四方を校舎で囲み、校庭が上と下と二つに別れためずらしい校庭でした。上段と方が大きく真中に今も変わらぬ大けやき、東端に奉安殿がありそれを大小の木と岩で囲んだ美しい学校でした。

しかし、この頃より戦争が激しくなり、毎日防空頭巾を片手に空襲にそなえて防空演習、防空壕作りと、幼少ながら強烈な危機感をあおり立てられ、自分たちも頑張らなければ日本が減びてしまう、日本を守らなければならぬと、一生懸命で勉強は二次的な感じであった。

こんな日々のうち、川崎の軍事基地の空襲があいつき昨日までの多数の友を失ない、ついには昭和二十年八月十五日（自分達五年生）「日本国無条件降伏」の玉音放送、空襲はこないがこれからどうなるのだ。

やって来たのは食糧はじめあらゆる生活物資の絶対的な不足、教科書もよごれたような更半紙にガリパンで刷ったもので、ノートも満足になく、勉強の出来る状態で

なかった。（腹ががすいては勉強も出来ぬ）

私たち生徒も毎日飛行場、大安寺川堤防、芋ヶ瀬駅の南西にあった競馬場（現在宅地化されている）あるいは、現各務原少年院（当時軍隊が使用）の土地の開墾により食糧増産の協力、まったく世相の混乱の内に小学校、いや国民学校六年修了、またもや新しい教育制度により新制中学校一年生へ。

こんなことで私たちが戦時中、戦後は、美しいと感じた学校、あのけやきの下で学んだ思い出より軍事基地近くの学校として、戦争で友を失い戦後の食糧飢饉にあえきながら、巣立ったことしか記憶にない。

しかし今になってみるとどれもこれも、私たち人生の大切な節になっている。

昭和十八年度

事務引継目録

稲葉郡鶴沼国民学校

転校後の印象

林 承天

（旧名 行男）

本曾の清流、鶴沼大地を囲む緑の山々、風光稲にみる

明美な此の地に私が初めて立ったのは昭和十九年八月四日国民学校四年生の暑い日でありました。その時は、ほんのしばらくおるだけで、私の故郷になるとは少しも思っていないませんでした。

大東亜戦争も本土空襲が激しくなり、名古屋在住の児童は疎開せねばならなかった。集団疎開を嫌い、父の知人を頼ってひとり西町へ疎開したのです。鶴沼へ着いた日、まず、役場と学校へ移動手続きに連れられていった。周囲一面の田畑の中、とほとほ歩いて学校へ。

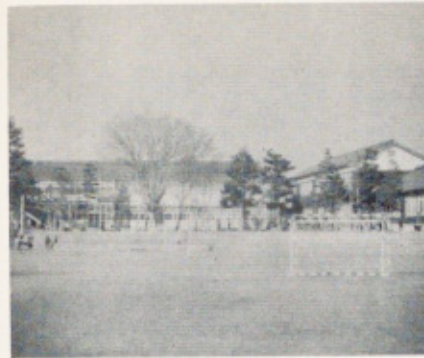
名古屋では目と鼻の先に学校があったのになんとまあ遠いことか、学校に着いて驚いた事数々。校庭のと真中に運動場いっばいの日陰を作るほどの大樹（樺）があったこと、そして名古屋でみた数校の学校が、全部二階建てで防火壁があり、放課後、小使いさんがシャッターを手でハンドルをまわしておろしていたのに、此の学校は平屋建て、そういう設備もなかった。そして運動場に段違いがあり、下の運動場には、北と南に一棟づつ二階建があった。その時は、学校が二つあるんだなど、自分は思っていた。もう一つは講堂がなかったこと、など。

九月になって、授業が始まると、新しい学友にようやく会えることが出来た。そこでまず教えてもらった遊びがある。樺の下にアリの穴ほどの穴がいっぱいあいていいる。その穴へ松葉とかその穴に入る細いワラくず等をそつと入れて微妙に動かすと穴の住人である「ミジンコ」

(今もってどうい虫か知らない)といわれていた蟻をネズミ色にしたような虫が、くらいついてくるミジンコ釣りである。今の子どもに聞いてみたら「そんなこと知らん」である。念の為学校へ出かけて櫛の下を調べてみたが虫の穴は一つもみつからなかった。自然との遊びが此処でもなくなっていた。

講堂については、全校の生徒を一諸に寄せる行事はどうするか興味をもってしたが、やがてわかる時が来ました。南校舎の間仕切りが取りはずせるようになっていたことです。机、腰掛は勿論、運び出さねばならないが、教室の間仕切りをはずすと、立派に大講堂が出来たことです。学芸会、卒業式等そこで行われていました。また北校舎の二階が、裁縫室と呼ばれていたが畳敷の大広間があり人数によっては、こちらも利用されていました。

当時、厳しい事で覚えている先生は、野村教頭と後藤準先生です。私が編入した学級は当時学校一の横着学級だった。担任の小森先生は二学期より鶴沼に赴任され我々を受けもたれたが手に負えず野村教頭、或は校長先生が入れかわり棒切れ、板切れで机をたたいての



当時の学校全景

るほど、叱られた。これにはいささか参りました。お蔭で以後サボタージュもしなくなりました。最近では暴力教師と言う名のもとに、何らかの処分のあるところですが、時代の違いがそのまま教育の違いとして出ています。時代の流れと共に学校も変わりつつあります。鉄筋三階建て、体育館、プール、これからもまだまだ整備され教育機器も備えられていくことでしょう。そして教育方針、PTAのあり方等々、個人の郷愁など入り込む余地はないようですが、私が経験した色々は、この鶴沼第一小学校の歴史の一コマであると思います。しかしこの一コマ、一コマの積みかさねが五十年、百年の伝統を築くことでしょうか。鶴沼第一小学校の増々発展されることを祈念致します。

習字の思い出

阿部源治

(昭和十八年卒)

昭和十二年、ちょうど支那事変の始まった年、私は小学校一年生に入学いたしました。

当時の小学校は、ようやく動きだした戦時下国家体制の線にそい、国体の明徴と国民精神の涵養を重点に、緊張と鍛練の場であったように思われます。

どういわけか、そのころから私は、いわゆる習字の

矯正授業があった。時には授業中止で徹底的に教室の掃除をさせられ、また雨の降る中、校舎裏の砂利の上に静座をさせられた。その時先生の目を盗んで寄りかかっていたポプラ?の木が校舎はなくなってもぼつんと残っている。此のそばを通るたびに当時を思い出します。将来、校舎の新築があり学校の様子は変わっていく事でしょうが永く残してもらいたいと思います。

五年生になって、ゴトジュンと呼ばれ恐れられていた後藤準先生が担任となった。細い目がきらきら光り、一声ごとにビリビリと神経をとがらせていた。戦争も最も激しい折で、空襲だ。やれ警戒警報だと授業も中断されたり登校中止等であり勉強は出来なかったが、軍事教練まがいのことは厳しくやらされました。その中でも楽しかったのは木曾川の河原まで軍隊の行軍よろしく歌をうたつての行進と拳大の石をひろい手投弾の投げ方の練習であった。

中途半端な授業と先生の恐ろしさから、サボタージュを覚えたのはこの時期である。毎朝、「行って来ます」と家は出るのだが行先は山であった。高い山から谷底見れば茄子や胡瓜の花ざかり、とばかりいつも高い所から鶴沼平野をみていた。今から思うと、よくもまあ毎日毎日遊ぶことをかえては、みつけたものだと思う。随分水い間サボタージュしたあげくの果ては、先生に教壇にいやというほどたたきつけられ、むこうずねが黒くはれあが

選手として放課後、特別の指導を受けることになりました。習字は技の修練とともに精神の訓練と矜の教育の場として重視され、尊重もされていたようで、日日の指導は、随分厳しいものを感じました。

二年生のとき大文字の競書大会があり、私は「伸びゆく日本」と書きました。その掛軸は、いまでもわが家に残っておりそのころの全身全霊の跡がしみじみと思ひ出されます。

当時、三年から六年まで学校の名をかけた、岐阜地区席上競書大会が、毎年秋に岐阜高等女学校、岐阜商業学校で行われていました。

習字の刘先生である後藤準先生といえはだれでも思い出多い先生と存じます。私は習字のみ特別指導を放課後夏休み、冬休み、日曜日と三年から六年生までこの後藤先生に教えていただきました。とくにきびしかったことが、未だに脳裏からはなれません。どの選手たちも一生懸命練習したため県下でも優秀校として鶴沼小学校の名声は高いものでした。

四年生のときでありました。後藤先生から岐阜地区競書大会において最高賞であったと通知をうけ、岐阜丸物で行われた展覧会での表彰式に参列し始めて大きなカッブをもらったときのうれしさは、今なお私の心の奥深くに刻み込まれています。五年六年生と毎年参加し、好成績を得ましたが、五、六年生となると中等学校受験のた

め放課後準備教育がありました。習字の後藤先生のきびしさに準備教育をぬけだして字を習いに行ったことがしばしばありました。朝は友達と登校しましたが、帰りは遅いためほとんど一人で帰りました。書きぞめ大会のあるころには、弁当箱に餅の焼いたのをたくさん入れ、学校帰りに田圃道をかたくなった餅をかじりながら家へ帰ったことを覚えています。家へ帰っても父親から字を習わせられる厳しい小学校時代でありました。

笠松の工業学校卒業後は鶴沼町役場に就職をいたしました。しばらくして自分の勤務のうえから何か特技をもちたいと思いついたのは、昭和二十四年十月のことでした。書道一途にまい進しようと決心しました。

各書道会に入り高段位を獲得し昭和二十七年には書道芸術会の最高権威者、日展評議員、大池晴嵐先生の筆跡に胸をうたれ無我夢中で師事しました。その結果、うるところ無限にあつて市内の橋名、史跡、おがせ池の山の中腹にある中国人殉難塔の表題、鶴沼土地改良碑の裏の沿革等、永久に残るものを書かせていただき感慨無量であります。

これもひとえに私の書道の基礎をつくってくくださった恩師後藤準先生のお手厚いご指導と厚く感謝し百年史の紙上をおかりしてお礼を申しあげ、私の拙い思い出いたします。



母心は味噌汁の暖かさに!!

薰 田 源 市

昭和八年、私は稲葉郡鶴沼尋常高等小学校に入學した。当時、日本は満州事変から日華事変に到る暗雲漂う最中であつた。すなわち国際連盟の脱退（昭和八年）、兵に告ぐ、有名な青年将校などのクーデター事件（昭和十一年二月）、林銑十郎大將を中心とした軍官内閣の出現、（昭和十二年二月）、日華事変（昭和十二年七月）、初めて海軍機による南京、南昌への渡洋爆撃が行なわれ、日本が全面戦争へ突入、国家総動員法を制定した時代である。

一年生の春の遠足は、桃太郎屋敷。足を強健にするこゝとをねらつて遠方が多かつた。道ゆく自動車の数は少なく、時々トラックが通る程度で、交通安全の言葉は程とおかつた。

朝の登校は、附近の友だちと呼びあつて、大きな兄さん姉さんと喜びいさんでいった。時代が過ぎるとともに集団の大切さが重視され、羽場の部落の子どもは「むくの木」の下に集まつて登校した。

学校の運動場は「けやきの大木」を中心として、広くみえた。現在の上の段の運動場（運動会の時はこの「けや木」より張りめぐされた万国旗のもと、リレーとか百

米走りなどが行われた。現在のリズム運動は、当時、遊戯といつて女子のみ行なつたものである。百米走りは一等より三等まで賞状がでて、みんな懸命だった。

学習は一斉学習、忘れ物をしたり、隣りの友だちとおしゃべりをしたり、わき見をしたりすると先生は火のように怒つて鞭で机を叩いたり、手で叩かれたり、時にはいたずらの度が過ぎると、バケツに水を入れ、それを手に持つて廊下に直立の姿勢で立たされたりしたものである。また忘れ物は家へとりに行くことは、普通のことである。先生は厳格であつた。

休み時間は、高学年では「まりけり」「くち」「陣取り」など勇ましい遊びが行われ「カン、カン、カン」と鐘が鳴り響く頃は汗だくで教室に入ったものである。昼食の弁当は、米または麦ご飯に梅ぼし、しそ、う、大根づけが多かつたようである。時々近くの部落の子は、昼食をとり、かけ足で家まで行き、だれが早く学校へ帰ってくるか競つたものである。

冬になると、弁当を炭で暖かくした箱の中に入れ暖めた。また家庭から母たちが六、七人リヤカーに焚き物、野菜を積んで来て、小使室で味噌汁をつくられた。その暖かい汁をいただいたことが、今でも母たちの心の暖かさを思い起させる。

学習が終わると掃除だ。特に冬の板張りの床を水でふくことは苦しかった。

秋になると、学校帰りには、

よく「むくの木」に登つて、黒く熟した実を食べた。時には木から落ちて、骨を折つたり、くじいた子がいた。学校では、よく注意があつたがなかなか守られなかつた。



むくの木

家へ帰ると、一般に父母は畑仕事で留守が多く、よく近所の友だちと附近の松林へいつて木の枝で刀を作つたり、戦争ごっこなどして暗くなるまで遊び楽しんだ。

こうしたことがいろいろ思い出されるが、今の世と比べると、伸び伸びとして、毎日毎日が楽しい一日一日であり、反面学校はきびしく、先生は厳格であつた。



戦中の子ども時代

伊 藤 功

昭和十一年、二、二六事件が起き、政府の不拡大方針にもかゝらず戦争は大陸にひろがり、十二年七月には支那事変が起き、凄まじい様相を呈してきた。ちやうどその頃、小学校の教育を受けた私の子ども時代を回想

してみよう。

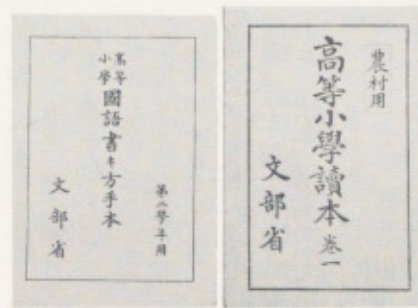
先生は神様に次ぐ人。学校に出かけるとき、親は必ず先生さまの言われることをよく聞いて、しっかり勉強してこい。といわれたもの。これは先生を尊敬するという良い風習から養われたものだと思うが、村で一番偉い人は先生だ。先生を神様の次の人のようにまであがめ、いろいろ指導をうけたものである。

教科書と学用品

一年生の国語教科書の始めの教材は「サイタ、サイタ、クラガサイタ」の文であった。文字を一字一字指でおさえ大きな声をはりあげて読んだ。そして先生が黒板に文字を書くとその文字を石板に石筆で何べんも書いては消し、消しては書いて字を覚え、正しい筆順も覚えたものだ。毛筆習字も一年生からあり新聞紙が真黒になるまで何度も何度でも練習した。

みなり

夏はしもふり、冬は黒か紺の服を着て通ったものだが、冬になると、服



教科書

の上に「でんち」か綿入れの羽織を着て足袋にめめ靴（生ゴムのくつ、寒い朝は硬くなってしまふ）という出で立ちだった。

戦時色一色に塗りつぶされた頃には、ズック靴は二ヶ月に一回位、クラスに五、六足配給になり、くじ引きでわけたので、靴をはいている者は少なく、下駄ばきやわらぞうりの子が多かった。ゴム靴や桑の木の皮の服の配給もあったが、なかなか当らず、服の袖口が鼻汁でピカピカ光ったものを着て通ったものだ。「ほしがりません勝つまでは」「兵隊さんありがとう」の合言葉は、先生の口から耳にたこがあたりほど聞かされた。

当時の弁当の思い出も多い。当番が弁当の中味を調べ白飯の者には×、さつまいもや麦入りの弁当の者に○をつけて歩いた。大部分の者は麦のまじった梅干と漬物の弁当が多かった。

農繁期休み

学校から帰ると家の仕事をよく手伝ったものだ。特に農家に育ったせいもあるが、蚕を飼う時期になれば桑つみ、麦、甘しよの収穫期ともなれば、親子共々野良に出でよく働いた。

忙がしい時期になると、蚕休み。農繁期休みがあつて朝から晩まで、親と一緒に汗を流して子どもながらに働いた。

その頃、学校の運動場が芋畑に変わって、外での作業が

多くなり、先生がわざわざの作り方まで教えてくださったことを記憶している。



私の思い出

足立 国雄



足立

太平洋戦争もたけなわの昭和十八年、父に手をひかれて入学した私は、帝国主義はなやかなりし日のことをふと思い出すのである。毎朝全校朝礼が校庭で行なわれ、校長先生の号令のもとに、「米英、米英やっつけろ」とボクシングの様に握りこぶしを東西にむけてお互にぶっつけて「一億一心」必勝のかまえをしたものだった。

昭和二十一年いよいよ戦禍が激しく、敵機B29が上空を往来し、祖父母につれられて夜中に防空ごうに逃げまわったものでした。

今から思えば、子供だましの様な防空頭巾をかぶり、避難訓練を行なった覚えがある。

やがて原爆が広島、長崎に投下され、八月十五日終戦を迎えた疎開したのは入鹿池の近くにある片田舎であった。当時は小学校三年生で、言葉の意味もよくわからぬま、に、天皇陛下の無条件降伏宣言がラジオを通して流

れてくるのを耳にした。

終戦と同時に、今の第二小学校（当時分校といっていた）が、爆撃で破壊されていたので、三ッ池の日輪兵舎へ、当分通いました。冬の寒い時など、すき間風は遠慮なく入るし、暖房も思うようにならず、子供ながらにづらさが身にしみた。

経済力が底をつくまで戦った揚句のはては物資不足で我々の学校生活でも、教科書はペラペラで活字もはつきり見えず、消しゴムで消せば、すぐやぶれてしまうようなノートや、けずってもけずっても、すぐ折れてしまう鉛筆でやるせなく勉強をしたものでした。

放課後は近くの農家にでかけては、衣類の原料にするためか、桑の木の皮むきを、学年別にノルマがかけられて行なった覚えもあり、どんぐり拾いもやらされた。

当時は主食の米が統制で、代用食に各務原名産のさつまいもをよく食べたものだ。又、京都、大阪方面の人が毎日のようにいもの買出しにきて、女の人でも二十貫位のいもを南京袋に入れて背おつては帰っていく姿もめずらしくなかった。

当時は桑の皮の原料の学生服を着、女子はもんぺ姿が多かった。先生の中にも



防空頭巾姿

兵隊服に兵隊ズボンで教壇に立たれた人もみられた。それでも当時幼い頃は今の子どもたちに負けることなく、大いに遊んだ覚えである。今のように遊び道具が豊富にありすぎて、バラエティーに富んだ遊びはできなかったことは事実である。

終戦当時、鶴沼分校の生徒は一学年にクラスしかなくせいぜい全校で三百人ほどの規模であった。以後二十数年後の今日では、当時、唯も予想し得ない状態にまで発展し、すっかり様相が変わってしまった。特に学校附近は農家が数軒並んでいただけで、あたり一面畑と野原で広々としていた。下校の時には農道を通って帰ったものだが、せいぜい自転車に一台あうかあわぬかの、のんびりした時代であった。

南冥の島より帰りにたずみぬ われ生命あり蟬はけやきに

阿部元一

鶴沼第一小学校創立百周年記念事業が、いろいろな形で催され、その事業の一つに、「百年分の幾年」かの思ひ出を、九牛の一毛に過ぎない私ごとが綴らせて載けます事は、せんえつ至極と思いますが、冷や汗三斗の思

いで寄稿させて載きます。

私どもは、昭和八年四月、鶴沼尋常小学校に入學。學窓生活第一年目が始まった訳でございます。寅年、卯年、の仲間たちでした。「サイト サイト サクラガ、サイト」で始まる国語読本は、私どもが最初でした。

教科書は、単色印刷のものなり、と観念づけられていた当時としては、多色印刷の教科書には、目を輝やかせたものでした。

三年生になって、少年団に入団しました。少年団活動は、毎月一回、学校で行なわれる、分団毎の自治会議でいろいろなことが決議され、諸行事が行なわれておりました。夏休みには、心身の鍛錬の名において、登山も行なわれました。高等科二年生の分団長引率のもと、上級生は下級生の面倒を見ながら、海拔三百八十三米、鶴沼最高峰の、通称「こんびら山」へ登ったこともありました。山頂では上級生から「そこが坂祝、その向うが太田こちらが関、あそこが一連隊で、こっちが二連隊などと、説明を聞き、足もとに広がる眺望に、胸をときめかしたものでした。また体操の時間に大安寺川で「魚獲り」をして、バケツに何杯かの魚を学校へ持ち帰り、用務係のおばさんを困らせたこと。八木山へ兎追いに行ったこと、工作の時間に作った藁草履が、左右大きさが揃わなくて困ったこと、なども、この頃だったように思います。又毎月一日には真墨田神社で神前早天修養会が行なわ

れ、掃き清められた神前に、分団毎に整列し、二礼、二拍手、一礼、で参拝し後、宮司さんから訓話を聞いたこともありました。

日華事変が始まり聖戦の名に於て、郷土の先輩方も多数大陸へと出征されました。その方たちのために、寅年の女子は千人針、男子は千人力を、と奉仕しました。これはその時の在校生のうちで、私ども寅年の者のみながし得た奉仕活動の一つで、細やかな優越感さえ感じたものでした。

五年生になり、上の段、北西の角の教室になりましたが、この教室には夜間学習の設備がありました。これは当時行なわれていた、夜間の青年学級のためのものだったようです。そしてその教室の前には大きな柳の木があり、そばにアジア大陸のパノラマが設置されていました。今はもうどっちもありません。特別教室は当時、下の段北側の新校舎で、二階に作法室、唱歌室、一階に理科室及び理科準備室がありました。理科室では映画を見せて貰ったこともありました。その校舎は取りこわされ、新しい校舎に変わっております。私ども在学中の校舎で、現在残っているのは、上の段の南側の校舎で、この校舎は各教室の境を取り外して、式場や学芸会場となりました。上段中央の櫺の木は、私ども入学当時と余り変わったとは思いません。その櫺の木は色々な目的に利用されたように思います。立たされる時はその下に、走らされる時

はその回りを、陣取りの時は陣地に、運動会の時は旗竿に、掃除の時は受け持ちの境界線の目安に、と、利用範囲は広がったようです。長じて、私も海軍航空隊に入隊し、東南アジア各地を零戦を馳って転戦しました。灯火管制で暗闇とは難ど、南十字星の輝く南国の夜空の下、兵舎外の芝生に、編隊毎の仲間が三人五人と輪を作って酒保を開くのが毎晩の日課で楽しいひと時でした。郷里の家族や、民謡の紹介、また、或る時は恋人の話、他愛ない冗談などで時間を費したものでした。或る晩、話題もつき、そろそろ兵舎へ帰ろうとしていた時、誰が吹くのかは分りませんが「故郷の空」の尺八の曲が聞えてきました。「夕空晴れて、秋風吹き、月影落ちて、鈴虫鳴く……」唱歌室で教わったあの歌です。

初め二、三人の者が口ずさんでおりましたのがだんだんと広がり、私を含めて皆の者が声をふるわせて大合唱になったことを思い出します。尺八を吹いてくれた人は勿論、聞いた私たちも、生きて国へ帰ることを予想し得な



空にそびゆる大けやき

かった、南の島で、小学校唱歌により、それぞれの感傷に涙したことを思い出します。私が十八才の時の、南の小島でのことです。

その後、神風特別攻撃隊員になりましたが、間もなく終戦、翌年の七月真夏の太陽の輝く暑い日に南の島から復員しました。鶴沼宿で電車を降り、荷物を背負って先ず立ち寄ったのが、上の段中央のけやきの下でした。蟬時雨の中でやつと故郷へ帰った実感が湧いて来たことを今でも覚えております。

鶴沼第一小学校は開校百年の歴史の中で、数多くの立派な先輩、同窓の諸兄を世に送り、いまでも育成しつづけています。

これは学校という施設と教壇に立たれる先生方、それに教わる児童、市民、環境等がうまく噛み合って、その上に、目に見えない何かが働いて、このようなよい結果になって来ているのだ、と信じております。校舎を始めとして、諸設備も逐次近代的な「物」に変わっては参りましたが「物で榮えて心で滅ぶ」ことは誰しも望むところではありません。「物・心」とともにバランスのとれた、素晴らしい「鶴沼第一小学校の歴史」の一行一行が綴られて行くことを祈って止みません。

上の段の樫の木のように。
最後に当記念事業推進委員の方々の御努力に対し衷心より敬意を表し、脱稿させて頂きます。

雑感

榊原 亘
(昭和五年入学)

鶴沼小学校と樫、幾多の歳月を経て今も学校の歴史を語っているようです。この度、学校も創立百周年とのこと、田鶴沼村尋常高等小学校の頃が走馬灯の如く浮かんできます。

ここに当時の担任の先生方の面影を求めてその拙文を綴って見ました。

一年生、O先生、美人であつたらしく、同僚の先生とのロマンスが噂され、その年に退職された記憶。

二年生、W先生、やはり小柄の美人でやさしい先生であつたことのみ記憶。

三年生、K先生、男性ははじめて、小柄な方、先生の机の上に校長先生宛の結婚の為の休暇届がありました。

四年生、K先生、新進気鋭、そして誠に庶民的、勉強に、体育に、大変熱心、現在は新加納の広報会長、地元の有力量として部落の為、活躍しておられる由、今年も同窓会に御出席載き、飲む程に歌も出て共に一日を過ぎました。

五年生、H先生、隣村の坂祝小学校より転任された方、年好男子の先生、現在名古屋の方へお勤めとか、やはり今年も同窓会に御出席載いたなつかしい先生の一人です。

六年生、E先生、色黒く仲々厳しい教頭先生、今年も同窓会に久方振りにお目にかかり、まだ五十は人生の始まりであるとの激励の言葉を載きました。

高一、N先生、その頃校内一のスタイリストであつたことを記憶しています。T先生とのロマンスを、二年生頃かと思いますが、耳にし、子ども心にもいろいろ噂をした覚えがあります。現在新加納にお住いで、先般先生宅へお伺い致し、小学校の作品の習字を載いて参りました。何十年か前の教え子の作品を丁寧に保管して下さい、本当に感謝しています。その後、再び校長として来られ、二人の子どももご厄介になり、一番印象に残っている先生です。

宮脇校長先生 一年生でしたので、四大節には胸に勲章をつけた偉い先生であつた位の記憶です。

当時の恩師



卒業生アルバム

野村校長先生、小柄な元氣な先生、高山出身とかで我々と共に、雪を固めた上を気軽に滑ったりして、親しみ

のある方でした。尚校長先生宅は、今の大業文具店の北当りだったかと思いますが、時々令嬢の琴の音を耳にした記憶があります。
一年生の遠足
今日のはうれい遠足日、行き先は各務野のお宮様、男子の大半はカスリの着物にアメ靴、白い風呂敷を褌がけの弁当、女子の大半もやはり着物姿での遠足スタイル、空には時々複葉機がのどかな爆音を残して飛び、道中の松林のいたるところに可憐な紫色のふで草が咲いていた。本当に童話「春の小川」そのままであつたようです。それから四十数年今日の立派な校舎と規模になり感慨一入です。

小学校の頃、腕白の頃

加藤 救 夫

木曾の流れが、岩を噛み、深い淵をつくり、時には、瀬音をたてながら山あいを縫い、急に平野に出る所。この地に生まれ育った幾多の人々の学び舎、慈に百年を迎えるという。まことにおめでとうございます。

私の入学したのは、昭和十五年で皇紀二千六百年の祝典で幕が開かれた。幼い身体で御輿にぶら下がるように

して、かつて村内を練り歩いた。

二年生になり国民学校と名が改まり、初冬には、あの
大東亜戦争の火蓋が切られた。次々と戦勝のニュースが
聞かれ、胸を躍らせた日々。やがて暗転、相次ぐ失陥の
うちに六年生の夏、運命の八月十五日がやってきた。や
けに入道雲が高く、暑くて、この日の午後は大人たちも
皆、虚脱状態はどうやって夜がきたのか覚えていない。

そして翌日からは、前日まであれ程毎日空襲のサイレ
ンが鳴り、東海地方のどこかに、あの憎い米軍機が投弾
し銃撃していたのに。急に空が広く、眩しく感じられた
この日を境にあらゆる価値観も

百八十度転換し、一億総懺悔、

加藤信夫先生の碑

教科書は墨で好戦的字句を消して、

自由平等、民主主義を合言葉に、
学び舎を去っていったあの頃。

しかし、私にとって小学校を
語るべき、半ば悔い、また懐し
むのは四年生の時である。時は

十八年、戦いの流れは、ようや
く不利に傾いてきつつあり、若い気鋭の先生は、次々と

兵隊にとられていられる中で、私はかなり横紙破りの児
童となっていた。質実剛健の時代といえ、冬でも素足に
わらぞうりで、ひびやあかぎれだらけ、わざときたなら
しい格好をした。授業は時々三時間目くらいから悪友二



人と、弁当を持ち出し教室から脱走、あちこちの神社、

手、畑の中でサボタージュを決めこんだりした。また
弁当を持ち出せず、さりとて教室へも戻れず、空腹のあ
まり菜園のキャベツの芽を摘んで食べたりのした。雪の
上やコンクリート溝の上に静座させられたりもした。ひ
どい時は音楽室の教壇の机の上に、暗くなる迄三時間も
座らされた。遂に担任の先生が夜二度も拙宅へお説教に
来られた。私はとびだして逃げ、夜ふけまで家に帰れず
薬の中で寝たこともあった。毎日毎日叩かれた。左の頬
を叩かれると、右の頬もわざと構えて出す程、不敵な手
のつけられない悪童の日々が続いた。

それを救い得たのは、五年生の担任のI先生の蒼白い
顔の眼鏡の下に光る、鋭い目でもなければ、時折り、身
体ごと吹き飛ぶ強烈なビンタの制裁でもなかった。

それは、現在も運動場の隅にある、私の生まれる前に
死んだ祖父の、長い母校での奉職の証の顕彰碑であった
自分もこれ以上、祖父の名を汚してはならないと、思う
ようになり、その後は、や、落ち着いた生活を送った。

苦しかった生活

中 田 寿 子

(旧姓・梅本)

小学校時代の思い出といえばまず戦争です。私達は小

学校四年生までは分校(鶴沼第二小学校)に通い、五、
六年生になると本校(鶴沼第一小学校)へお世話になり
ました。

戦争中の事として着る物も食べ物もすべて配給制度の中
で母の着物で作った標準服にモンペ姿で住所、氏名、血
液型の大きく書いた防空頭巾を肩からかけて部落ごとに
集り、四キロ余りの道のりを各務原線を横目で見ながら
通いました。身体の小さかった私が羽場のむく坂の、の
ぼりのえらかった事が頭にこびりついています。

学校では勉強はともかく桑の皮むきに行ったり縄をな
ったり、わらぞうり作りをおそわつたりの毎日でした。
お金を出せばすぐ手にはいる現在とちがい本をよみたく
ても買うに買えずお友達がもってきたのを組中が貴重品
あつかいでまわしてみせてもらい、くり返しくり返しま
みました。

授業中、警戒警報でもあれば、すばやく道具を片づけ
て分団の先生につきそわれ不安をいだき乍ら家へ急いで
帰りました。そんな中でも中学校、女学校受験の私達に
朝早くから又放課後も補習授業をして下さいました先生
方に感謝の気持ちでいっぱいです。

お金があっても買えない、みんな同じ条件の中での事
です。不平不満もなくみんな仲よく元気でました。たま
に配給される服や、くつ、こむまり等のくじびきに皆夢
中になりましたがくじ運のわるい私には何も当らず残念



横山

はじめて母に手を引かれて小学校に入
学したのは、昭和十七年の春だった。
勿論、幼稚園や保育園などなかった時
代で学校に行っても見知らぬ人ばかりで
あった。

横山 芳 己

学級は、赤組・青組と二組だけであった。

私たちが学校に通う頃は、自動車などは極めて少なく、
従って、学校への往復は、道草を楽しみながらのんびり
と歩いて行ったものだった。

当時の学習は、国定教科書で、一年生は文字も片仮名
を習い、二年生になって、平仮名を覚えた。

遊びも今と違って、殆んど集団で、鬼ごっこ、陣取り、戦争ごっこなどをした。また、遊び道具は、木ゴマ・竹馬・竹トンボ・飛行機など、手近な材料を活用して作ったものだ。

そのほか、バンコ・カチン玉・ベースボールのまねごとなどして遊んだ。

戦争もたけなわとなり、次第に学校も戦争激化の色がただよいはじめ、教科書さえ不足がちで、工作の時間などには、藁ぞうりや下駄など作って、はいたりしたものだ。

食糧事情も悪くなり、学校の運動場はいつしか野菜畑と化してしまった。

勉強などはどこへやら、来る日も来る日も奉仕作業の連続のようになってしまった。

しかし、今になってみれば、あの頃の懐かしい思い出として浮びあがってくるのである。

集団生活の数々

大 栗 昭 二

農業実習のこと

「茄子にトマト、いらんかなー」

農業実習でとれた野菜を、かこに入れて自転車に積んで、二人一組で売り歩くことも、私たちのころの高等科

の仕事でした。高等科になると農業の時間があり、学校の南東角に農場があつて、五、六人組で一区画ずつ、自由に野菜作りの実習をしたものです。農具屋から鍬や方

能鍬を持ち出し、肥桶をかついで下肥をかけ、四季おりりの野菜を作りました。始めて自分の手で作った野菜を取獲したときの喜びと、それを売りに出かけた時の呼び声が出なくて、はずかしいような、てれくさいような気持ちが出たこと。農業実習の後で農具の洗い方が悪いと先生にひどくしかられたこと。今でもなつかしい思い出の一つ一つです。

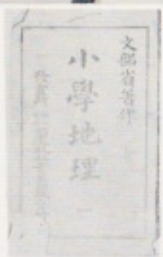
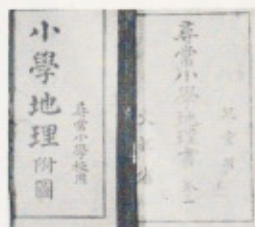
特に農業科の先生に授業の始めに詩吟を教えてもらえたこともなつかしいことです。今でも時にふれ折にふれて口をついて出る詩吟はこの小学校時代の名残りと言えらるでしょう。

戦争のこと

そうしたこともその年の十二月八日、大東亜戦争の開戦とともにだんだん出来なくなり、国を挙げて戦争一色にまき込まれていったのでした。

日支事変といわれた中華民国との戦争が始まったのは小学校三年の時でした。校長先生から話をききながら子ども心にも、これは大変なことだと、ひしひしと身のしまる思いのした事をおぼえています。しかしその後、大陸においては、連戦連勝で、上海、南京、漢口陥落とつづいた。祝勝の旗行列。戦勝祈願の村内神社の巡拝。各

務原飛行場の草刈り奉仕。戦地の兵隊さんへの慰問文や慰問袋の作成発送などもした。



教科書

そのための資金づくりに、小伊木河原での、砂利とし作業等々、学校行事も除々に戦争色が濃くなっていった時代でした。

六年生の時はそうした戦勝ムードと、皇紀二六〇〇年ということ、国中祝賀一色にぬりつぶされ、きびしい中にも喜色あふれた年であったと思います。

大東亜戦争開戦の日、十二月八日は、「いよいよ来るべきものが来た、男子として国のために」という気持ちで緊張したこと、真珠湾における戦果をきき大喜びをした反面、日本は果して勝てるだろうかという不安のようなものを感じたことを今でも覚えていいます。

ラッパの響き

登校は今と同じように集団登校でしたが、部落毎に集合し、分団長の号令で整列、点呼をして、下級生を先頭

に歩調をそろえて行進、奉安殿の前で礼拝してから教室へ入った。始業、終業、国旗掲揚もすべて高等科の当番のふき鳴らす、ラッパの勇ましいひびきで始まり終るというように、また先生、上級生にも拳手の礼というように、教科内容はもちろんすべてが軍国調でした。今から考えると子どもながらも、そうした事に一生懸命であったと思います。今は子ども達とをくらべて今昔の感にたえません。

国旗掲揚の時の君が代吹奏のラッパのひびき、分団行進のラッパのひびきに心踊らせたことも、今になつかしい思い出です。

少年団のこと

小学校のころの思い出の中で、少年団のことも楽しくなつかしい思い出の一つです。

部落毎に少年団があり立派な分団旗があつて、分団長を中心にいろいろなことを子どもだけでしたものです。当時各家庭の電灯は、一戸に十六燭一灯という家がほとんどで、私たちの低学年のころはその電気の集金は少年団の資金づくりの仕事でした。放課後公民館に集まり上級生の指示で各家庭を分担して集金に歩いたものです。

部落内の各所に公德箱を設け、その管理も少年団の仕事です。公德箱は各家で出るガラス等の危ないゴミを捨てる箱で、時々見廻ってたまつたものを集めて山へ捨

てに行ったり、箱の修理をしたりしたものです。
毎日曜日は必ず早朝（朝会前）集合ラッパが部落内に
なりひびき、全員が神社に集合、掃除をし体操をするの
が少年団の年中行事でした。寒い冬の朝のつらかったこ
と、帰って食べた朝食のうまかったことも思い出されま
す。

毎年元旦には午前零時に部落の神社に集合し、夜の星
空の下を、歌をうたいながら、大山の針綱神社と、山崎
の真墨田神社へ参拝しました。夏休みに北山へ登ったこ
ともあります。

そうしたことのほか、夏の地藏祭りや冬のやまのこ、
（山神まつり）は子どもたちにとつてなによりの楽しみで
した。地ぞう様や、やまのこは今の子どもたちにもさせ
たいと思います。

こうした行事を子どもだけでやっていたことと、今の
子ども会が大人の考え方で
運営されていることを考
え合せると、感慨一しおの
ものがあります。

遊 び

男の子の遊びは、低学年
のうちはやはり「兵隊ごっ
こ」が多かったと思います。
敵味方に分かれ、部隊長の



卒業生アルバム

下にそれぞれ階級章をつけてもらい、裏の山で戦争ごっ
こをよくやったものです。カーバイトを買って来て、青
竹で大砲をつくり、「ドカン」、「ドカン」とはざしな
がら、山の中を駆けまわったこと、泥だらけで夕方おそ
く帰って、叱られたこともなつかしい思い出と言えるで
しょう。

五、六年ごろ一番多かったのは「球けり」だったと思
います。霜どけでドロドロの校庭で「球けり」に夢中
なつて、ころび、よく服を泥んこにしたものでした。

そのほか「竹馬」「たこあげ」「コマまわし」は今と変
わりない遊びでした。今の子どもたちにはない遊びとして
は、「タガまわし」「紙鉄砲」があります。

魚もどんな小さな川にもいたし、今の子どもは出来な
いでしょうが、「螢がり」は楽しい遊びでした。

野球は大東軍戦争とともに出来なくなり、かわって剣
道（女子は薙刀）をさせられました。剣道では土用稽古、
寒稽古のきびしかった事も、今もなつかしいこと
です。

八月の一時から三時までの真昼の練習は、汗が目に入
り、稽古着は汗がしぼれる程でした。寒稽古は冬の朝六
時頃の未だ暗いうちに学校へ行き、板の間に正座してか
ら八時頃まで、練習に汗を流し、先生と一緒に朝食をし
たもので、その時の味噌汁のうまかったこと。まして稲
葉郡の対抗試合で優勝した喜びは忘れられない「味」の

すべて今昔の感一しおです。

けやきの木と私

山 本 市 郎

私が、始めて鶴沼尋常高等小学校のけやきの木を見た
のは支那事変が起った。昭和十二年六月の入梅も過ぎ、
夏の訪ずれを感じさせる、暑い日ざしの午後であった。

この年は、我が国にとっては歴史を大きく変えたたい
へんな年であり、私にとつても岐阜市の学校からこの鶴
沼の学校へ転校して来たという、一つの重要な時でもあ
った。

母と共に職員室に入った私は、あまりに閑散とした室
内と、窓から見える誰ひとりいない校庭の真中に、大き
くそびえ立つけやきの木から、子ども心にも深い印象を
うけて今でも思い出さずにはいられない。日曜日でもな
いのにと、いぶかしく思っていると、宿直の先生が「今
農繁休暇で全校休みですよ」といわれた。通常「お蚕休
み」という。昨日まで岐阜の学校で正常な授業について
いた私にとって、町と田舎の生活の違いに、何ともいえ
ぬ複雑な不安が身体のだこかを通り抜けていった。

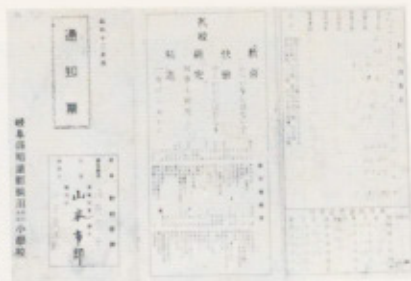
所定の手続きを終えて鶴沼尋常高等小学校高等科第一
学年に転入学した私は、農繁休暇を終えて登校した学友



青年団マラソン大会

毎日のお小遣いも一銭でしたが、なかなか毎日ほもら
えなかったと思います。一銭で鉛玉やけんこつが八つ買
えたと思います。お祭りや、正月の小遣い銭は二十銭か
三十銭が普通で、ときに五十銭も、もらうと大喜びをし
たものです。六年生の伊勢への修学旅行が五円であった
と思います。

と担任の浅野惣市先生と始めて顔を合せたのである。当時、先生には「千比」という仇名があり、その由来は、その名の通り身長がや、常人より低い所からつけられたものらしい。度の強い眼鏡の奥で、するどい眼を光らせて腕白盛りの男の子を叱りつけていた。男子ばかりの私の組では先生も当然知恵と工夫をこらし、種々道具や手段を考えられた。後の席まで届く程の長い竹竿を用意したり、



通知表

白墨のいっばいついた黒板ふきで頭をたいて坊主頭が真っ白になったり背中に、白墨で「タワケ」と書いたりした。私たちが生徒も対抗上それに負けじと、黒板に「千比」と小刀で刻んだり、書いたり、竹竿を折ってかくしたりいろいろと先生と生徒の間で攻防戦を繰り上げたものだった。しかし、その中にもユーモアを失わず、また、教訓も込められておった。そして戦争の拡大とともに、学校生活も次第に、軍国調の波にまきこまれていったのである。

その頃、岐阜県下でも優秀な教育者として名の高かった野村宗男校長先生の下では、先生方もそれぞれ個性の

ある方が多かった。全校生徒が一番こわいと恐れられていた野村先生、顔の黒い遠藤先生、女生徒に人気があった林先生、書道のうまい後藤華先生、画の伊藤七郎先生等々。野村校長の教訓通り質実剛健の気風が世相と共に学校全体をおおっていた。学習面では全校参加の行軍に特色があった。写生大会、珠算会、読書会では大文字を表装して展示した。商工会との協賛の手工の展示即売会で自分の作品に値段がついて売れたといって、友と肩をたき合って喜びあった。又、学年末の表彰制度等々。どれを取り上げて見ても思い出深いものがある。

運動会は毎年十月十六日ときまっておき、秋の真黒田神社の祭礼日の翌日に行われた。遠くへお嫁に行った人や働きに出ている人は、実家へ帰って来たものです。そして母校の運動会を見て、童心にかえった。また、低学年の「四条なわて」高学年の「白虎隊」は、心をこめて演じたものです。それも支那事変から大東亜戦争と拡大されていった戦争のため、中止になった。

靴を替えて自作のわらぞうりて通学し、物資の不足を身にしみてあじわった。卒業と同時に、志願兵に軍需工場にいくさの庭に立った。ついには、戦場で、工場で散っていった我が師、我が友のことを思う。

この人たちは、今も校庭の真中にそびえるけやきが、厳然として健在であることを伝えたいものだ。

対抗意識も、ほほえまし

由良逸雄

鶴沼第一小学校創立百周年と聞き、相当長い年月を経た古い学校であるとは思っていましたが、今年で百年目を迎えているとは本当に驚きました。とたんにわれわれ小学校時代の童心溢れる幾多の思い出が、走馬灯のように浮かびました。ここに思い出します、筆を走らせ、皆様を過ぎし子どもの世界へとご案内したいと思えます。

われわれは昭和七年四月一年生に入學、その当時鶴沼尋常高等小学校といって本校（現在の鶴沼第一小学校）と分校（現在の鶴沼第二小学校）とに分れ、東地区（羽場以降東部）は本校に、西地区（各務原、大伊木、三ッ池）は分校に、それぞれ通学し、これが終戦後一二年まで続いたと思います。

いまでこそ鶴沼第二小学校は鉄筋コンクリート三階建の近代設備をされた立派な校舎であります、われわれの分校時代の四年間（昭和七年、昭和十一年三月まで）の校舎は、西棟一つ（一年生の教室）中棟一つ（職員室）の木造平家建の三棟で、いづれも小さな校舎で、本校とくらべたら、親と子の違いの差がありました。

特に職員室は古い建物で、分校の前身、三ッ池時代の寺小屋教育の教室をそのまま、移転して使用されていたと

記憶しております。一年生の教室のみ二年目の新校舎でしたが、それも不幸にして、あの第二次大戦の昭和二十六年六月、各務原空襲の戦火に全焼となり戦争の犠牲になった一つでありました。ついで、入学した当時の服装といえはほとんどが着物で、靴は生ガムのアメ靴か黒いゴム靴をはき、今から思えば想像もつかないこっけいなとりあわせで、本当に田舎の学校であったと思えます。生徒数は約二百名で、先生は各学年一人担任で四人、うち一年生の先生は女の先生が多かったようでした。もちろん男女共学で、当時の「先端」をいっていたことだけは今から思えば自慢の種であったといえます。そして前の運動場といえはとても狭く、ある学年が体操時間を使用すれば他の学年はできず、いかに狭く小さかったか事例を書きましょう。

現在第二小学校の校門から北の道路（大山街道）までに校舎と運動場があつて、その頃ベースボール（三角ベース、四角ベース）がとても盛んでゴムまり（一個三銭か五銭）と竹のバットでよく遊びましたが、ちよっとフライを打ちあげると南側の芋畑へ飛び、ホームランかボールが失うか、どちらかでこまったことを覚えております。これを想像されてもいかに狭くて小さい校舎と運動場であつたかわかっていただけだと思います。

しかし、このベースボールについて愉快な思い出がありません。



現在の第二小学校

下の運動場までボールがころがり、ランニングホームランということで点数も二桁の大きな数字になったように記憶をしております。そして、狭い運動場でやっていた分校が、生徒数も多く、しかも広い運動場でやっていた本校にいつも勝ち、一度も負けたことがなく、今でも懐かしい愉快な思い出の一つとして、同窓会を催してもその話題に花が咲きます。

また、本校と分校との対校意識といえますか、それについて一筆書きましょう。分校は各学年とも男女共学で本校は男女一組づつに分かれていたために、三大節（四方拝、紀元節、天長節）運動会など本校といっしょに行事の場合は、いつも「男女組」とか、分校の「ヤツ」とかいつて、いじめられたものです。そして分校生徒は下の運動場の手工室校舎が、いつも集合場所になっていました。すると本校生徒（三、四年生）が五、六人組んできて、いやがらせをしたものですが、悪気があつて

三、四年生になると、本校と分校とのベースボールの試合をよくやりましたが、本校の運動場が余りにも広く感じ、よくエラーをやりました。外野でトンネルすると

のことでなく、ただなんとなく威張ってみたい単純な気持ちであつたろうと思います。いずれにしても、子どもの頃といえば分校時代が、もつとも頭の中に残り、楽しい時代でした。

次に、本校時代の思い出を書きましょう。五年生になつて、本校に登校することになって、また、新鮮味のあつた小学校時代だつたと思います。五年生当初は、まだ対抗意識が残つていて、分校から来たわれ／＼は、借りて来た猫の子のように小さくなつておとなしくなつていきましたが、二、三ヶ月もたてばたがいに慣れて気質も能力の程度も知つて、対抗意識もうすれ結構楽しい授業ができました。そして、本校といえはあの「けやき」の木が先ず、浮かびます。卒業生ならば、誰しも深く胸の中に、刻みこまれていてと思います。今でも校庭の真中に、ゆうゆうと、枝を伸ばしています。一体どのくらい年月を経ているか、この機会に教えていただきたいと思ひます。

「分校時代と違つて本校は、通学距離も数倍遠くなりました。通学途中のいろいろの楽しかつたこと、面白かつたこと、悪遊びしたこと、思い出話が浮かんできます。その当時は、自転車、電車の通学が固く禁止されていて一里（四軒）余りの道を歩く以外になく、したがつて、集団で通学し、特別学校に遅くまで残つていて一人

になつても、また暗くなつても帰ってきたものです。しかし子ども心に考え出したのが自転車で、小伊木部落まで乗つてきて、知らない家に預けて学校に行く手段を誰

となく考え出して、皆がよく使用した方法でした。私は母の里が幸いと小伊木でしたので、よく自転車通学をした記憶があります。また、徒歩通学でもつとつらかつた思い出としては、毎年夏休み前の十日間位はいつも半日授業であつたので、七月の災天下をベコベコの腹で帰るそのつらさでした。そこで暑さを少しでもしのぐように桑畑の畑道を帰つたこと、その上畑につくつてあるキユウリ、トマト、ナス等を失敬して食べたことなど、今思つてもよくぞ病気になるなかつたものだと思います。無茶苦茶なことをしていたと思つとゾツとします。しかし、その半面楽しかつたこともありつた。

それは六年生になつた直後のことだつたと思いますが全く知らないおじいさん（歳は六十五・六才だと思つたが）が毎日学校から帰つて来る我々をちゃんとあの坂、（東海スプリング会社より東約四百米、通称、よめ／＼り坂と言つていたと思つた）で、菓子箱を後ろに積んだ自転車を立てて休んで待つていた。そこを我々が通ると、おじいさんが「坊やたち、自転車を坂の上まで押してくれ」と頼まれたので、「よしきた」と言つて押し上げてやつたら、一人／＼に「カステラ」を、一切すつくれました。その時の嬉しさ、それからは毎日学校帰りの楽しみの一

つとして、おじいさんが待つているか、いないか、朝から、「カケ」をして通学したものです。

たしか暑くなつた頃だと思ひますが、ポツツとおじいさんの姿が見えなくなり、楽しみが、消えて淋しくなりましたが、今でもそのおじいさんの面影をはつきりと覚えております。



児童文集

このように、鶴沼第一小学校時代を振り返つて見ますと、幾多の恩師学校行事の思い出がたくさんあつて本心に忘れることが出来ない。いつまでも／＼懐かしく思い出の尽きることありませんが、特に鶴沼第一小学校々長として、八年間在職された野村宗男先生の、あの三文字の言葉「何是位」の精神と、いつも我々に厳格と温情、そして誠実をモットーとしたご指導をされたこと。これ

こそ一生一代忘れることの出来ないものであり、心の底まで深く刻みこまれて、我々年代の前後の皆様方は、殆んど私と同じ気持であると思ひます。そして毎日の朝礼には、小柄でテップリした体で大きな声と目で、全校児童に訓話されたあの顔、本当に今なお、まぶたにうかび胸の中に大きな思い出として残つております。

その他諸先生方の思い出が山ほどありますが、紙面の

都合上失礼させていただきます。しかし何と言ってもあの鶴沼第一小学校時代ほど、私の人生の中で、現在もまた将来も深く懐かしく思い出される時代はないかと信じます。

追憶

岩城 潔子

昭和六年四月、今より四十二年前、校庭の中央に立っているけやきの木に迎えられ、小学校の一年生に入学しました。

近所の子一人が顔見知りで、あとは全然知らない顔ばかり、気の小さい田舎者にとっては、親から離れているのがやっとの思いでした。

受持ちの先生は小林先生(女)で、頭は二〇三高地という髪型で、着物を着て紺のはかまを着けた、年輩の先生でした。最初教室へ入った時、机のふたに名前が書いてありました。私は一番前の席で、東町の男の子とならびました。あの当時の記憶が鮮明に思い出されます。次の日からは、赤い肩かけの横かばんをかけて通学しました。最初のうちは、鉛筆はなしでした。石板に石筆で「ハナ、ハト、マメ、マス……」と書いて、先生に赤丸をもらい、消えないようにそつとかばんに入れて家に帰り、

親に見せるのが何よりの楽しみでした。

校庭も南舎と北舎、そして下の段に二階建と東から西向に手工室があり、上の段の西には今のように職員室がありました。式その他、何か事ある毎に南舎の教室が式場に早や変わりしました。これも思い出の一つです。

夏休みともなれば、木曾川の近くの私たちは、毎日カッパのように川へ泳ぎに行き、夏休みの終る頃は、前後がわからぬ位に日焼けしたものでした。

上の校舎で、けやきの木の上から、四方に万国旗をかざり、本当にお祭りそのもの……

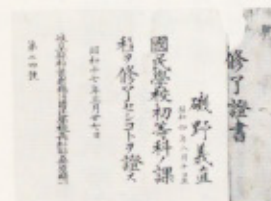
親たちも、朝から弁当を沢山持って、見にくるので、遠足の時は、リュックサックがありませんので、風呂敷につ、んで背中にしよって歩くのです。三年生になってやっとな、リュックを買ってもらいました。

校内の写生大会もありました。その絵が入選した時の嬉しかったこと……

十二月には展覧会と文化祭と商工祭があり、いろいろの店でごったがえしました。家の人、近所の人について



教科書



修了証書

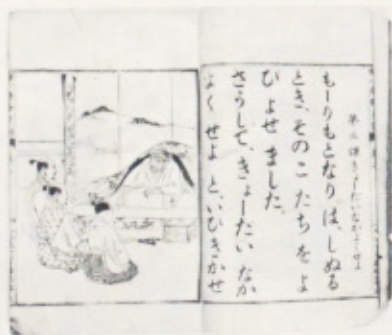
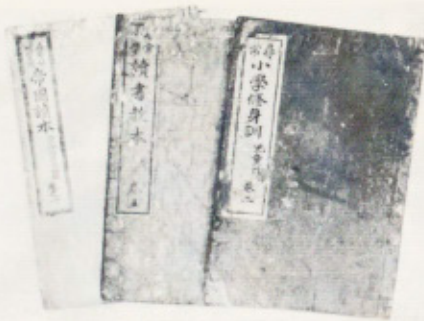
「よみがえった日本」

の到来期

土屋 俊郎

いき、小使いをもらって店を見歩いて買う時の楽しみ：年中行事の一つであったそろばん大会が、四年生以上が一堂に集まり、暗算、加算、加減算、見取算、掛算、割算等々それ／＼登場して、日頃の努力を競うのです。

このように校庭の中央のけやきの木は、暑い日も寒い日も百年來、風雨にさらされ、鶴沼第一小学生的の成長を見守って来ているのです。本当に尊い限りだと思います。



教科書

昭和二十年四月に、鶴沼第一小学校へ入学。当時は、第二次世界大戦の真ツ只中、(結果的には終局近かった。)当地方は、各務原飛行場が隣接している為、連日、昼夜を問わず、米軍の爆撃に見舞われ、一日の内の大半が防空壕での生活であった。夜は、燈火管制が敷かれ、口ソクだけの生活でもあった。入学したとは言え、空襲、空襲の毎日で、実質一日中授業を受けたことは、一週間の中でも、二日、三日程度であり、それがまた、六月、七月頃になってからは、学校へも行けず、各部落／＼の寺等で、先生が出張され、上級生(四年、五年、六年)下級生(三年、二年、一年)の二組に分れ、隔日授業であった。また、物資不足も甚しく、ランドセルは現在のような皮革製品でなく、厚紙を圧縮し固くしたもので出来ており、履物は藁で作った草履等が主であった。そして、食物も主食の大半が、サツマイモ、カボチャ、更に後にはサツマイモの茎まで食べた記憶があります。

幸いにして、当地方は、農村であったため、食物には、あまり不自由は感じなかった。しかしながら、学校の運



原爆で廃墟と化した広島

動場や、空地全部が、サツマイモ、カボチャ畑に変わり、現在のような立派な運動場や、諸施設等、全くなかった。教育も、もちろん、軍国調で、例えば、宿題を忘れたり、運動場のサツマイモ畑に入ったり、しようものなら、即座に先生より往復ビンタをもらい、時には、軍隊の鉄カブトをかぶらされ、校舎沿いの植木に後手に縛られたり、或いは、水一杯入ったバケツを両手に下げて、一日中廊下に立たせられる者もしばしば見かけた。これも当時の教育方針の一端が表われたものであり、精神力を養うという目的があったからであろう。

いずれにしても現在の学園では到底考えられない教育であった。そして八月に入ってから、戦禍もひどくなり、やがて、人類絶滅とまで言われた原子爆弾が、広島、次いで長崎に投下され、八月十五日ついに終戦（敗戦）を迎えた。その時、我々子供にも、やれ／＼と言う気持ちと、今後、日本がどのように変貌するだろうかという不安な気持ちを起したものだ。

やがて米軍の進駐が始まり、各務原飛行場周辺にも、

だに一度も歯医者や門をくぐったことがなく、たいへんありがたく思っている。

こんな時代の中にも、今なお忘れることの出来ない味の思い出がある。我々が、ちょうど二年生だったと記憶する。アメリカの兵隊が数日来校し、児童全員を運動場にならば、一人／＼の手に飴や、チョコレートをたくさんくれ、特に我々子ども心には、アメリカ製と言うところに魅力を感じ、たいへん美味しく、また、大切に味わったこともある。当時の鶴沼地方は、大半が農家であった為、名古屋、岐阜方面より、サツマイモ、人参、カボチャ等の、食糧物資を求め、数人、或いは、数十人が一団となり、毎日／＼買い出しに殺到した。（当時この団体のことを買い出し部隊と言った）一時は農村地帯も相当賑わった。そして、アメリカからの援助等もあり、ドン底生活もやっと上向きになりかけた頃、親善使節団として、アメリカの野球チーム「サンフランシスコシールズ軍」が来日し、我が国の職業野球チームと、各地方を転戦した。それをきっかけにしてか、全国に野球チームが到来した。

我々も三年生の後半から四年生になる頃であったと思う。学園ではもちろんのこと、青年団から一般に到るまで、各々チームを編成し、町内対抗試合等が盛んに行われ始めた。そして更に、日米対抗水泳大会に於いては、日本のホープ、古橋広之進選手（現日水連委員長）によ

たくさん軍隊が駐留し、更に、日本全体が米国の支配下に置かれた。そして、駐留軍の生活が、当時の我々の目には、非常に派手で、かつ裕福に見え、敗戦国日本のみじめさを、脳裏に焼きつく程痛感させられた。そんな頃、街には敗戦孤児や浮浪者があふれ、国民全体がドン底の生活に陥った。そして我々児童も、登校出来るようになったとは言え、文房具も満足になく、教科書等はワラ半紙に印刷したものを数枚もらい、各家庭にて一冊の本に綴じ使用したり、その他、鉛筆にしても、相当粗悪だが、各学年に少量ずつ配給され、それを更にクジ引きで購入したこともあった。

またこの頃は、現在のような美しく美味しいケーキチョコレート、飴、アイスクリーム等は全然なく、強いて菓子と言えば、サツマイモを加工して作った、せんべい、かりんとう、芋飴等が主なものであった。そして少し後になってから、アイスキャンデー（氷菓子）が売られ、夏になると部落内を、おじさんが自転車を箱を取り付け「チリン、チリン」とベルを鳴らしながら売り歩き、我々も夏休み等には毎日買って食べた。ちょうど現在のアイスクリームに匹敵する程、良く繁昌していたようであった。今から思えば、最近特に虫歯に悩む子どもが多くなっているが、あまりにも全てのものに満たされ、特に甘いものを多く取り過ぎて、現代の、弊害の一端であろう。小生、当時の菓子不足が幸いしてか、今



長崎原爆のきのこ雲

って、千五百米自由形に世界新記録が樹立され、世界中に水泳日本の名を轟かすと同時に、敗戦後の国民の心のつかえを、一気に吹き飛ばし、かつ、発奮させた大記録でもあった。

昭和二十五年十一月には、湯川秀樹博士が、ノーベル賞受賞に輝き、この年頃から、我が国の産業も発展の兆しを見せ始め、国全体が、や、落ち着きと明るさを、取り戻しつつあった。そして我々も六年生になり、今まで五年間の遅れを挽回すべく勉強に運動に、大いに頑張ったものであった。いよいよ、これからの、「よみがえる日本」とも言うべき時代の到来であった。

床下の鉛筆捜し

中村美智子

私が鶴沼小学校を卒業したのは、昭和二十四年です。私のお弁当は、麦の中に米が入ったようなごはん、

おかずなんてなんでもよく、腹がふくれさえすれば大満足。おやつは来る日も／＼ふかしたさつま芋……。

私はさつま芋はあまり好きではないのに、おなかがいっぱいしかたなく食べたものですから、二十五年たった今でもさつま芋を見ただけで胸がつかえるような気がします。こんな時代でしたから、仲良し同志のなし話ばもっぱら食物情報交換。学校の帰り五、六人で、今日は羽場の桑いちごを取りに、明日は大伊木までひとりばえの千なりトマトを取りにと西東ととびまわったものでした。そういうえば、朝、登校の道々に桑の実をとって食べ口のまわりを紫色にしてきて先生に叱られた事もありました。

毎日の通学には、母のかすりの着物で作ったもんぺをはいて、帯をほどいて作ってもらった木の手口の鞆の中に、薄くて破れそうな教科書や、一度消すとくろくやぶれてしまう帳面、けすつても／＼折れてしまう鉛筆……等々、どれも今考えると懐かしい思い出ばかりです。鉛筆にまつわる楽しい思い出があります。たしか五年生だったと思います。今の体育館のうらの教室で時間中に鉛筆を落としたら、床のふし穴にコロリ、残念でしたかたがかりませんでした。

「あれは一番きれいに書けたに――」と勉強は身に入らず、下を向いて穴とにらめっこ、そこで気付いたことは教室の隅に人が入れる位の四角い穴がありふたがして

あることです。

「よし、そこから入ってやれ」と放課後になるのを待ちかまえて、一人では心細いので、級友をさそい床の下へもぐりこみました。中は子どもが中腰になって歩ける位で、横のすき間から外の光が入り意外と明るく、床にはふし穴がところどころにあいていて、教室の光が注ぎ込んでいました。めざす穴の下につき、鉛筆はと捜しますとありました。私のだけではなく、鉛筆や消しこむ長いのが小さいなどが沢山落ちていたのです。友と「誰がおとしたんやろ、拾って行ってやろ」とあちこちの穴の下で拾っているうちに、校舎一棟の床下探険と相なったので、スカートの前を片手で持ちきれなくなったので、床からはい上り、すすだらけの顔で職員室へ直行しました。先生たちはほとんど帰られ、たしか石田先生が出て見えました。

新校舎

若くてハンサムな先生は、まっ黒な私たちの顔を見て大笑いされ、少し叱り、あげくの果て「そんな落とし主のわからないものは、お前たちにみんなやるからこれからそんなところへもぐっては駄目だ」と言われました。それがとても嬉しかったのです。これだけ沢山の鉛筆があれば一生使える。夕



暮れの道を日本一のお金持になったような積りで、友と二人でとんで帰ったものでした。

今の子どもでもしたら使いさしの鉛筆など、見向きもしないでしょうにね。物の乏しい時代であった故に、物の大切さを学び、こんな楽しい思い出も残ったんだと思います。

過ぎ去った今、古い校舎をこわして素晴らしい新校舎に変りつつあるのを毎日車窓から眺めながら、何かチョッピリ悲しい思いにかられる私は、古き良き鶴沼小学校生活を送ったからなんでしょうか。

腕白時代

古池 寿郎

わたしが、鶴沼尋常高等小学校に入学したのは、昭和七年四月。すでに前年の九月十八日に満州で、この年の夏には、戦火は上海にも移り、日本は一步一步危険な谷間へとふみこんでいた時期でした。

大安寺川の堤の桜は今を盛りと咲きはこり、ヒバリのさえずりに耳をかたむけながら、大公孫樹（現在の体育館南側）を背景に入学記念写真。男女ともほとんどが着物、グアプの学生帽、胸には真新しい手ぬぐい。緊張した一年坊主が、おヒゲの校長先生、ハカマ姿のやさし

い先生と並んでパチリ、のどかな春の一日でした。

あれほどはげしかった蟬時雨も、昼の一休みか、一瞬静けさのおとずれ。そんな真夏の昼さがり、途中の畑でトウモロコシの毛で髭をつけ、里芋の葉っぱを頭にのせた腕白坊主の一団が、一目散に川へかけていく。火傷しそうな熱い石の上をビョンビョンとんでザブン。

川は子どもたちの天国であり、試練の場でもありました。前と後に上級生がついて木曾川を横断する。川の真中でこわくなり引き返そうにも岸はあまりに遠く、必死に泳ぎやつと対岸の石に足が触れた時のうれしさ。成功後は学校生活では得られない感激でした。

暗い田の面を渡って、祭りの太鼓の音が流れてくると



運動会風景

もう秋である。運動会は例年十月十六日（真墨田神社の祭りの翌日）と決っていた。この日はやはり一家総出で見物。祭りのご馳走を重箱につめて、朝早くから出かけたものでした。カチカチになった箱寿司の甘酸っぱい味、最近では箱寿司はほとんどみかけませんが、

やがて回も進み「帽子取り」先生からきつく注意されても、こっそりと帽子に紐を入れ、水にぬらして頭が痛

くなるほどきつく、かぶって合図を待つ。号砲一発、今年こそは、と奮戦した甲斐もなく、投げすてられた赤白帽。泣きたいようなくやしさを何回も味わいました。当時高学年は、「剣舞」がありました。歌詞の意味はよく理解できなかったが、神妙な顔で演技をしたものです。運動会のハイライトはなんとといっても分団リレー、部落の名誉にかけて、懸命に応援しました。これは形式こそ違え、現在も変わらぬ運動会の一コマでしょう。

やがて閉会式。秋の落日は早い。賞品を手に家路を急ぐ子どもの影が長かった。稲田を吹き渡る風は肌寒い。冬のおとずれも間近い。

「山の神」

松岡 武

私の子どもの頃には、この地方の古くからの風習で、男の子もたちが、山の神様をお祭りする「山の神」と言う行事がありました。

小学校の、秋の運動会が終り、十一月になると、子どもたちは「山の神」の準備でいそがしくなります。学校から帰ると、急いで、火見やぐらの下に集まります。そして藁をのせる大八車をひいて「山の神のかんじん」と

言って部落の家々をまわります。取り入れていそがしい農家では、今年とれた藁を、また非農家では一銭、二銭とお金を寄附してもらいます。寄附をもらうと、「毎年の毎年のかんじん」と言いながら、次の家にまわって行きます。こうして集めた藁を、子どもたちだけで整理して売ります。この売上金と、先に集めた寄附金を「山の神」の費用にあてます。

「山の神」は、十二月の第一土曜、日曜に行います。子どもたちが合宿する家を宿（やど）と言います。当日になると、子どもたちはニコニコしながら宿に集まってきます。夕食の準備は、上級生の仕事です。下級生は宿の附近で遊びながら夕食を待ちます。夕食は、五目めしです。友だちと一緒に食べる食事の味は格別で、何杯もお代りが続きます。食事が終り一服すると「集合」と言う声がかかります。子どもたちは、二列に宿の前にならびます。そして「南町少年団」と書いた提灯を先頭に行進に移ります。行進が始まると音頭とりの上級生が「大黒様と言う人は」と大きな声でどなりまわります。続いて子どもたちは、「一で俵をふんまえて」「二でニコリ笑って」と十番まで続く大黒様の数え歌をうたいながら、夜の部落をまわります。中におもしろい子がいて自作の数え歌を大きな声でうたって皆をどっと笑わせます。部落を一まわりして宿に帰ると就床です。思い思いの友だちと床に就きます。年に一度友達と寝るのが嬉しくて、な



城山と犬山橋

かなか寝つかれません。上級生がまわってくると、たぬき寝入りをきめこみます。

「起床」と言う声でいっせいに飛び起き、宿の前に集合して犬山橋下流の河原に行きます。ここから城山に祭ってある「山の神」を拝礼します。拝礼が終わると、大安寺川の堤で刈っておいた芝に、火をつけ燃やします。

朝食がすみ後かたづけが終わると「山の神」の行事はすべて終わります。こうして子どもたちは、尊い集団生活を体験し、大切な自主性を養いながら力強く成長してゆきます。宿の人々に「お世話になりました」とていねいにお礼を述べて、子どもたちは家路につきます。澄みきった青空に、緑の姿を見せていた伊吹山はいつものまにか新雪におおわれ、やがてきびしい冬がかけ足でやってきます。

小学校の思い出

山田 郁夫

父が軍人を退官し、憲兵隊官舎を引き払い勤務地の朝

鮮から引き揚げて来たのは、昭和八年の暮であった。掛妻の実家へは戻らず、妻の実家に近い各務ヶ原駅前 residence を構え、住みつくことになったのである。

当時、小学校一年生だった私は、慶応型の学生服に半ズボンという服装で、ランドセルを背負って登校していたが、大半は、カスリの着物を着て、肩からズツクのカバンを下げていた。方言が分らず、標準語を使っていた私は、土地の風格に馴染まない異和感があり、異国人に扱われ、いじめられた記憶がある。着物スタイルは、二、三年後には姿を消していたように思う。

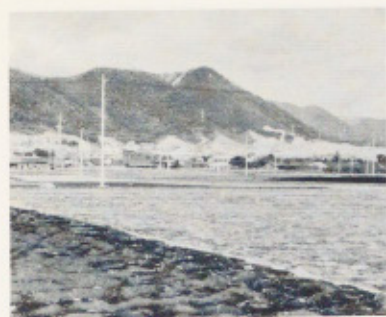
各務ヶ原は飛行二聯隊への玄関であり、名鉄電車の二聯隊前駅が、松江堂の裏あたりにあった。また、競馬の町でもあった。駅前の中山道筋には商人宿が多く、町の中は、馬小屋とか民宿が盛んで、競馬が開催されると、馬主や馬丁や予想屋などが民宿し、一〇〇戸足らずの町は俄に活気づいた。名鉄電車は、馬場医院の裏あたりに臨時駅を設け、電車を止めて競馬客の便利を図った。

中山道は、昔から名に知られた主要道路だが、各務ヶ原のあたりは追剥が出没し、旅人の恐れる地区だったと古い人からよく聞かされた。荷馬車が、道路を占領して悠然と通り過ぎるとき、人は道をあけてこれを見送る。のどかな風景は、もう、思い出せないくらいに色あせてしまった。道路の両側には大きな松の並木が続き、真昼でも薄暗く、子どもが一人で歩くのは恐かった。

鶴沼第二小学校は、その頃、稲葉郡鶴沼尋常高等小の分校になっていた。教室は、一年生から四年生まで四階、敷地の北端に東西に長く建っていた。現在の校門脇にある石碑の南側に東西に細い道があり、運動場はそこまでだった。猫の顔程の運動場に、百数十人の子どもが、飛んだり躍ねたりするミニ小学校だったが、一年生の教室は、東へ継ぎ足したような感じだったので、創立後拡張されたものと思われる。運動場の南にはお宮があった。

学校の前の道路を、まっすぐ南へ突き当たると二聯隊があり、道路の東側には、小高い丘があつて桑畑が広がっていた。この道路を通ると、滑走路へ降りる飛行機が頭をかすめるような感じがして、思わず首をすくめるのである。操縦席の顔が見えた。

分校で覚えているのは、昭和九年の室戸台風である。



旧競馬場跡

登校すると間もなく風雨が強くなり、室戸岬から四国に、上陸した台風は、大阪湾、琵琶湖を結んで北上し、岐阜地方を圏内に巻き込んだ。瓦やトタンの飛び散る町の様子が学校からよく見えた。校舎の窓ガラスが何枚か割れて危険にさらされ、教室の中にかたまつて恐ろしい時を

過した。時間が長かった。風の吹く中を、父が迎えに来たので、手をつないで家へ帰ったが、足に小石があたり、体が吹き飛ばされそうだった。その翌年十一月父は急病に勝てず短かい人生を終った。

この頃行われていた夏まつりは、稲荷神社への参道に行燈が立ち並び、夜はローソクを灯してきれいだった。子ども相撲や素人演芸の催しがあり、楽しい夏の風物詩になっていた。夏の夜、三年生以上の少年が集り、暗闇の中を、山の前のお墓まで行って帰る試胆会をやったり、秋には、神社の境内に大かがり火をたいて山の神をまつる「やまのこ」をやったりした。こういう行事に参加できる年令に達したのだという自覚を持つのが、何より嬉しく、心をわくわくさせて参加した思い出がある。竹トランプや紙鉄砲に無中になり、幾つも作った記憶もある。

現在の野田商店の位置に芝居小屋があり、浪花節、サーカス、芝居、映画などを、時々興業していた。映画は無声と、トーキーの両方があった。映画の影響を受けてチャンバラやピストルごっこなどもやったようだ。鞍馬天狗などは人気の的だった。顔に、しごき帯を巻きつけて、さっそうと登場したりした。パンコ、ビー玉、コマ廻しなどもやった。

授業は分校で行なっていたが、祝祭日には祝賀式に参加するため本校へ行った。分校には、奉安殿がなかったのである。奉安殿には天皇、皇后両陛下のお写真が安置

されておりお写真の前で、校長先生が、紫の袂紗を解き桐の箱から教育勅語の巻物を取り出して、朗読される習わしであった。この間、参列者一同深く頭を下げ、静かに聞き入るのである。厳かな威厳が感じられた。

五年生になると本校へ編入された。「本校へいったら分校の名を辱かしめないよう、しっかりとがんばって下さい」小森先生の激励は小さい胸を引きしめた。家から本校まで歩いて四十分、四杆程の道程である。全員が歩いて登校した。昼なお暗き中仙道は、通る人影も少なく、学校へ着くまでに、何人の人と出会うか、自動車を通るかどうかなどと掛合いながら、松の木に隠れたりして通うのがおもしろかった。

学校の規律は厳しかった。国旗の掲揚と降下には、合図のラッパが鳴る。児童はこのラッパを聞いた位置で、国旗掲揚塔に向って、直立不動の姿勢をとられた。君が代の曲に合わせて空高く国旗が掲げられると国旗に最敬礼して、再び自由に返るのである。分校とは、まるで様子が違っていた。

昭和十二年九月二十日、私には、生涯忘れ得ない事件が発生した。当日の午後、担任の先生が所用で留守になったので、隣の組と合同で運動会の飛び箱演技を練習することになった。飛び箱の苦手な私は、バネを使つての倒立回転に自信がなかった。しかし「担任の先生ではないので……」という考えがあり、できない演技を先生に



恩師のアルバム

手伝ってもらつて、やりとげようとしたのだが、飛び箱から落下して、左膝に前歯をぶっつけてしまった。傷は歯の跡だけだったが、悪化して入院することになった。

開院四日目の川崎病院である。(現東海中央病院)一時期、生死をさまよつたりしながら、ギブスで固めた脚がなおるのに六ヶ月を費した。この間、責任感の強い後藤先生と林先生には、肉親に勝る手厚い看病をしていただき、大へんな迷惑をおかけした。

先生方には、この機会に、改めて厚く御礼申しあげます。この時代には、ベニシリンやマイシンの如き抗生物質がなく、化膿の治療には、マキキエロをお尻に注射する方法がとられた。退院を予定していた二月十一日に、皇后陛下ご下賜の学生服を拝領することになり、病院で警察署長から伝達が行なわれた。このときの感激は今でもよく覚えている。このため退院が翌日に繰延べられた。運動会の花型は、伝統ある白虎隊の剣舞だった。五年六年の男子全員が行なう演技は、運動会の圧巻であり、少年のあこがれでもあった。「五年生になったら剣舞ができる。」この日を一年前から待ちこがれていた私は、剣

舞のできなくなつたくやしさを胸の奥にしまい込むため苦しい努力を経験した。

六年生の春は遠足に参加できなかったが、秋の修学旅行には参加した。このときは、松葉杖なしで歩けたと思う。生れて始めて見る皇太神宮はものすごく大きかった。玉砂利を踏む靴の底に冷気を感じ、神々しさに身が引きしまったことを覚えている。神国日本の皇祖の御霊をひたすら信じていた時代である。

昭和十三年七月、日華事変が勃発した。平和が破れて再び臨戦態勢に入り、年を追って、戦色が深まっていった。新聞は勿論、少年雑誌や絵本まで、戦争一色になり学芸会も戦争をテーマにしたものが多くなった。昭和十四年高等科に進んだ頃から、体操の科目に武道が入り、女子は、健全な母体を作るため鍛えられた。出征兵士の留守家庭へ、農業の応援に行き草むしりなどもやった。生活は、耐乏の度が強くなり、ゴム草履やゴム靴に代えて自作の藁草履を履いて登校するようになった。!!金鶏あがつて十五銭、映ある光三十銭、銀翼つらねた朋翼はぐんぐんあがつて五十銭、ああ一億が驚いた。昭和十五年、紀元二千六百年の歌は、こんな替え唄になって、流行した。替え唄に出ている名詞はすべてタバコの名前である。金鶏は、ゴールデンバットの改名だが、十五銭預って、ゴールデンバットを二個買つてくると、おつりの一銭を駄賃に、くれる人がいたのが昭和十一年頃のことだ

た、にわか造りの舞台でお遊戯をしていて、今は亡き友太田君が隙間に足を落してしまわれた事件など、時代の特徴の窺える出来ごと……等。懐しい思い出が浮かびます。

二年の終りに父が帰り、うれしかったけれど大変気はずかしい思いをしたものでした。三、四と水田謡子先生に女子は受け持ってもらいました。若くてやさしく音楽が得意のようでした。「つりがね草」「羽衣」など大変美しい歌で、今でもよく口ずさみます。

色々な思い出の中で一番印象深いのは、上級生に友だちが多かった私は下校時間が守れず、二度までも立たされ、あとの時のことです。水のはいったバケツを持って教室に残され、あたりが薄暗くなり、職員室にお許しを乞に行ったら先生は帰ってしまわれていて、他の先生にわけを話して帰してもらいましたが、大安寺提を越えてから、うっそうと茂る桑畑の道、子とりの話など思い出し、こわい思いで一目散に走り帰ったのでした。

四年生になった時、校門の木札が新しく、国民学校と改められていました。初等科四年生、物資の不足でゴム製品なども配給でしか渡らなくなり、本当に持物を大切につかい果たしました。どんぐり拾いなどにも野、山に出かけ非常時体制になってきました。出征兵士の見送り、合同の村葬が度々あるようになり、小さな胸を痛めたものでした。

から、四年の間に、金鶏は二倍以上に値上りしていることとなる。物資の足りない日本は、戦争に疲れながら、第二次世界戦争に向って、まっすぐ進んでいたのである。

なつかしい時代

勝野ます子

小学校入学の前年、白地に赤い花模様のかたを着てまだ肌をひんやりとした気配を感じる早朝のブラットホームに、父の出征を見送り、母にも生後数ヶ月で死別していた私は、両親のいないことなど少しも気にせず、セーラ服に身を包み、元氣一ぱい希望に胸ふくらませ、祖母に連れられて校門をくぐりました。

私は青組で坂井千世先生、先生は淡い橙色の着物に胸高に袴をきりつとつけられ、にこやかに私たちを迎えてくださり大きな声で「今日から私が、皆のお母さんですよ」と云われた時は、とても嬉しく、以来随分あまえて迷惑をお掛けしたものです。

今時と違い集団生活の第一歩を踏み出した私たちにとって、新しい友だち、教科書、生活様式等、全てが始めての事ばかりで緊張の余りか、お漏しをするお友達もあり先生は、大騒動、てきばきとよく面倒を見て下さいました。また、二年生の学芸会の時、各教室から寄せ集め

五年生になると分校の友だちと一緒に、組も三組に分けられ、私は女子組で師範卒の浅野幸子先生とゆうとてもきびしい先生で、初対面の学籍簿で「さん」付けをしてもらった位で後、敬称略びんたもどんどん飛ばす先生でしたが、勉強は勿論、生活指導に対する私たちへの教えがいかに真剣かがひしひしと感じられました。綿入れでうちに草りばきのお友だち、弁当箱に一杯、香ばしい焼き餅をもってきて、くださった友だち、川原の石拾い、農場の開墾、桑の皮むき、縄ない仕事、なれない手つきで汗を流した思い出は、三十数年前の過去のことであっても、けやきの大木と共に懐かしく鮮やかにうかんできます。



現在の校門

合唱団と先生

吉田 せつ子

敗戦直後の貧しい小学校生活を過ごした私は、合唱団での思い出が、今も懐かしく残っています。

昭和二十二年（当時三年生）でした。この第一小学校に合唱団が出来ました。指導して下さった先生は、横山先生（若くてとてもハンサム）松本ユリ子先生（若くてとても美人）のお二人でした。

三年生では、三人だけが上級生の中に加えてもらって、ともうれしかった。稲葉郡下の各学校で行われた音楽会にはよく参加し、歌いました。岐阜市公会堂へも行きました。現在の富田高校だったと思います。手力の駅から、みんなで歩いて行って、その遠く感じたこと……よく帰りが暗くなって恐かったこと……

那加第一小で音楽会があった時、もと、この第一小に勤務されていた、野村校長先生が、鶴一小の生徒が懐かしい〜と、校長室へ呼んで下さって、色々学校のことを聞いて下さったことがありました。

中でも、NHKのラジオ放送に出られたことは感激でした。今でも、時々口ずさんでいる歌。

どこかで春が生れてくる

どこかで芽の出る音がする

春は名のみ風の寒さや

谷の鶯 歌は思えど

等、六曲合唱。記念にといただいた便箋を持って、奉安殿跡（現在体育館の所）で、記念撮影をしました。あの時のお友だち、お元気でしようか。松本先生は一年生から五年生まで、受持って下さった先生。御病気になられた時、お見舞いに伺ったこともありました。現在どこにおられるか、全然判りません。お元気でおられるならばぜひ一度、お逢いして語り合いたいと思います。

私は合唱団のお陰で、楽しい小学校生活を送ることが出来たと思っています。歌は、本当に心の友、大好きです。親友も得ました。

私は、第一小学校を卒業出来たことを心から誇りに思っております。

校歌にもあるように、大げやきと共に、ますます充実した学校になるよう祈るものです。

☆☆●☆☆●☆☆



合唱風景

各務原分教場卒業生の座談会

【座談会】

一、月日 昭和四十八年九月二十四日

一、場所 三ツ池公民館

一、司会 稲垣好夫

一、記録 片桐玉江

【出席者】

（順不同）

片山 辰重 昭和二十年卒

五島 辰雄 昭和十七年卒

水口 伊俊 昭和二十一年卒

小林 武雄 昭和十七年卒

野入 耕作 昭和二十二年卒

桜井 均 昭和十九年卒

桜井 弘巳 昭和二十三年卒

石黒 賢二 昭和二十一年卒

竹山 敏春 昭和二十一年卒

司会 まず最初に、学校の校舎の様子をお聞きしたい
と思います。

片山 昭和十八、十九年頃だったと思いますが、学校



座談会風景

の周辺は、防空壕と、ヒマの木ばかりが作ってあった。登校途中にも、防空壕がいたる所にありました。

声 防空壕は、生徒がみんな、作ったという事も聞いたが。

石黒 防空壕が、作ったという話だそうです。あの頃は、大伊木へ行く道と、羽場へ行く道の二つに分れて作られていた。六年生では、まだ作ることは無理だったと思いますかね。

水口 私もそんな事を聞いた記憶があります。

司会 皆さんは、最初分校に入られたから、その当時の分校の校舎の様子や、校庭など、お聞かせ願いたいです。

五島 入学した頃は、二十軒から学校まで、家は二、三軒しかありませんでした。後は、畑ばかりでさつまいもに里いも、冬には、麦が作ってありました。学校周辺も、官舎の他には、一、二軒の家がただけでした。校舎は、一年から四年までの教室が、一部屋ずつで四教室に職員室があっただけの、本当にみすばらしい学校でした。

司会 それ以後に入学された方で、どなたか学校の様子をお話して下さい。

五島 当時、各務原から大伊木へ行く途中に、岐阜飛行学校（二連隊）があつて、営外居住の兵隊さんが、学校のそばを毎日通われた。そして分校を見て「幼稚園か」

と言われていた。それ位に分校は、小さくみすばらしかったといえます。

司会 大正の人からも、お聞きしましたが、分校は、特に飛行場にも近かったので飛行機について、何か思い出はありませんか。

五島 その頃、二枚バネの飛行機が非常に低空を飛んでいました。ある時、大伊木から通学してくる子が、その飛行機めがけて石をぶつけた。それが偶然機体にあたってしまった。後で飛行場側から学校へ注意にいられたことがあります。

水口 当時、二連隊の二枚バネの飛行機（俗に赤トンボともいっていた）が現在の岐阜車体の処へ、よく降りて来た。その頃、滑走路には、穴ボコがいくつも出来ていて、飛行機の前輪が穴ボコに入ると、飛行機の頭が土についてしまった。そんな記憶が残っております。



九五式一型練習機

司会 生徒数は何名ぐらいでしたか。

片山 私のクラスは「四十七士」といって、四十七人でした。各クラスともやはり五十人前後だったと思います。

石黒 川崎区に三人ぐらいと、各務原に六、七人生徒

がいただけで、後は、全部大伊木、と三ッ池の生徒ばかりでした。

水口 私の頃は、大伊木は、一、二年まで分校に通っていた。三年生になると、大伊木だけ本校へ通うようになった。そして私達も、五年生から本校に通った。本校へ行ってからは、大伊木を始め、古市場、南町の人達とよくけんかをしたものです。

石黒 分校は、先生は当時四人しかいませんでした。

片山 分校の場合、運動会は本校へ行ってやった。その時、更衣室などなくて、仕方ないので、物置きのような工作室の中で体育服に着換えたものです。

司会 当時の服装と、はきものについてお伺いしたいと思います。

小林 わらぞうりが、多かったと思います。五年の時でしたか、小伊木河原へわらを持って、わらぞうり作りの講習会に行き、牛も、馬もはけないようなおかしな、わらぞうりを作った覚えがあります。くつは、僕もはいたこともなければ、見たことも、ほとんどありませんでした。雨の日は、長ぐつがないので、下駄で通学しました。冬になると、降っても、照ってもマラソンをやりました。受持ちの先生が厳しかったので、マラソンのコースは、校舎の隣のコンコンに凍てついた所を走らされました。高下駄をはいてころびそうになりながら、マラソンをした覚えがあります。

司会 服装は、洋服でしたか。

五島 風邪をひいたとか、その他病気を除いて、男の子は主として、学生服でした。

石黒 あの頃は、服の上にかすりの羽織を、はおって行ったものです。一、二年の頃は、くつはなかったですね。冬は下駄、夏はわらぞうりでしたね。後になって、あめくつというのがあって、寒くなると、コンコンになってしまい火にあぶってからはいたものです。わらぞうりは、一日しかもたなかった。体育などすると、帰りは、半分ぐらいなくなってしまう。野村先生が、ぞうりの裏に「自転車」のタイヤを切ってはりつけて、はけ」と教えてくださった。そうすると、一週間位はくことが出来た。

司会 集団下校は、ありましたか。

石黒 戦争が激しくなって、集団下校になりました。

桜井(均) 十八年の夏ごろから、集団下校になりました。ラッパを吹いて校庭にあつまりました。

野入 僕の五年生の時に終戦になりました。やはり集団下校をやりました。服は、詰めえりの学生服、はきものは、わらぞうりでした。当時、くつは、学校で、配給制でした。従って、わらぞうりと、くつと半々ぐらいで通学していたと思います。

司会 当時のくつは、ゴムが悪いので、すぐに折れたりしてしまいましたね。

石黒 あの頃の集団下校は、今と違って、大きい子から順に並んで、帰ったので、後の方の小さい子は、はきものも充分でないで、本当に可愛想なものだった。

片山 私の通学する頃は、中仙道（国道二十一号線）は、まだ、松並木が、ずっと続いていて、その道路を、三菱の〇戦を牛車で、よく運んで通っていました。僕たちは、その牛車に乗ったり、そばについていたりして通学しました。

小林 私たちの頃は、重爆撃機を積んだ牛車がよく通っていました。

司会 分校から、いよいよ本校に移るという時には、子どもながらに動揺があった事と思います。又、始めて本校にいられた時の気持ちなどお聞かせ願います。

桜井 四年生の時に終戦になりました。五年生から本校だったのが、分校が戦災で燃えてしまったため、四年生の二期期になってすぐ本校に通うようになりました。本校までかけ足で通ったものです。最初、本校へは、一、二ヶ月通っただけで日輪（兵舎）が出来てからは、二ヶ月程日輪へ通い、そして又、本校へもどりました。あの頃は、行ったり、来たりで勉強どころでは、なかったですね。

野入 本校へ行ったとき、権力争いというか、分校から行って威張ると、なぐられたりするので、非常に気を使って、小さくなっていました。

石黒 「分校、分校」と馬鹿にされて、いやだった。誰しもじゃないですか。

水口 当時、部落の対抗意識は非常に強かった。特に南町、宝積寺には頭が上らなかつたですね。一対一のけんかでも、部落意識が強いというか。部落中こそって、けんかになってしまいました。

小林 本校へ行くと、サイレンがあるということで、非常に興味があった。当時、サイレンのスイッチは、小使室の二階へ上る入口の柱に取り付けてあった。私は、本校へ入って四月早々、サイレンに興味を持って、スイッチを入れてしまった。そのまま放っておいたので、サイレンが鳴りだし、生徒が「授業がはじまった」と言っ大騒ぎで学校へやって来た。今思うと本当に、冷や汗が出る事です。とに角、寺小屋式の勉強をしていたものが大きな集団に入ることと、子どもながらに気を使った事は確かです。

司会 本校になじむまでに、期間はどの位かかりましたか。

声 一学期位はかかった。

片山 サイレンの事は、あの頃「ボーが鳴った」といっていましたね。

声 サイレンになると、皆走ったものですね。

桜井 僕たちの頃は、サイレンは、スイッチの所がボタンになっていたので……」



座談会風景

司会 登下校で特に思い出になるような、お話はありませんか。

片山 学校帰りに、イタチを見た事があった。皆で追ってつかまえた。そして、それを各務原の林さんという家へ売りにいったことがあります。農場で作った農作物を、帰りに売って歩いたこともありますね。

石黒 学校帰りに、ナイフを

持っていて、甘木、なすび、きゅうり、さつまいもなどを道々けずって食べたり、麦の穂も束にしてかじって食べたものです。家へ帰るといつも、真っ暗になっていた。

水口 当時、ミスノというオート三輪が、中仙道をよく走っていた。十五キロ二十キロぐらいの早さで走るので、そのオート三輪の運転手に内緒で飛び乗って帰ったものです。ある時、友達がこの三輪車に乗り損なって砂利道に頭から落ちて大けがをしたことがあった。それからは、オート三輪の飛び乗りは止めた。しかし、牛車の飛び乗りは、よくやったものです。

司会 学校での遊び、家での遊びで、何かありましたら。

石黒 「陣取り」ばかりですね。

五島 分校では「クチ」という遊びばかりでしたね。

帽子のひさしを横にしたり、後ろにしたりして、遊ぶのです。家へ帰ってからは、少年団に仲間入りして、お宮で「陣取り」をして遊びました。羽織りのヒモはちぎれる袖は破れる、汚れるで、親には、叱られ通しだった。勉強は、殆んどしなかつたですね。おやつには何も切り干しを、ポケットに一杯入れて、食べて遊んだ。

片山 本校へ行った五、六年は「くさし」をよくや

った。林先生によく叱られて「くさし」を取り上げられた覚えがある。家では、お正月などは「すごろく」「たこあげ」をよくした。

水口 「バチンコ」もよくやりました。

片山 「模型飛行機」ではよく遊んだものです。学校から帰ると、すぐ飛行機を張る紙を買いに走ったものだが、学校では、つづり方用紙を使ったりして「飛行機」を作り、窓からとはしたりして、休み時間になると「紙飛行機」ばかりだった。

桜井(均) 飛行機の流行したのは、十八年頃からではないですか。

野入 飛行機の大会か何かあったと思いますが。

五島 僕の高等科一年の時に、一級上の子で、東町の子だったと思うが、「模型飛行機」の大会で、日本新記録を出したことがありますね。

片山 私の高等科二年の時に、十人位選手になって行った。朝礼の時、前に並ばされて「しっかりやってこい」

と、はげましの言葉を載いて、大会に出掛けて行った。結果は残念ながら駄目だった。あの頃は「一年生から高等科まで全校揃って、飛行機大会がありましたね。」

司会 修学旅行とか、遠足の思い出、その時のお弁当とか、おやつなどについても、お話し戴きたいと思えます。

五島 一、二年は、前渡不動へいきました。

桜井(均) 三、四年は、山中不動でした。

五島 春と秋の遠足の行き先は、だいたいきまっていた。僕たちの頃は、六年の時には運よく、伊勢へ修学旅行にいけました。

片山 僕たちは、六年の修学旅行は、伊勢でした。伊勢へ行ったのは、私たちが最後だったと思います。旅館では、木剣を買ったり、よそから来た修学旅行の生徒とけんかをしたり、枕のぶつけ合いをしたりしたものです。桜井(均) まあ、あの頃の修学旅行といえは、よその学校とけんかをするのが、楽しみでしたね。

片山 伊勢へ行くには、犬山線で、押切町まで行ってそこから、新名古屋まで歩き、それから近鉄線に乗っていったものです。

声 「電車でいった」「汽車で行った」

司会 当時の持ち物は、何でしたか。

片山・石黒 風呂敷だったですね。名札をつけていましたね。

司会 当時の修学旅行の費用、小遣は覚えませんが、

声 覚えませんが……

石黒 私は、修学旅行に行っていないが、修学旅行に行

って来た人から、土産に金花糖をもらった覚えがあります。

片山 私たちの頃は、土産に金花糖を買うにも、配給

制で、券を一枚ずつもらって、それを出して買った。だ

から、土産といっても、家のふんを一つしか買うことが

出来なかったです。

司会 旅館は、二見の紅葉館という所だったですか。

小林 そうです。紅葉館です。

片山 私たちは、伊勢屋だったと思います。

司会 大正時代の方は、殆んど紅葉館だったですね。

桜井(均) 私たちは、二見館だったと思います。

司会 おやつはなく、昼飯は、にぎりめしだったと思

いますが、お米は配給制の為、米を持って行かれませ

でしたか。

五島 私たちは、配給ではなかったが、弁当は、梅干

しの入ったにぎり飯、おやつは甘木を持って行ったも

です。

水口 私は、修学旅行は、京都、奈良でした。その時

お米を持っていった覚えがあります。また、五年生の遠

足が、強行軍であった事を覚えております。大山線御

嵩まで行き、そこから鬼岩へ行き更に八百津へ出て、八

ね。

声 「岐阜は七月十日だったね」「蘇原が燃えたのは

もっと後だったね。

野入 当時、勉強らしい勉強は、した覚えがないです

ね。若い人は、ほとんど戦争に行ってしまうので、当時

は農業ばかりで、僕たちは、羽場の方の農作業の手伝い

によくいかされた。仕事はよしの畑(陸稲)の草ひきが

主だったと思いますが……。

桜井 うん、僕も覚えがある。

野入 ここに最初に爆弾が落ちたのは、六月二十二日

でした。丁度この日も羽場の農家へ農作業の手伝いに行

くため、川崎から電車に乗ったのですが、乗って間もな

く警戒警報のサイレンが鳴り出したので、永田という女

の先生が「貴方たち、もう帰りなさい」と言われたので

電車を飛び降り急いで家へ帰った。そして防空壕へ入る

とすぐ爆弾がおちたのです。時間は短かったのですが

二トン爆弾で、大きなものでした。防空壕の中にいても

土が落ちて来て、まっ黒になってしまい、とても恐しか

ったですね。

水口 六月二十二日でしたが、麦刈りに行っていた時、

警戒警報が鳴ったので、急いで家に帰った。その途中、

百津の吊り橋を渡って、八百津駅へ着いたのですが、私

はその時、べた足で足が痛くて、本当に困ったものです

今から思うと、確かに強行軍でしたね。

片山 何年生だったか忘れたが、古井の発電所へ遠足

で行った事がある。その時は、桃太郎神社の処を通して

歩いて行ったが、先に行った五、六人の生徒が、皆から

はなれて、ほとんど先へ行ってしまい、なかなか帰って

こないで夜遅くなって家へ帰った事があった。古井から

歩いてですから大分道のりは、ありましたね。

野入 修学旅行はありませんでした。遠足で、やはり

古井の発電所へ行った事があります。その時、自転車を

一台用意して、車輪が一回転する毎に、リンリンと鈴が

なる仕掛けにしておいて、回転数を数えて古井までの距

離を計った覚えがあります。道は、今の中仙道を通って

行きました。

片山 当時、電車通学は禁止されていて、毎日歩いて

通学したから、足は確かに強かったですね。

司会 こちらの校下の場合には、爆撃にあつて見えるの

ではないですか。その爆撃の事について、何か思い出が

ありましたらお願いします。教科書なども焼けてしまっ

て、ないという人もあつたことと思いますが。

桜井 私が、四年の時でしたが教科書は全部学校にお

いてあつた。持ち物は、防空頭巾と、宿題のあるものだ

けを、持って通っていた。そのため、爆撃で学校におい

今三池のお墓の前に当時藪があつたが、その藪の中に

は兵隊や牛が、ぎっしり避難していた。私は、家の防空

壕の中へ避難したが、爆撃のすんだ後、外へ出て見たら

家の戸は全部吹き飛ばされ、家の中はつつぬけになつて

いた。そして家中すすだらけでした。お墓の前の藪の中

に避難していた兵隊や、牛は直撃を受けて影も形もなく

なっていました。又中仙道の三柿野一帯は家も何もなく

死体が、いたる処に、ゴロゴロしており、兵隊さんが死

体をこもりに包んで、車に運んでいました。本当に悲惨

なものでした。

司会 戦時色の強い時代になって、作業にかり出され

たりしたのですが、そういう事で何か思い出がありますし

たら、お話し下さい。

片山 当時、「明日の千兵より、今日の一兵」という

朝日新聞の社説を先生に読んで載き、非常に感激し、男

子全員岐阜の明德小学校まで少年兵

の試験を受けに行った覚えがありま

す。

片山 前渡を通過して草井の渡しへ

南京袋を持って重い自転車で乗って、

どんぐり拾いに行った覚えがある。

草井の方は、一日一升どんぐりを拾

うだけでよかったが私たちは、南京

袋一杯も拾わなければならなかつ



B29投弾破片

た。桑の木の皮むきもしました。

石黒 桑の木の皮むきは、グラフが作ってあって目方がきめられていた。集まった桑の木の皮は、奉安殿の前に積みあげられていた。カシボボは、草井の河原まで、集団で拾いに行った。

片山 草井の河原では、即製のほうきでカシボボをはき集めて拾って来たものです。カシボボは、武藤酒屋へ車で運んで行った。

石黒 「なんでこんなに拾わなければならないか」と子供心に反抗をしたものだった。その時、先生は、「お国のためだ」と言われてた。拾ったカシボボは、東舎(工作室)に積み込んだ。

桜井(均) 桑の木の皮むきは、僕たちの十八年頃が一番えらかったと思う。養蚕家の家へ皮むきに行かして貰ったし、親たちにも手伝ってもらったものだ。桑の木の皮は、目方がきめられており、一番上が、十二貫、次が八貫、一番下が四貫ときめられていた。僕の家は運悪く兄弟三人とも桑の木の皮を供出せねばならなかった。一日二十四貫もの皮むきは、本当にえらかったですね。

桜井 どんぐりを拾った時、青黒い様な、バサバサのパン(今のコッペパンの様なもの)をもらった覚えがある。どんぐりの粉で作ったパンだそうですね。

片山 出征軍人の農家の草ひきなど、農作業の手伝いにもよく行った。

四月二十五日お不動様のお祭に、小遣いをもらいました。

桜井(均) 四月二十五日の祭りには、多い人で五銭位小遣いをもらった。僕たちは、兄弟三人で五銭もらった。

片山 紀元二千六百年記念の祭りの時、おみこしは盛大だった。私が少年団に入った三年生の時だったが、先輩が花みこしを、つったものですね。三ッ池では、春祭りには、映画、獅子芝居などが行われましたね。

司会 その当時は、小遣いもそんなにもらえず、今の子の方が、ずつと恵まれているということですね。

石黒 その頃、一銭持って行くと、黒アメが七つ買えた。祭りというと、黒アメの他に、水、ニッキ棒(木の根)などを買って食べたものだ。私たちは、二、三銭位しかもらえなかったですね。五銭だと「穴あき銭」といってなか／＼もらえなかった。今の子は、千円ももらってもありがたいと思わない。当時とくらべると、今の子は幸せですね。

片山 私たちのころは、「勉強せよ」と言われたことはなかった。今の子は「勉強せよ」ばかり言われている。私の頃は、風呂の水汲みも、えらかったですね。

五島 今の子は又「仕事をしよ」と云っても、ようしないでしょうね。

司会 それから先生の思い出はありませんか。

桜井 一年、二年は村上先生に教えていただき、二年

石黒 とにかく、カシボボ拾いと桑の木の皮むきが一番えらかった。

司会 次に夏休みの思い出、お祭りなどの思い出について、お伺いしたいのですが、まず、泳ぎは木曾川ですか。

桜井(均) 三ッ池の中小屋の者は、木曾川へ泳ぎに行つた。北島の処で泳いだ。

桜井 その時に、西瓜畑へ入って西瓜を取って食べたものです。

桜井(均) 泳いだ後、集団で西瓜取りに行つて、家の人にもみつかつた時は、一番ひどかつたですね。

石黒 畑、全部西瓜を取ってしまったのだから、ひどかつたですね。

野入 僕たちは、三ッ池の裏の川とか、東島の池で泳ぎました。

司会 夏休みは、殆んど水泳などをして過したということですね。

片山 けれども、少年団でもよく狩り出されましたよ。

竹山 お墓のきもだめしをしたりしたね。水泳の時は北島の松の木に登ってゴイサギの卵取りをしたものですね。松の木からおりて来ると卵が割れて、ポケットの中がベチャベチャになっていた。

司会 お正月の小遣いはどうでしたか。

石黒 お正月は、小遣いはもらえなかったですね。

の終りから三年生にかけて、伏見先生が代用教員としてみえて教えていただいた。四年生には小森先生だったと思う。あの頃は、代用教員が多かつたですね。本校へ行ってからは、坪内先生だったが、あの先生にはよく叱られた。いつも掃除をさぼって帰って来ていた。

竹山 坪内先生は、今東京スクールに見えるはずですね。

野入 後藤準先生ですね。卓球など新しいことも教えていただいたがきつかつたですね。食糧難時代、大安寺川提を開墾して、麦を作ったがヒョロヒョロの小さな麦しか出来なかつた。それを見て下級生に「おぼけ麦だ」といって笑われたため、後藤先生が「お前たちがそんな麦を作るから、笑われたではないか」と言つて叱られたこともあった。

小林 後藤先生には、五・六年の二年間教えていただいた。六年生の時だったと思うが、教室で「名刺取」というのがあった。言葉使いが悪いと、名刺を一枚ずつ取り上げられたので、物を云うにも困つたものです。「おれ、手前、オス」などという、名刺を取り上げられた。

片山 名刺取りは、二・三年続いたと思いますね。後藤先生ばかりでなく、学校としてもあつたと思います。後藤先生は「お前の方は、竹藪が沢山あるから、ねぶしを持ってこい」とよく言われたものです。そ

それから先生の思い出はありませんか。

一年、二年は村上先生に教えていただき、二年

昭和後期

戦争終結の大詔発せらる

新報新聞

新爆弾の修吉に大御心
帝國四國宣言を受諾
畏し萬世の爲太平を開く

大御心を修吉に授け
皇國の運命を共にせん

國の焦土化忍びず
御事會議に賛き御心

國體維持に邁進
皇國の運命を共にせん

支拂制限せず
皇國の運命を共にせん

再生の道は苛烈
皇國の運命を共にせん

必ず國威を恢弘
聖斷下る途は一つ
信譽を常に失ふ勿れ



坂むいたむになっていた路学通

のねぶしで、よくたたかれました。

片山 浅野先生には、忘れものをした時教室のまわりを、はって歩かされた。そして教壇の所へ行くと、定木でおしりをたたかされた。又運動場を二十周走らされた事もある。えらかったですね。

竹山 あの頃は、ねぶし、金づち、松の木のかぶ、木刀などでたたかされた。びんたも、よくつられたものですね。

石黒 音楽の時間に、野村先生に木刀でたたかれたことがある。あの時は、みるみるうちにコブが出来た。痛かったですね。

竹山 あの時、僕は、七つたたかれたことまで覚えてる。

野入 三ッ池の人間は、余り泳げなかった。木曾川の小伊木河原で泳ぎの訓練があったが、泳げても、泳げなくても、後から川の中へ、突き落とされた。

司会 最後に、皆さんが過ぎられた学校生活と今とを比較して、今後の教育に対しての希望を述べて頂きたいと思えます。

桜井 子供一人一人には、相応の能力があるのだから余り「勉強勉強」と責めない方がよいと思う。今は、宿題もよく出される様だが、僕の頃は、余り出なかったですね。

片山 はっきり言って「かわいそう」と思っています。私

も「勉強せよ」という方ですが、やらせすぎのような気がします。

石黒 先生は「学校は勉強第一」と言われるが、今の子どもは、体格こそよくなっているけれども、中味はもやし程度ではないですか。

五島 私の五・六年頃は、よく「百字書き」というのをやらされました。今の子どもにも、もう少し字を書くことを一生懸命やって欲しいと思います。

水口 今の子は、勉強する機会が充分あって、幸せだと思います。

小林 家庭で親が子どもに押しつける物を言わせることは酷かも知れませんが、ある程度ことはの使い方のしつけはして欲しいものです。

野入 今の子は、学校の短時間の式の間にも倒れる子がいるが、もっと鍛えることが大切だと思います。

桜井(均) 勉強も大事だが、もう少し厳しいしつけをしてほしいと思います。

竹山 やはり、小学校時代に体力をつけるべきだと思います。

司会 本日は、長時間どうもありがとうございました。

昭和時代の学校長



第26代 服部俊郎校長



第28代 堀重教校長



第30代 宮脇健市校長



第27代 松野義人校長



第29代 野村義一校長



第31代 下川錦一校長



第32代 北折範治校長

昭和後期の歩み

石田 幸彦

敗戦による急転換

昭和二十年、大東亜戦争の終結は、我が国の政治はもとより、経済、文化、諸制度等、百八十度の転換をはかり、生活全般にわたって激しい変化をもたらした。

終戦が与えた教育への最大の課題は、戦時教育体制から平和とヒューマニズムを基調とする新教育への切り換えであった。

めまぐるしい管理政策

まず、昭和二十年十月「日本教育制度に対する管理政策」についての指令が出された。それは、軍国主義や国家主義的思想の普及の禁止であり、民主主義・自由主義を促進する方針により、教育の内容、教科書制度の改変、教職員の適格審査を命じ、不適格者を教職から追放したことである。

さらに、「国家神道、社寺に対する政府の保障、支援保全、監督及び公布の廃止」に関する指令であった。また、公の機関における神道的教育及び施設を禁止し、学校では「修身、歴史、地理の停止」を命令、それらの教科書の回収を命じた。

例えば、

- 学校の内外を問わず、軍事教練的色彩を二掃すること。
- 氏神などに団体参拝したり、団体奉仕はしないこと。
- 修身、国史および地理の授業を停止すること。などである。

教育使節団の来朝

昭和二十一年、日本の教育の当面する問題と教育改革のため、米国から教育使節団が来朝し、その結果、九年制義務教育の地方委譲、ローマ字の採用、教科書の民主化などを勧告した。

新憲法および教育基本法の立法化

時あたかも新憲法の公布により、教育の機会均等、義務教育の規定とその無償について明示され、次いで昭和二十二年三月、教育の憲法とも言われる教育基本法が、立法化された。その内容は……。

- 第一条 教育の目的
- 第二条 教育の方針
- 第三条 教育の機会均等
- 第四条 義務教育
- 第五条 男女共学
- 第六条 学校教育
- 第七条 社会教育
- 第八条 政治教育
- 第九条 宗教教育
- 第十条 教育行政等々である。

同二十二年三月、学校教育法が成立し、九年の義務教育を定め、所謂、六・三・三・四の学制が四月一日をもって発足するに至ったのである。

当時の回想

戦後の社会の混乱の中にあつて、教育制度も大きく変わり、本校の教育も混乱と半ば、空白の状態であつたと言える。

まず、当時の先生と言へば、耐乏生活を余儀なくされ、服装は依然として、国民服か軍服姿、モンペ着用といった恰好であつた。

授業での教材・教具など、今では及びもつかないお粗末なもので、教科書もミスプリントが多く、それも新聞用紙を流用し、刷り上げたタブロイド判で、勿論、写真やさし絵などなく、ただ細い針金でとじ合わせたペラペラのものであつた。

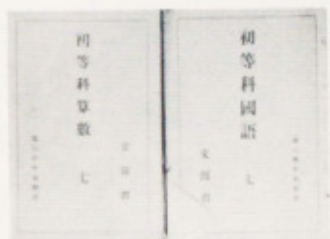
食糧も配給制度で、中には欠食児童も多く、栄養失調の者さえ多く見られた。

おやつと言へば、さつまいもかメリケン粉の蒸しパンが上等でさえあつた。

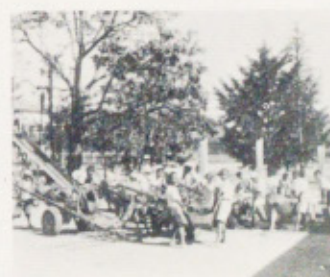
衣服はつづれを着、よごれが目立っても石けんがなく、のみ、しらみの発生源となり、女児の中にはしらみ退治のため、放出物資のDDTを髪の毛に撒布し、みるも哀れな状態であつた。

やがて味噌汁給食が始まり、児童は手に手に、薪や野

菜を学校に持ち運ぶなど、今から思へば隔世の感といった状態であつた。



終戦後当時の教科書



勤労作業に励む児童たち

学校沿革誌抜粋

昭和二〇

昭和二二、九、一一

昭和二二、五、三

昭和二二、四、一四

昭和二四、四、一

昭和二六、三、二〇

本部各務村山前元航空廠技術工員
錬成道場ニ臨時分教場開設

各務原分校落成式挙行

鶴沼町立鶴沼中学校開校式挙行

鶴沼国民学校ハ鶴沼町立鶴沼中
校ト鶴沼町立鶴沼小学校トニ学制

改革ノ結果分離ス
各務原分校独立第二小学校なる

北舎三教室各務原へ移築す（保育
園）

昭和二六、九、一八
昭和二五、四、一

昭和二六、四、一

昭和二八、七、二五

昭和二八、八、二〇
昭和二八、一〇、一五

昭和二八、一一、一一
昭和三〇、九、一五

昭和三〇、五、一七

昭和三〇、九、一

昭和三一、七、一

北舎六教室増改築（二階建）
町立保育園新設されたため南舎二
階建校舎の階下二教室を貸す

保育園児増加のため更に一教室貸
す
保育園舎平屋四室。落成式挙行
総工費 三百六拾万円也

施工 大成建設株式会社
校長住宅売却取払

中学校校庭西端に容積一八六坪の
貯水槽完成
総工費 三二万六〇〇〇円也

施工 大成建設株式会社

本校創立八十周年祝賀式挙行

本館二階建落成式挙行

二階建総坪数二百六十二坪
内訳 階上 一〇一、三三坪
階下 一六一、〇二坪

県教育委員会より体育保健研究校
として指定さる

運動場樹木移植並排水工事（堀返
し礫入）の為、育友会員六百名の
勤勞奉仕を受く
学校完全給食B型開始

昭和三一、三、一

昭和三一、五、一〇

昭和三一、二〇、一六

昭和三一、一一、五

昭和三一、一一、一三

昭和三三、五、三一

昭和三一、九、二

昭和三四、三、三二

昭和三六、五、一四

昭和三六、七、二五

昭和三七、一一、二四

昭和三八、四、一

給食人員 九八九名 専従者 三
名

廻転シート、二基育友会施設

岐大四年課程教生三〇名実習のた
め来校
本年度より運動会小学校、中学校
分離

県教委指定小学校保健体育研究発
表会開催

岐大二年課程教生三十四名実習の
ため来校

校舎塗装四校舎共
給食室カウンター改造

放送施設の全面的改造（ビクター
製品70w）と共に放送室を設定

校庭（中学校）にプール建設の起
工式挙行

プール竣工式挙行

初泳者 兵藤秀子女史
総工費 二九八万四二七〇円也

鶴沼町体育館兼講堂建設
総工費 一五二八万円也

総坪数 二五五坪
鶴沼、稲羽、那加、蘇原の四ヶ町